目次

プロローグ 6
第一章 忍び寄る叡智 20
第二章 交差した過去 67
第三章 急変 88
第四章 首魁と執行者 115
第五章 クロスベルの一番長い日 160
第六章 彼らの御子 190
第七章 太陽の神殿 223
エピローグ 273
あとがき 278

口絵イラスト：エナミカツミ、日本ファルコム
本文イラスト：かしわ

人が、その生命を全うした時。
善なる魂は、空の女神のもとへ召され、
罪を負った魂は、昏き煉獄へ堕とされると言う。

煉獄に、生者と亡者を隔てる煉獄門あり。
その門の左右には、煉獄に巣くう者が待っている。

彼らこそ、『悪魔』と呼ばれる存在であった……

プロローグ

クロスベル市から北へ、一本の街道が延びていた。
マインツ山道と呼ばれるその街道は、山肌を幾重にも蛇行し、やがて鉱山町マインツへとたどりつく。
街道のそばには、いくつもの清流がせせらぎ、魚影を求めて、多くの釣り客が訪れることでも知られていた。
だが街道の途中に、目立たぬ分岐点があることを知る者は少ない。
分岐点を西に進めば、さらに細く、険しい道が続く。
辺りは、日中でも霧におおわれ、昼なお暗い。
しかし道を進むうち、やがて霧の中から、五百年もの間うち捨てられた聖なる遺跡……月の僧院が忽然と姿を現した。
その遺跡に……

「……ここに亡霊が出たのか？」
ロイド・バニングスは、霧の中を泳ぐように進んだ。

十八歳。栗色の髪。まだ少年の面影が残る横顔。
俊敏そうな肉体を包むジャケットには、クロスベル自治州警察の印が縫いつけられている。
クロスベル警察に創設されてわずか数ヶ月の新部署、特務支援課のリーダー格は、そびえたつ月の僧院を見わたした。
「たしかに不気味だけど、亡霊なんて本当にいるのか？」
その問いに、青灰色の髪をなびかせた少女がうなずいた。
「でも警備隊の話だと、見たこともない魔獣が出現したらしいの」
理知的な瞳を閃かせたのは、エリィ・マクダエル。
同じく十八歳の、特務支援課の一員である。
エリィも、冷静な表情を強ばらせて、周囲を警戒していた。
「数日前、警備隊は、その亡霊のような不思議な魔獣と遭遇……けど応戦はしたものの、歯が立たずに、すぐ退散したって話よ」
「それで俺たちに支援要請が？」
ロイドは、呆れて顔をしかめた。
「警備隊なら、装甲車や重火器だって持ってるじゃないか。その彼らが逃げて、俺たち警察に後を任せるなんておかしな話だよ」
すると後ろから、くっくっくっ……と、笑い声が聞こえた。
「おかしいことが罷り通るのが、このクロスベルだぜ」

たくましい長身。赤い髪。
特務支援課最年長、二十一歳のランディ・オルランドは、割り切った表情で肩をすくめてみせた。
「警備隊も面倒になったんだろ。本来、あちらさんは国境警備が任務だ。幽霊退治に本腰を入れる筋合いはない」
「だからって……そんなの怠慢じゃないか」
「怠慢も罷り通っちまうのが、クロスベルだろ」
そう言うランディ自身、警備隊から特務支援課に移籍した男である。
だからこそ警備隊の怠慢を、最もよく知っているのだろう。
無論、ロイドもその怠慢……いや、クロスベル自治州に蔓延る歪みを、よく知っている。
エリィも半ば諦めて、すぐ傍でたたずむ仲間に呼びかけた。
「ティオちゃん……何か感じる？」
と、呼ばれたのは、青みがかった髪の少女。
杖を握りしめ、じっと何かを捉えようとしている。
その超然とした表情がぴくりと動き……ティオ・プラトーはまぶたを開いた。
「……不思議な波動を感じます。どうやら屋上に見えている、鐘のあたりから……」
見上げれば、霧の中から、月の僧院の最上層が突き出ていた。
いくつも立ち並ぶ尖塔の中心に、鐘楼が見える。

ティオはそれを、杖の先で指し示した。
「わたしが感じる波動には、歪みがあります。なにかこう……世界の法則とは相容れない……違和感を伴う力です」
「違和感か……」
ロイドは、ティオの微妙な判断に口元を引き締めた。
ティオは最年少の十四歳だが、常人の数倍の感応力を持っている。
彼女が、この月の僧院に歪さを感じたのなら、それは確かに異変が生じているということのだ。
「とにかく調べてみよう。だいたい幽霊なんて……」
言いながらロイドは、僧院の門を押し開いた。
ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、と朽ちかけた門が悲鳴をあげ、僧院の内部が露わになる。
同時に、僧院の中から凍るような冷気が吹き上がってきた。
「な、なにこの風……」
エリィがぞくっと身震いし、腰の武器に手をかける。
だがロイドは、風よりも、その空間そのものに戦慄していた。
「ここは……」
ランディとティオも、すぐに気がついた。
彼らが侵入したのは、どうやら礼拝堂らしき空間である。

正面中央には祭壇が据えられ、数百人の信者が収容できるほど広い。
しかしそこに、ロイドたちが崇める空の女神の気配は、微塵も無かった。
四方の石壁も、床の石畳も、陰鬱な色で統一され、ロイドたちが知る七耀教会とは、あまりにも違いすぎる。なにより……
「……なんて場所だ」
ランディが、吐き捨てるようにつぶやく。
礼拝堂の床いっぱいに、巨大な紋章が描かれていた。
六枚の翼と、眼球をモチーフにしたそれは、毒々しい色で描かれ、見た者を圧する雰囲気を醸し出している。
「……血痕だ、恐らく」
紋章のあちこちに付着した黒い染みを見つめ、ロイドはぎりっと奥歯を噛んだ。
エリィは、数歩退いて、辺りを見回した。
「ここ、僧院だったんでしょ？　どうして血痕なんて……」
「さあな。ただ、ここは礼拝堂じゃなく……」
言いかけたランディに続いて、ティオが独白した。
「……儀式の間でしょう。それもなにか邪悪な儀式の」
その時、突如……ロイドたちの頭上で、鐘が鳴り響いた。

からーん……からーん……からーん……

ティオが波動を感じた、あの鐘楼から、何度も音がこだましたのだ。
「ま、まさか！」
エリィが戦慄するのも無理はない。
五百年前の遺跡である。
誰もいるはずはなく、鐘が鳴るはずもない。
しかしロイドたちの目前にも、すでに異変が顕現していたのだ。
「なんだっ！」
床の紋章に、渦巻きのような波動が生じた。
波動は、びりびりと大気を震わし、電光を放っている。
その電光をまとうようにして……無数の咆吼が現れた。
「亡霊っ……！」
ロイドは、思わず驚愕を漏らした。
虚空に飛び出してきたのは、まさに亡霊じみた、黒い影たちだったのだ。
中世じみた僧服をひるがえすそれは、血走った眼光を瞬かせている。
たしかに、『見たこともない』魔獣だった。
「強度三十！　魔獣の名称、不明っ！」

ティオが、杖を構えて叫んだ。

「有効率一〇〇%以上の属性は、時、空、幻だけです！　気をつけてください！」

この世界には、七耀石から生まれる七つの力がある。

地、水、火、風、時、空、幻。

だがティオの解析によれば、目の前の亡霊じみた魔獣に効力を発揮するのは、そのうち三つの属性だけらしい。

戦術を限定され、ロイドも歯噛みした。

「手強いらしいな！」

ロイドは、急迫する魔獣に、両腕の衝撃警棒を叩きつけた。

犯罪者と、その凶刃を一撃で同時に叩き折る、ソードブレイカー。

その鋭い形状が、亡霊を斬り裂くかに見えたが……

「なにっ……？」

ソードブレイカーに手応えは、ない。

まるで幻影を殴ったかのように、衝撃警棒は空振りするだけだ。

ランディも亡霊めがけ、得物を振り下ろした。

「喰らいな！」

彼が振るったのは、長大な斧槍である。

その先端は、鎚と呼べるほど重々しい。

たとえ防具を着けた相手でも、強力な衝撃を与えるという武器、オーガクラッシャー。

しかしこれも、亡霊にはかすりもしない。

エリィも、両手に構えた導力銃を連射した。

「まさか本当に亡霊っ……？」

彼女の武器は、帝国ラインフォルト社製の低反動銃を改良し、火力と命中性を高めた傑作、ムーランルージュ。

しかも長銃身を備え、長射程化にも成功した逸品だ。

だがいくら撃ちこんでも、やはり弾丸は亡霊を素通りしていく。

ティオが、杖を構えて呻いた。

「なるほど……物理攻撃も効かないようですね。道理で警備隊が撤退したはずです」

ロイドもいったん後退して、うなずいた。

「だったら、ここは……」

と、亡霊たちが一斉に動きを止めた。

空中からロイドたちを見下ろし、眼球を閃かせる。

その途端、耳障りな異音が、礼拝堂に響き渡った。

「つあっ……！」

禍々しいこだまが、ロイドたちの鼓膜を襲う。

さながら煉獄に堕ちた、亡者たちの叫びのような歌が、わんわんと反響したのだ。

「頭が……割れそうだぜ……くっ……」

「なんて手を使うのよ……」

ランディとエリィは、苦悶を露わにして、棒立ちになった。

歌は、耳障りなだけでなく、四肢にまで痺れを及ぼしている。

そこへ亡霊たちが、死肉に群がる禿鷹のように、一斉に襲いかかってきた。

「来るなっ！」

ロイドは、左右のソードブレイカーを振り回して抗うしかできない。

ティオも苦悶しながら、仲間たちに叫んだ。

「……やはり戦技と導力魔法で倒すしかないようです！」

ロイドたちは、一瞬だけ視線を合わせた。

創設されて、わずか数ヶ月とは言え、ロイドたちの間にはもう、阿吽の呼吸ができている。

まず動いたのは、エリィだった。

「態勢を立て直しましょう！　イノセントアーク！」

発動したのは、空属性の回復導力魔法。

エリィを中心として黄金の光が瞬くと、ロイドたち全員の痛みも、痺れも消え失せた。

間髪入れず、ティオが杖を掲げた。

「こちらの番です、ダークマター！」

ティオの手にあるのは、漆黒の魔導杖シュレーディンガー。

導力器の普及を図るエプスタイン財団が開発したそれは、蓄積した導力を一点集中で噴出させる力を持つ、高出力魔導杖である。

その先端から顕現したのは、空属性の攻撃魔法。

波紋のように拡散するや、浮遊する亡霊たちをまとめて捕捉し、中心点に向けて、有無をいわさず、引き寄せた。

その重力に捕らわれ、亡霊たちは悲鳴をあげている。

物理攻撃は効かない彼らでも、空属性……つまり空の女神の力には、痛みを感じるのだ。

そして一点に集められた亡霊たちを包囲するように、ロイドとランディが走った。

「まとめて潰そう、ランディ！」

「いつでもいいぜ！」

叫んだ瞬間、ロイドの衝撃警棒が、ランディの斧槍が、紅蓮に輝く。

二人は同時に疾走し、亡霊たちの只中へ突進した。

「せいっ！　はあっ！」

紅蓮をまとったソードブレイカーが、亡霊を打つ。

「これでどうだ！」

同じくオーガクラッシャーが、亡霊を薙ぐ。

戦技と呼ばれる、研鑽に研鑽を重ねた必殺の攻撃は、物理攻撃を超えた威力を発揮し、亡霊たちを倒していく。

ましてロイドとランディの連携は、逃げる間も与えず、やがて亡霊たちは、ひとつ残らず打ち砕かれ、七耀石の欠片に変じた。

「……やったか……」

ロイドは大きく呼吸すると、辺りを見渡した。

もう、亡霊たちが現れる気配はない。

だが四人とも、同じ感慨を抱いて、顔を見あわせた。

「……覚えてるかい？　星見の塔に行った時のことを」

ロイドは、クロスベル市の南にある遺跡の名を出した。

「あそこも、ここ同様、五百年前の遺跡だ。そして同じように、上位の属性しか効かない敵が出現した」

「ええ、すごく似てるわ。なにか意味があるのかしら……」

エリィも、不思議そうに視線を巡らすと、ランディが上を指さした。

「その答えは、鐘楼にあるんじゃねえか？　ほら、ここへ入る前にティオすけが波動を感じたって言う……」

礼拝堂の隅には、上層へ向かう階段がある。

それを見てティオは、こくんとうなずいた。

「行きましょう、鐘楼へ」

ロイドたちは慎重に、階段を昇っていった。

しかし昇ってみても、鐘楼には誰もおらず、ただ鐘の音の余韻が響くだけだった。

「さっきの鐘の音も、あの亡霊の仕業なのかな……」

ロイドは、そっと鐘に近づいてみた。

うわん……うわん……

古びた鐘は、なおも音を響かせ続けている。

ティオは、怪訝な視線で鐘を凝視した。

「……この共鳴音が、何らかの『場』を作っているようです」

「どういうこと？」

首をかしげるエリィに、ティオも眉をひそめた。

「詳しい原理は判りませんが……この鐘が、何らかの『力場』で遺跡を包み込んでいるのが感じられます。恐らくその『力場』が、あのような亡霊を生み出したのかも」

「じゃあ、この鐘の共鳴を止めたら、亡霊ももう出ないのか？」

ロイドたちは、しばし顔を見あわせたが、試してみるしかない。

四人は、鐘を囲むよう、配置についた。

うわん……うわん……うわん……

なおも共鳴を続ける鐘に、ロイドは手を伸ばした。

「いくぞ、せーの……」

四人の腕が、四方向から鐘を押さえた。

その途端、共鳴は止み……

しばらくすると、辺りの霧が晴れてきた。

雲間から光が射し込み、やがて青空も広がっていく。

ティオは、新鮮な空気を吸うように、深呼吸してみせた。

「……どうやら、遺跡全体を包んでいた『力場』も消えたようですね」

「……ってことは、普通の空間に戻ったのか？」

ロイドが問うと、ティオは黙ってうなずく。

鐘楼から見下ろせば、月の僧院の全貌が見渡せた。

霧に包まれていた時は不気味に思えたが、こうして日の光に当たれば、ロイドたちも声を失うほどの絶景である。

「しかし、なぜこんなカラクリが仕組まれていたんだ？　五百年前から、ずっとこうして鐘は『力場』を作っていたのか？」

ロイドの疑問に、ティオも杖を握りしめた。

「そこまではわたしにも……ただ、この鐘が何らかの古代遺物である可能性は高いですね」

ティオの言葉に、エリィもあらためて鐘を見つめた。

「古代遺物……一二〇〇年前に存在していた、古代ゼムリア文明の遺物ね。不思議な力を持っていて、七耀教会が管理しているそうだけど……」

ランディも、胡散臭そうに鐘を横目で見た。

「ああ。ヤバい力を持っている遺物は、七耀教会が回収してるって噂も聞くな。現代の技術では解析が不可能だとか……」

ロイドは、混乱した頭を整理するように、前髪を掻きあげた。

「いったいここはなんなんだ……星見の塔との関係は……？」

その問いに答えられる者は、誰もいない。

それでもロイドは、胸に渦巻く不可解さを口にした。

「判らないことだらけだよ。五百年前、ここでいったい何があったんだろう……」

まぶたに残るのは、不気味な紋章と血痕。

ロイドの、捜査官としての勘が、しきりに疼いていた。

何かが、このクロスベルで動き始めている。

自分たちが見たモノは、氷山の一角に過ぎないと。

そしてロイドは、数日後、もう一度、同じ問いをくり返すことになる。

五百年前、いったい何があったのだろうと……

第一章　忍び寄る叡智

クロスベル自治州。首都クロスベル市。
ゼムリア大陸西部に位置するこの街は、大陸有数の交易都市として知られている。
エルム湖に面した内陸港も持ち、港湾区には、多くの商船が出入りしていた。
だがさすがに深夜となれば、船の往来も少ない。
人影もまばらな港湾区には、導力の明かりだけが灯っている。

その港湾区に、黒月貿易公司クロスベル支社があった。
表向きは、ごく普通の貿易商社。
しかし彼らの正体が、カルバード共和国、東方人街の犯罪組織、《黒月(ヘイユエ)》であることは、周知の事実だった。
そして支社を預かる若き策謀家は……

「ルバーチェが復活している？」

支社長、ツァオ・リーは、自らの執務室で眉をひそめた。
冷静沈着で知られるこの男が、そのような戸惑いを見せることは、滅多にない。
だが彼の腹心、ラウは、声を潜めて続けた。
「……はい。ここ一週間で、我々が潰した三つの密貿易ルートが再建されました。こちらも妨害したのですが、思っていた以上に抵抗が激しく……」
「ふむ……妙ですね」
ツァオは、尖った顎を細い指で撫でた。
「まさか彼らに、そのような体力があったとは。例の競売会(オークション)の一件以来、おとなしくなるかと思えば……ルバーチェ商会も案外、やるものですね」

ルバーチェ商会。
このクロスベル市に根を張る、貿易商社である。
無論、そちらも表向きに過ぎず、実情は密貿易組織だ。
クロスベルの政財界に巧みに取り入り、共和国から進出してきたツァオたち《黒月》とは、敵対関係にある。
しかし三週間前、ルバーチェ商会の権威は失墜した。
彼らが例年開催していた、黒の競売会(シュヴァルツ・オークション)なる闇取引が、クロスベル警察特務支援課によって中止に追い込まれたのだ。

会場を提供していた自治州議会議長ハルトマンは、ルバーチェの不手際に烈火の如く怒り、その政治的、経済的支援を打ち切ったとも噂される。

もはやルバーチェ商会は潰えた……とツァオは安堵していたのだが。

「もしや陣頭指揮は、あの人食い熊が？」

ツァオは、ルバーチェ商会で最も危険な男を思い出した。

営業本部長、ガルシア・ロッシ。

元猟兵にして、幾多の戦場で活躍した戦闘のプロである。

しかしラウは、首を横に振った。

「いえ……ガルシアの姿はなく、配下の構成員だけだったそうです。それも軍用犬は連れておらず、数名程度だったようで……」

「ますます奇妙ですね。構成員一人一人の戦闘力なら、我々《黒月》の方が上のはず……例のラインフォルト製の重機関銃でも持ち出したのですか？」

「いえ、確かに武装もしていたようですが……それ以上に、個々の戦闘能力が大幅に向上していたとの報告です」

「なるほど……個々の戦闘能力ね」

ツァオは、ぎしりと椅子に身を預けた。

ルバーチェ商会の構成員は、所詮、地元のマフィアに過ぎない。

一方、《黒月》の構成員の多くは、東方に伝わる武術を修めている。

それを上回るとなると……

「ルバーチェが、新たにどこかの猟兵団を雇った様子はありません。構成員に戦闘訓練を施したとも思えない……」

「もしかしてあいつら、我々の知らない切り札を持っていたのでしょうか？」

ラウの問いに、ツァオは深くうなずいた。

「ええ、間違いないでしょう。しかも私の見立てでは……尋常な切り札ではなさそうです。それこそ、あの《銀》殿のような、現状を一気にひっくり返せるほどの鬼札かもしれません」

「くっ、一体どんな手を……」

銃声が轟いたのは、その時だった。

しかも単発ではなく、地響きのような連射音。

着弾の衝撃は、黒月貿易公司のビルを震わせ、ガラスが砕ける音も響く。

ラウは、あわてて背後を振り返った。

「今のは……！」

「……噂をすれば影、ですか」

階下からは、男たちの怒声。

銃声と、剣戟の音が交叉している。

すぐに、執務室の扉が開き、ツァオの部下が飛び込んできた。

「支社長！　ルバーチェらしき連中が殴り込みを！」
「ほお……で、数は？」
「恐らく十数名……ガルシアの姿は見あたりません！」
報告を聞いてなお、ツァオは椅子に座したままである。
ラウは、顔に怒気を表し、部下をどやしつけた。
「返り討ちにしちまえ！　警察は心配するな！　正当防衛で何とでもなる！」
「そ、それが……」
部下が口ごもった時、機関銃の音が近くなった。
同時に、別の部下が血相を変えて、転がりこんでくる。
「い、一階が突破されました！　こちらに来るのは時間の問題かと……！」
「どういうことだ！　みんな、何をしている！」
ラウが怒鳴っても、部下の動揺は治まらなかった。
「歯が立たないんです！　ルバーチェの奴ら、表に停めていた、うちの車をひっくり返したんですよ、素手で！」
その報告に、さすがのラウも表情を強ばらせた。
ツァオも、ようやく眼鏡を外して見せた。
「……やれやれ。どうやら頭脳派を気取っているワケにも行かないようですね」
「ツァオ様、まさか……」

ツァオは、ゆっくりと髪を掻き上げた。

その目には、いつもとは異なる強い光が宿っている。

ツァオ・リーは、気負いもせず、椅子から立ち上がった。

「……出ますよ、ラウ。この程度で会社を潰されては、《黒月》の名折れ……東方人街を支配する我らの力、存分に見せてやりましょう」

思わず、ラウは一歩、後ずさる。

腹心の彼ですら滅多に見たことがない、真のツァオがそこにいた。

＊＊＊＊

『黒の競売会』事件から三週間。

ロイドたちは、平穏な時期を過ごしていた。

ルバーチェ商会は、ハルトマン議長からの支援を断たれ、信頼の回復に躍起らしい。

あれほど強固に思えたルバーチェの地盤は、脆くも崩れ去ったのだ。

それをロイドたちが、偶然とは言え、成し遂げてしまった。

事情を知る者の中からは、特務支援課こそ、クロスベル警察で最も頼りになる部署……と評価する声も上がっている。

だがロイドたちの日常は、特に変化もない。

この日も、ウルスラ街道沿いを一回りして、昼過ぎに特務支援課に戻ってきた。

唯一の、大きな変化は……

彼らの家に、一人の少女が増えた、ということだろうか。

「あ、おっかえりー！」

ロイドが、特務支援課の扉を開けたとたん、その少女が飛びついてきた。

緑色の髪をなびかせた、華奢で、元気な笑顔。

年齢は不明。恐らく九歳ぐらい。

どこで生まれたのか、今までどんな生活をしていたのかも、記憶はない。

彼女と出会ったのは、黒の競売会。

一番人気の競売品、ローゼンベルク工房の人形が入ってる……と思われたトランクの中で、彼女は眠っていた。

そのトランクの中にいた理由も不明。

唯一、彼女が知っているのは、自分の名前くらいである。

謎の少女、キーアを、ロイドは優しく抱きしめてやった。

「ただいま、キーア。いい子でお留守番してたかい？」

「うんー　今日はね、図書館で借りてきた本、三冊も読んじゃった！」
「へえー、そりゃあすごいなあ」
ロイドが言うと、横からエリィも割り込んできた。
「ちょっとロイド！　一人だけキーアを抱きしめるなんてズルいわよ！」
「い、いや俺は別に……」
「私だってキーアとじゃれたいのに！」
するとティオも、ぐいとロイドを、少女から引き剥がす。
「独り占めは許しません。そもそもキーアに一番なつかれるなんて、ロイドさんはうらやましすぎます！」
エリィもティオも、かわいい妹ができたかのように、キーアと遊びたがっている。
だがランディは、肩を揉みほぐして呻いた。
「やれやれ。みんなして、キー坊の取り合いか。大人げない……」
そう言うと、エリィとティオがむっとして視線を突き刺した。
「じゃあランディは、キーアがかわいくないのっ!?」
「キーアのかわいさを否定するとは、ランディさんも見る目がないようですね」
しかしランディも、きょとんとするキーアの髪を優しく撫でてやった。
「そんなことないさ。俺も人のことは言えないよ。なあ、キーア？」
「ちょっ――　だから独り占めしないでって！」

「ランディさん、ぬけがけはズルいです！」
その騒ぎをよそに、ロイドは導力ネットワークの端末を立ち上げた。
今日も警察本部から送られてきた支援要請を、克明にメモしていく。
「えーと……鉱山町マインツから依頼が来てるな。旧市街では少年グループのケンカ発生、それ以外は……特になしか」
ロイドが、思わず失望のため息を吐くと、エリィたちも沈黙する。
彼らは、ずっと待っているのだ。
キーアの身元情報が、遊撃士協会から送られてくるのを。
しかし三週間経った今でも、まったく連絡はない。
大陸中にネットワークを持つ遊撃士協会ですら、キーアに該当する行方不明者の情報は持っていなかった。
それでも当のキーアは、気にする様子もない。
毎日、ツァイトと戯れ、本を読んで、留守番を続けている。
ここでの生活に慣れてきた、それだけがロイドたちの慰めであった。
ロイドは、端末を切って、嘆息した。
「しかし遊撃士協会ですら判らないんじゃ、手の打ちようがないな。いったいキーアは、どこ

から来たんだろう……」
「親御さんは、捜索願を出してないのかしら？」
　エリィが不思議がると、ロイドもしばし熟考した。
「ああ、腑に落ちない点は多いよ。もしかしたら……」
　と、言いかけた時。
　ロイドのエニグマ……第五世代戦術オーブメントが鳴り出した。
結晶回路を組み込み、導力魔法を発動するエニグマは、導力ネットワークを介した通信機能も備わっている。
　そのスピーカーから、やけにあわてた声が聞こえてきた。
『もしもし！　ロイド！　今、どこにいるっ？』
「誰だ、その声は？　……ああ、ヨナか」
　ロイドは、拍子抜けしたように応えた。
　相手は、ヨナ・セイクリッド。
　クロスベル市の地下区画に潜むハッカー少年である。
　かつてエプスタイン財団でシステムエンジニアとしての英才教育を受けたものの、悪戯が過ぎて財団を飛び出した……という経歴の持ち主だ。
　今では、導力ネットワークから拾ってきた情報で稼いでいるのだが……
「いったい何だい？　また地下区画に魔獣でも出たのか？」

　ロイドが問いかけると、ヨナは呆れた声を響かせた。
『そんなんじゃねーよ！　つーか、あんたら、まだ気づいてねえのかよ！』
「気づいてない？　なんのことだ？」
『ああ、やっぱり！　道理で落ち着いてるワケだよ、まったく！』
　ヨナは、ひと呼吸おいて、声を落ち着かせた。
『港湾区に、黒月貿易公司ってのがある。知ってるよな？』
「《黒月》……もちろんだ」
　ロイドも、声を低めた。
　無論、黒月貿易公司が、貿易業を隠れ蓑とした東方人の犯罪組織だということも、水面下でルバーチェ商会と相争っていることも承知だ。
　ヨナは、その名を強調して続けた。
『その《黒月》のクロスベル支社が、ゆうべ、何者かに襲撃されたらしいぜ』
「なんだって？」
『しかも防戦一方だったらしい。なんとか撃退したが、《黒月》も苦戦したらしいぜ』
　ロイドは、仲間たちにも視線を送る。
　エリィたちも、ロイドのエニグマに耳を近づけ、報告に聞き入っていた。
『《黒月》の建物は、めちゃくちゃだよ。まったくそんな大事件も知らないなんて、特務支援課もたいしたことねえなあ』

「組織犯罪は、捜査一課の領分だ。うちに情報は下りてこない」
『だからこうやって教えてるんだよ。だけどこれは……』
「ああ、間違いなく、犯人はルバーチェ商会だろう。しかし……」
黒の競売会の一件以来、ルバーチェ商会の活動は弱まっていた。
ハルトマン議長とのパイプを断たれ、《黒月》には密貿易ルートをいくつも潰された、との噂もある。
だからこそ反撃して、自分たちの力を誇示したのかも……
「ありがとう、ヨナ。また何かあったら頼む」
『お礼はピザで返せよな！　デラックス全部乗せ、ラージサイズで！』
ロイドは通話を切って、仲間たちを見つめた。
「……だそうだ。どう思う、みんな？」
「たしかにルバーチェ商会の仕業だろうけど……やり方が乱暴すぎない？」
エリィの言葉に、ロイドも深くうなずいた。
「俺もそう思う。奴ら、表だっての暴力沙汰は避けてきたからな」
たしかにルバーチェと《黒月》は、以前から抗争関係にある。
しかしルバーチェの背後には、エレボニア帝国に与するハルトマン議長の『帝国派』が控えていた。
一方、《黒月》は、カルバード共和国から来た組織である。

お互いが真正面からぶつかれば、帝国と共和国、ふたつの大国の代理戦争になる可能性が高かったのだ。
ロイドは、長く続いたその状況が、すでに終わったことを察した。
「競売会の一件で、ハルトマン議長は、ルバーチェから離れている。もはや《黒月》は、『帝国派』を警戒する必要もない……」
「でも、そうだとしたら、打って出るのは《黒月》よね？」
エリィの問いに、ランディが唇をひん曲げた。
「ルバーチェも追い込まれてるんじゃねえか？　ここらで《黒月》を叩いて、自分たちの地位を固める……ありそうな話だぜ」
たしかに、説得力のある意見だった。
しかしロイドは、なおも腑に落ちぬものを感じていた。
「だけどルバーチェの実働部隊を預かるのは、あのガルシア・ロッシだ。元猟兵だよ。戦闘指揮に長けている分、そういった軽率な行動は控えると思うんだけど」
「まあ……たしかに」
ランディも、納得せざるを得なかった。
彼自身も、元々は猟兵の息子として生まれた男だ。
警備隊に入る前は、戦場を駆け巡ったこともあり、ガルシアの心理を最もよく理解している、と言ってもいい。

ロイドの推理に、ティオも静かに同意した。

「実際の戦場を知る者ほど、戦闘を忌避する傾向はあります。やはりその襲撃、違和感を覚えますね」

「とにかく、現場に行ってみよう。《黒月》とルバーチェ商会が全面抗争に入ったとなれば、落ち着いちゃいられない」

そこまで口にして、ロイドは疲れたように嘆息した。

「問題は……捜査一課が、俺たちを現場に入れてくれるかどうかだ」

＊＊＊＊

「こいつぁ、ひでえな」

現場に到着するなり、ランディが呻く。

港湾区に位置する黒月貿易公司は、クロスベル警察によって封鎖されていた。

建物は黒く焼け焦げ、壁には無数の弾痕が空いている。

ロイドも、建物をざっと眺め、乱暴な襲撃ぶりに眉をひそめた。

「ここまでやるとは……もしルバーチェの連中なら、よほど追い詰められてるな」

「それにしても無鉄砲よ。相手は《黒月》だもの」

エリィも、声をひそめてささやいた。

「たとえここで《黒月》を倒したとしても、相手はカルバード共和国の東方人街に根を張ってるのよ。補充要員は、いくらでも送り込めるわ」

「消耗戦なら、《黒月》に分がある。それでも攻め込んだ理由があるはずだ」

ロイドは言って、クロスベル警察が張った制止線をくぐった。

「とにかく事情を聞こう。通させてもらうよ」

ロイドは、顔なじみの警官に挨拶すると、建物へ入った。

半ば廃墟と化した、黒月貿易公司の中へ。

「こちらとしては、まったく身に覚えがないんですよ、ダドリー捜査官」

支社長室から聞こえてきたのは、やけに若い声だった。

黒月貿易公司、クロスベル支社長、ツァオ・リーは、難を逃れた三階のソファに座り、捜査一課のエースと対峙していた。

「たしかにうちは、ルバーチェ商会から目の仇にされています。しかしそれはあくまで合法的な商売上のこと。襲われるような、後ろ暗い理由はありませんよ？」

「なるほど……」

言いながらアレックス・ダドリーは、苦い顔を見せた。

捜査一課の敏腕捜査官としては、これを機に、《黒月》の非合法活動のしっぽをつかむつもりだった。

だがそれを簡単に暴露するほど、ツァオも愚かではない。

「お調べになるなら、どうぞご自由に。しかし昨夜の襲撃で、二階から下はすっかり焼けてしまいました。何も出てこないとは思いますがね……」

ツァオは、とても襲撃を受けた後とは思えぬ余裕を見せている。

ダドリーも、事情聴取の糸口をつかみかねていた時……

「失礼します。クロスベル警察、特務支援課、ロイド・バニングス捜査官です」

名乗って、ロイドたちが入室した。

その姿に、ダドリーは迷惑げな表情を浮かべている。

「お前たち、なぜここに……！」

この事件を、あくまで捜査一課で解決したかったのだろう。

だがツァオ・リーは、興味深げにロイドたちを招き入れた。

「これはこれは……捜査一課の次は、特務支援課の皆さんのお出ましですか？　ルバーチェを壊滅寸前に追いやったお手並み、拝見といきましょうか」

と言って、ツァオは嬉しげに微笑む。

その表情を見て、ダドリーも仕方なく席を立った。

「ではツァオさん、私はこの辺で……」

「ご苦労さまです。また何かありましたら、いつでもどうぞ」

ダドリーは、そのまま支社長室から出て行こうとする。

しかしすれ違いざま、彼はロイドにそっと耳打ちした。

「悔しいが、ここはお前たちに任せる」

「えっ」

「この支社長は食えない奴だ。せいぜいがんばるんだな」

尋問がはかどらず、ダドリーは、苦虫を嚙み潰したような顔だ。

しかしロイドも、ツァオとは初対面ではない。

ダドリーの苦渋も察しつつ、小さくうなずいてみせた。

「……わかってます」

ダドリーが出て行くと、ツァオは穏やかな声で席を勧めた。

「さあどうぞ。しかし話せることは、今、すべてお話ししたところでしてね。あまり実にな

ことは、お教えできないかもしれませんよ？」

ツァオは、やはり余裕たっぷりに微笑んでいる。

彼にとって、警察をはぐらかすことなど、お手の物だろう。

そこでロイドも、ソファに座るなり、核心に踏み込んでみた。

「ツァオ・リーさん……単刀直入にお聞きします」

「ほお……」

「重機関銃で武装した相手を、どうやって撃退したのです？」

ツァオも、一瞬口ごもる。

だがすぐに彼は、常の口ぶりを取りもどした。

「……ま、こちらも少々、危ない技は使わせてもらいました」

「東方人に伝わる武術、ですか？」

「ええ、そのようなものとお考えください」

「その東方武術をもってしても、あなた方は二階まで攻め込まれた。負傷者も多数、病院に運ばれたと聞いています。相手はさぞ屈強な連中だったんでしょうね？」

ロイドは、たたみかけるように問い詰めた。

あまりに腑に落ちない点が多すぎる襲撃だった。

なにかしら裏がある……そう思って、すでに質問は組み立てていたのだ。

しかし意外にも、ツァオは素直な口ぶりで答えてくれた。

「……屈強と言うより、常軌を逸しておりました」

「どういうことでしょうか？」

「弾が尽きた後は、凄まじい腕力で重機関銃を振り回し、こちらの攻撃をすべて見切るほど動きが速かった……」

その言に、控えていたエリィも絶句した。

「重機関銃を振り回したですって？」

「東方武術を凌ぐほどの腕か……だとすると……」

ランディが言いかけると、ロイドは先を続けた。

「我々が知っている限り、ルバーチェ商会でそれができる人間はただ一人。ガルシア・ロッシだけです。ということは、彼も襲撃に加わっていたのですね？」

それが立証できれば、ガルシアを逮捕できる。

しかしロイドの思惑とは裏腹に、ツァオは顔を左右に振ってみせた。

「いいえ、彼の姿はまったく……」

「ガルシアではない？　それは不可解ですね。ではいったい何者がこのような襲撃を成し遂げたのですか？」

「私にも見当がつかないのですよ、皆目ね……」

ツァオは、すうっと目を細めた。

「しかし……そこを衝いてくるとは、さすが特務支援課ですな」

「と言いますと？」

「正直、今回の襲撃は、私にとっても想定外の出来事でした。あなた方の捜査を受けて以来弱体化したルバーチェ商会が打って出るはずがない……と思っていました。まして私の構成……いや、社員が打ちのめされるともね」

そこまで言うと、ツァオは不敵に笑った。

「ですからね、私は今、非常にワクワクしているんですよ。こうした先の見えないゲームでそ、私の手腕が存分に発揮できる」

「全面抗争に出るつもりですか？」

「滅相もない。ただ……今のところ情報収集に徹する、とだけ言っておきましょう」

言葉としては、おとなしいものだった。

だがロイドは、ツァオの目に潜む殺気に気づいていた。

ツァオの本心は、別にある……

それを知った以上、ぐずぐずしているヒマは無かった。

「判りました。お忙しいところ、ありがとうございました」

不意に、ロイドはソファから立ち上がった。

「しかしツァオさん、そういう事情なら、俺たちも急がなければならない。この街で二つの組織がぶつかり合う前に」

「よく、お分かりで……ですが、あなた方にたどり着けますかな？　私たちよりも早く、この事件の答えに？」

「それが仕事です、俺たちの」

ロイドはそれだけ言って、支社長室を出た。

建物の外には、ダドリー捜査官が待っていた。

「読めたか、奴の腹は？」

「たぶん、半分くらいは」

ロイドは、黒月貿易公司を振り返って言った。

「ツァオは、余裕たっぷりでしたが、襲撃者の正体については、つかみかねているようです。

それを見定めるまでは、動かないでしょう」

するとエリィが、心配そうな表情を浮かべた。

「じゃあ相手が何者か分かったら、《黒月》は……」

「ああ、必ず報復に出る。たとえそれが水面下であったとしても、このクロスベルで武力抗争が起きるんだ。未然に防がないと」

それがロイドの結論だった。

《黒月》とて、組織としてのメンツがある。

ここでルバーチェに報復しなければ、ツァオは支社長の立場を解任されるか、もっと酷い打ちを受けるだろう。

そしてツァオ自身、報復を望んでいるように見えたのだ。

だがロイドが言うと、ダドリー捜査官は鋭い視線を突き刺した。

「それで、お前はどうするつもりだ？」

「ルバーチェ商会を探ります。今のところ、最も有力な容疑者ですから」

「それは捜査一課の領分だ、お前たちは出しゃばるな」

「しかし今は……」

部署の縄張りを主張している場合ではない。

ロイドは、そう抗議しようとした。

クロスベル警察の全力を挙げて、事態に対処すべきだと思ったのだ。

しかしダドリーは、釘を刺すようにロイドたちをねめつけた。
「ルバーチェ商会には、もう一課の連中が、張り込んでいる。お前たちまで出張ってきては、捜査の邪魔だ」
「だったら俺たちも……」
「特務支援課は、競売会の一件でルバーチェから目をつけられている。お前たちが近づけば、ルバーチェはいっそう頑なになるぞ」
さすがに、説得力のある言葉だった。
たしかにロイドたちこそ、ルバーチェから最も警戒されている者に他ならない。
それを知って、ダドリーも声を強めた。
「いいからお前たちは、通常の業務に戻れ。ここは一課に任せろ」
「ですがダドリー捜査官……」
「競売会はうまく潰せたが、同じようにうまくいくとは限らん。いいな、分かったな！」
そう言い残して、ダドリーは導力車に乗り込み、去っていく。
ロイドは肩を落として、仲間たちを見つめた。
「……まいったな、正論すぎて言い返せなかったよ」
「仕方ないわ。複数の捜査チームが介入しては、現場が混乱するもの」
エリィはつぶやいたが、ランディはまだ不服そうだった。
「だけどよ、黒の競売会を潰したって言うのに、俺たちはまだヒヨっ子扱いかよ。正直、納得

できねえな」
するとティオが、落ち着いた声を響かせた。
「だからこそです。捜査一課は、今度の事件だけは、自分たちで解決するつもりなのでし
私たち抜きで……」
「手柄の奪い合いとか、するつもりはないんだけどなあ」
ロイドは、半ば呆然として天を仰いだ。
ダドリーに制止されても、どうしてもこの事件が心に引っかかる。
だが考えあぐねていると……
「悩んでるみたいねえ～、いっちょ前に」
「あ……グレイスさん」
近づいてきたのは、カメラを抱えた女性だった。
グレイス・リン。
ロイドたちとは旧知の、クロスベル通信社の女性記者である。
日々スクープを追う彼女は、にやにやしながら、ロイドにすり寄った。
「あなたたちまで乗り出してくるなんて、昨夜の襲撃、大事件みたいねえ」
「どこにでも現れますね、グレイスさんは」
「だってしようがないじゃない。うちの会社、すぐそこよ」
言われてみれば、クロスベル通信社は、目と鼻の先に位置している。

グレイスは、周囲の警官をちらっと見て、ささやいた。

「《黒月》のツァオ社長に事情を聞こうとしたら、捜査一課の人たちに止められちゃってさー。これじゃ記事が書けないのよ」

「だめですよ、捜査情報は教えられませんっ！」

「そこはギブ・アンド・テイク。こっちも情報出すわ。特に、ルバーチェ商会の」

グレイスの言葉に、エリィやランディも反応した。

「何か知ってるんですか、グレイスさん！」

「まったくツァオ社長といい、あんたといい、食えない奴ばっかだぜ、この街は」

だがグレイスは、気にする様子もなく、肩をすくめてみせた。

「でなきゃこのクロスベルでは生き残っていけないのよ。どお？　そこで冷たいジェラートでも食べながら、ね？」

と言って、グレイスはさっさと歩き出す。

ロイドは呆れつつも、財布を取り出した。

「分かりましたよ。じゃあスノージェラート、五つください」

ロイドとグレイスたちは、川岸のベンチに座った。

日はまだ高く、エルム湖を渡る風も涼しく、心地よい。

エリィとティオは、ゆっくりとスノージェラートを味わっていた。

「あー、久しぶり。この味、この味」
「帰りにひとつ、キーアにも買っていきましょう」
「うん、それがいいわ！　あ、でも持って帰るまでに溶けちゃうかも」
「だったら水の導力魔法をかけて、かちかちに凍らせて……」
などと、しばし雑談に耽っている。
だがその横でロイドは、自分が得た情報をグレイスに話していた。
「……というワケです。ただしこの話、まだ伏せていてください」
「わかったわ。たしかにルバーチェと《黒月》が全面抗争、なんてことになったら、クロスベル市民も不安になるでしょうし」
グレイスの表情も、さっきより深刻になっている。
ロイドも、北にそびえる高層ビルを眺めて言った。
「それに、事件はクロスベル国際銀行ビルのすぐ近くで起きました。ヘタをすれば、大陸貿易の中心地、というクロスベルの立場も危うくなる」
「あげくのはては、経済混乱ってことね。この事件、思ったよりヤバいわねえ……」
するとベンチに座っていたランディが、ジェラートを食べ終えて言った。
「それで？　あんたの情報は？　ルバーチェ商会の奴ら、なにか企んでるのか？」
「分かってるわよ。まずは人食い熊の話から。ここ最近、ガルシア・ロッシ氏の統制が行き届かなくなってるって噂があるの」

グレイスが言うと、ロイドは表情を曇らせた。
「まさか……あの男に逆らえる部下がいるとも思えませんが」
「けどね、歯止めが効かなくなってるのは事実らしいの。だからもしかして、昨夜の襲撃も若手の暴走かなって……」
「なるほど……辻褄は合うな」
ロイドも、ジェラートを一口なめた。
それならば、昨夜ガルシアがいなかったことも、説明がつく。
しかしガルシアが、暴走する若手を制御できない理由が分からなかった。
するとティオが、不意にベンチから立ち上がった。
「だけど、あの会長さんの方は、いったい何をしているんですか？」
「競売会での失態を取り戻そうと必死よ。ハルトマン議長との縁が切れかかったので、今度は共和国派の議員にすり寄ってるみたい。それから警備隊の司令とも……」
「ちっ、情けねえ」
ランディは、すぐに罵声を吐き捨てた。
「おおかた武器を大量に密輸するためだろうよ。クロスベルに通じる門は、どれも警備隊の管轄にあるからな。ってことは抗争の準備か」
エリィも、ジェラートを食べ終えて、いつもの冷静な顔に戻った。
「あるいは、ハルトマン議長とのコネクションを取り戻そうとしているのかも。警備隊の司令

は、議長の腰巾着って話もあるから」
市長の孫娘であるエリィは、複雑な事情を即座に組み立ててみせた。
そんな発言を、グレイスは嬉々としてメモしている。
「なるほどねえ～。おかげでこっちも考えがまとまったわー　話してくれてありがとう」
「こちらこそ……でも俺はまだ、違和感を感じてるんですが」
ロイドの言に、エリィが不思議そうな顔をした。
「どういうこと？　ルバーチェ商会は、武器を大量に密輸入して抗争に備えている。なにも不自然なことはないでしょ？」
「うん、理屈としては合ってる。でもルバーチェらしくないんだ」
「ルバーチェらしく？」
「ああ。あいつらは、大都市の組織らしいスマートさが売りだった。だが今回、あまりにあからさまな行動ばかりで、それが感じられないんだよ」
水面下に潜み、狡猾に儲ける。
それがルバーチェ商会のやり口だと、ロイドは理解していた。
だが方針転換というには、あまりに大きすぎる変化に思えたのだ。
その推理を聞くと、ロイドの肩をグレイスがぽんぽんと叩いた。
「さっすが、特務支援課！　そこまで分かってるなら、謎を解いてみせてよね！　そして解決した暁には、真っ先にあたしに連絡して！」

「解決できるかは、まだ分かりませんよ。でもこの事件、どこか……」
ロイドは、なおも心に引っかかるものを感じていた。
まるで氷山の一角だけを見ているような気もする。
だが彼が思うよりずっと、水面下には巨大なモノが潜んでいたのだ。

＊＊＊＊＊

「おお、来てくださったか！　ありがたい！」
ロイドたちと会うなり、初老の男は、ほっと安堵の表情を見せた。
温厚で、人当たりの良さそうな彼には、何度か世話になったことがある。
鉱山町マインツの町長、ビクセン氏は額の汗を拭った。
「いや、本当に困ったことになってしまって……わしもどうするべきか迷っておったのじゃが、幸い、警察に連絡したら、町長さん、君たちのことを……」
「待ってください、町長さん、落ち着いて、落ち着いて」
ロイドは、あたふたとする町長をなだめた。
クロスベル市の歓楽街。すでに日は落ちかけている。
ロイドは、あらためて捜査手帳に書いたメモを確認した。
「町長さんからの支援要請は、確認しました。なんでもクロスベル市に来た鉱員が行方不明に

なったとか……」
「そうなんじゃ、ガンツという男でな」
町長は、エリィが買ってきた濃縮バニラオレを一口飲むと、嘆息した。
「鉱山の休みに、クロスベル市に遊びに行ったのじゃが、二週間前に村を出たっきり、帰ってこないんじゃ。それで心配になってのお」
「二週間ですか、長すぎますね……で、心当たりは？」
「うむ、バクチが好きでのお。このカジノに出入りしていたようじゃが……」
そう言ってピクセン町長は、後ろを見上げる。
背後にはクロスベル市最大のカジノハウス、《バルカ》がそびえていた。
大陸中からギャンブル好きが集まり、毎夜、莫大な金が動くと言う。
そのきらびやかな導力ネオンに、ランディが肩をすくませた。
「なんだ、だったら大勝ちしたんじゃねえのか？　大金を手にしちまって、村に帰るのが嫌になり、高級ホテルで贅沢三昧とか？」
「まさか、ランディさんじゃあるまいし」
だが眉をひそめたティオに対し、町長は深くうなずいている。
「その、まさかですじゃ」
「はあ？」
「わしが探しに来てみると、ガンツの奴、カジノで大儲けしたと笑っておった。見たこともな

い高級スーツを着て、『もう鉱山でなんか働きたくねえ』と言いだして……」
町長の言に、エリィは、がくっと拍子抜けしてみせた。
「そ、そのガンツさんを私たちにどうしろと仰るんです？」
「村へ連れ戻したいんじゃ！　以前のようなまじめなガンツに戻ってほしいんじゃー！」
「と、言われましても……」
困惑するエリィに、ロイドも苦笑するしかない。
「どこで働き、どこで遊ぶかはガンツさんの自由ですよ、町長さん」
「分かっておる！　分かっておるが……」
「しかし二週間も勝ち続けるなんて、よほどバクチの才能があるんですね？」
「いや、それが不思議なんじゃ。ガンツは、いつも負けっぱなしで帰ってきた。それがこんなに勝ち続けるなんて……まさかあいつ、イカサマでもしてるんじゃ……」
ロイドも、カジノハウスを見上げた。
仮にも、クロスベル市きっての賭博場である。
イカサマに気づかぬほど、愚かではないはずだ。
「分かりました。一応、お会いしましょう。けれど説得と言っても……」
ロイドがそこまで言った時だった。
突然、カジノハウスの中から、怒声と悲鳴が聞こえてきた。
ロイドは、仲間たちに視線を送った。

「行くぞ、何かあったらしい！」
「了解！」
「ま、待ってください～」
駆け出すロイドたちの後を、町長も追いかけてくる。
そしてカジノハウスに飛び込んだロイドたちが見たものは……
「何度、言ったらわかるんだ！　俺はイカサマなんかしてねえ！」
投げ飛ばされた椅子が宙を飛び、床を転がっていく。
「ここはカジノだろうが！　客を疑うとは、どういうつもりだ！」
すでに客たちは悲鳴をあげ、ホールから逃げ出している。
その真ん中で怒鳴っているのは、あまり似合わない高級スーツを着た男だった。
「ガンツ！　何をしておる！」
町長が呼ぶと、男は悠然とこちらを振り返った。
「ちっ……またうるせえのが、来やがった」
「お、お前、ここでなにを暴れておる！」
「こいつらが、俺をイカサマだと疑ってるんだよ！　冗談じゃねえ！　俺はまともに賭けて勝ったんだ！　誰にも文句は言わせねえよ！」
ガンツは、テーブルすら薙ぎ倒して暴れまくっている。

カジノのディーラーたちも、こわごわと退いているだけだ。
「いえ、決してお客様を疑ったわけでは……」
「ただ、あまりにそのお……」
彼らが疑心暗鬼になるのも、無理はない。
ガンツのテーブルには、前が見えなくなるほどチップが山積みされていたのだ。
それを頭の中で換金して、ランディは口笛を吹いた。
「ひゅ～っ、すげえな。三十万ミラにもなるか。町長さん、こいつは無理だぜ。あんな大金持っちまったら、鉱員には戻れねえよ」
「そ、そんな……」
「汗水たらして穴掘るのがバカらしくなる、それくらいの金だぜ？」
だがロイドは、穏やかにガンツに近づいた。
「とにかく落ち着いてください、乱暴は……」
「うるせえっ！」
ロイドは、いきなり鳩尾に拳を叩き込まれた。
ガンツの拳が、想像以上の速さだったため、反応できなかったのだ。
「ロイド！」
「ロイドさん！」
あわてるエリィとティオを、冷静にランディが制した。

「騒ぐなって。ちょっと油断しただけだろ。なあ、あんた、もういい加減に……」
「黙れって言ってるだろうがあっ！」
ガンツは、素早くランディの腕も取り、壁面へ叩きつけた。
長身のランディですら、まるで子供のような扱いだ。
「くっ……こいつ、なんだ……」
「わからない……尋常じゃない動きだ……」
ロイドも、両手に衝撃警棒ソードブレイカーを構えた。
しかし彼らの前で、ガンツはなおも錯乱の度を増していったのだ。
「どいつもこいつも俺を疑いやがって！　俺は、自分の力で賭けに勝ったんだよ！」
「ガンツさん、ここはおとなしく……」
「そうさ、アレを使えば、おれは最強なんだ！　誰にも負けやしねえ！」
「アレ……？」
「俺は負けねえ！　誰にも負けねえんだ！　くははは！　はははははは！」
ホールに、ガンツの哄笑だけが響き渡る。
すでにロイドも、ランディも、真剣な眼差しで間合いを測っていた。
「尋常じゃないな、この男……」
「ああ、だけどアレってなんのことだ？」
「分からない。とにかく取り押さえる！」

言って、ロイドが突進した。
左右のソードブレイカーに電光をまとわせ、素早く背中にぶち当てる。
相手を気絶させる戦技、スタンブレイクを受けると、暴れていたガンツもさすがに、がくっと痙攣した。
「ぐっ……！」
電撃を浴びたガンツは、そのまま床に昏倒した。
すかさずランディが腕に手錠をかけ、拘束する。
「やれやれ、手間かけさせるぜ」
「おお、ガンツ、なんてことを……だらしないが気のいい男だったのに！」
ビクセン町長は、その哀れな姿を嘆いている。
だがロイドは、不審な眼差しでガンツを見下ろしていた。
ロイドもランディも、犯人制圧術には長けている。
その二人を同時にあしらうなど、よほどの技量がなければ不可能である。
そこへ、エリィも怪訝な顔で近づいてきた。
「ねえ、まさかと思うけど、この人……なにか危険な薬物を使っているんじゃ……」
「薬物？」
「ええ。だって尋常じゃなかったわよ、今の動き」
その言葉に、ティオも深くうなずいている。

「薬物を使用して、知覚や反応を飛躍的に高めている……可能性は高いです」
「そんな！」
ビクセン町長は、恐れおののいて声を震わせた。
「ガンツは、ただの鉱員ですぞ！　そんなモノに手を出すはずが……」
「けどよ……たしかに普通じゃないぜ、こいつ」
ランディは、気絶したガンツの身体をまさぐっている。
しかし不審なモノは見つからず、首を横に振ってみせた。
仕方なくロイドは、町長に向き直った。
「ガンツさんは、ホテル・ミレニアムにお泊まりでしたね。調べさせてもらえませんか、彼の部屋を」
すでにロイドも、半ばそれを確信していた。
ホテル・ミレニアムは、歓楽街の一角に立つ高級宿泊施設である。
しかもガンツが投宿しているのは、最上階のスイート・ルームだった。
その大きなベッドに今、ガンツが横たえられていた。
無論、彼のような普通の鉱員が、気安く泊まれる値段の部屋ではない。
だがロイドは、彼のカバンを見て、呆然としてしまった。
「こんなに稼いだんじゃ、気が大きくなっても仕方ないな……」

カバンには、分厚い札束がいくつも、無造作に突っ込まれている。
エリィも呆れて、ガンツの寝顔を見つめた。
「まったく……お金が人をおかしくするって、ほんとね」
ガンツは、体力を貪り尽くしたかのように、熟睡している。
その穏やかな表情と、豪勢な部屋のギャップに、ランディも顔をしかめている。
「けど一度はこんな部屋で豪遊したいもんだぜ。おかしくなるのは御免だけどな」
ランディが言うと、ティオが奥の部屋から戻ってきた。
「向こうの部屋に異常はありません。今から浴室を調べます」
「ああ、頼むよ」
言いながらロイドも、カバンの中身を物色していく。
すると彼の目に、小さなポリ袋がとまった。
中には、妙に美しい、蒼い錠剤がいくつか入っている。
「これは……？」
ロイドがつぶやくと、控えていたビクセン町長がわなないた。
「おお、女神よ……まさか、そんな……」
「落ち着いてください、町長さん。まだこの薬が原因と決まったわけじゃありません。も
したら、何か持病の薬かもしれませんし」
「いや、ガンツにそんな持病は……もちろん断言はできないが……」

外見は、単なる錠剤である。
見ただけでは、これがどんな効能を有しているかは判らない。
エリィも、心配そうな目でそれを凝視した。
「どうするつもり、ロイド？」
「まずはこの薬の成分分析、それから入手ルートの解明だな」
「私たちにできるかしら。薬物犯罪は捜査一課の領分だから、今まで捜査なんてしたことがないし……」
ロイドも、このような犯罪に相対するのは初めてである。
それでも、彼はこの事件が妙に気になっていた。
「乗りかかった船だ。自分たちで解決しよう」
「そうね……」
「それに一課も、《黒月》の一件で手一杯だろう。こちらは、俺たちが引き受けないとな」
ロイドは、動揺する町長の肩を叩いた。
「では町長さん、ガンツさんのことを宜しくお願いします」
「逮捕するんじゃないのかね、ガンツを？」
「今のところはまだ……できれば、目覚めた後に事情を聞かせてください」
言った後でロイドは、大きく肩で息をする。
すべてを上司に説明するには、だいぶ時間がかかりそうだった。

＊＊＊＊＊

「……ということなんです」
ロイドは、ひととおり話し終えて額の汗をぬぐった。
上司への報告は、予想通り長引いた。
そのせいか、上司は特務支援課の執務室で、じっと黙っている。
「あの……課長？」
「…………………」
「すみません。俺の報告、分かりにくかったですか？」
無理もない。
ロイドの報告は、《黒月》の襲撃から、ルバーチェ商会の動向、そして鉱員ガンツが持っていた錠剤にまで及んでいるのだ。
だが彼らの上司は、やけに重々しい口調で返答した。
「いや……その一連の情報、ひょっとしたら全部、繋がっているかもしれんぞ」
「え……」
ロイドも思わず驚愕し、エリィたちと顔を見あわせる。
彼らの上司……特務支援課課長、セルゲイ・ロウは、指先でこつこつと机を叩いた。

「よく考えろ、ロイド。今日、お前らが見聞きした事を結びつけてみるんだ」
ロイドも、あらためて脳内の情報を整理し始めた。
「《黒月》を襲撃した男たちの高い戦闘能力……ガンツさんが見せた神がかり的なギャンブルの腕……どちらも人間本来が持つ、能力が上がっているということでしょうか」
「うむ……」
「それを繋ぐものは……もしかすると蒼い錠剤。ルバーチェ商会が戦闘力の強化に用い、一般市民にも流し始めている。そういうことですか？」
ロイドが推理を組み立てると、セルゲイ・ロウは、ふうーっと煙草の煙を吐いてみせた。
「いい読みだ。さすが警察学校、最優秀卒業生だな」
「おだてないでください。もしそれが事実なら……」
エリィも、声を震わせた。
「……辻褄が合うわね。ガルシア氏の統率力が低下したのも……」
ランディも、確信したように口調を強めた。
「若い手下どもが、クスリをキメて力を手に入れ、態度もデカくなり、暴走し始めた……ってことじゃないのか」
「……………」
ティオは、じっと黙っていた。
なにかを堪えるように、ただ唇を噛みしめている。

だがロイドは、推測を進めた。
「となればこの事件、俺たちだけでは、手に負えないかもしれません。特に薬物に関しては、捜査一課の協力を仰いだ方がいいと思います」
「ああ、その点に関しては、丁度いいタイミングだ」
「と、言いますと？」
ロイドが問うた時、不意に執務室のドアが開いた。
現れたのは、にっこり笑うキーアである。
「あ、みんな、ここにいたんだー」
「キーア、どうしたんだ？」
「あのね、お客さん」
「お客さん？　こんな時間に誰だい？」
「あのね、ぶす～っとしたオジサンだよ」
「ぶす～っとしたオジサン？」
そう言ったロイドの前に現れたのは……
「……失礼する」
「ダドリー捜査官……！」
キーアに続いて現れたのは、捜査一課のエースである。
ダドリーは、昼間、クギを刺した時と同じように、ロイドたちを一瞥したが、セルゲイは気

にもせず、彼を招き入れた。
「遅かったな、まあ入れ」
「すみません、捜査会議が長引きまして。では例の件について早速……」
「ああ、こいつらにも詳しく聞かせてやってくれ」
セルゲイは、新しい煙草に火を点けて、ロイドたちを指す。
だが、途端にダドリーは、不服そうな表情になった。
「冗談は止めてください。こいつらに聞かせるような話では……」
「それはどうかな。うちの連中も、面白い情報を仕入れてきたぜ」
「なんですって……」
ダドリーは、あらためてロイドたちを凝視する。
あいかわらず訝しむ視線だが、ロイドも気にしてはいなかった。
「ダドリーさん、俺たちからもお話しがあるんです。聞いてもらえませんか？」
「わ、分かった……だが、こちらの話は、機密事項だ。他言は無用だぞ」
そう言っている間に、エリィがキーアを外へ連れ出す。
しばし後に、ダドリーが告げた内容は……

「捜査一課に圧力？」
ロイドたちは、思わず声を上げた。

ダドリーは、苦渋を浮かべたまま、眼鏡の位置を直している。
「……うむ。昨夜の襲撃事件を受けてな。《黒月》とルバーチェ商会の抗争へ、全力で対処しろとの指示が下った」
「それは当然のことだと思いますが？」
ロイドが問うと、ダドリーの表情がさらに曇った。
「無論、それはそれで納得できる指示だ。だが腑に落ちないのは、以前から追っていた謎の物の捜査を打ち切れという命令なのだ」
「な……!?」
絶句したロイドに代わって、エリィが訊ねた。
「捜査一課でも、薬物に関する捜査をしていたんですね？」
「数日前からな。私としては、お前たちも知っていた事の方が驚きだが」
その言葉に、ランディも不敵に笑った。
「こっちも今日、知ったばかりですよ。で、調べていたのは、どんな薬物です？」
「効能については、よく分かっておらん。なにしろまだ現物を押収できていないのだ。噂によると『願いが叶う薬』だの『幸せを運ぶ青い薬』だの……」
ロイドたちは、一斉に顔を見あわせる。
セルゲイも、にたりと笑って紫煙を吐いた。
「どうやら、ビンゴだな。おい、ロイド、例のブツを見せてやれ」

促されて、ロイドは胸にしまっていた袋を取りだした。
そして中に入っている、蒼い錠剤をダドリーへかざして見せる。
「も、もしかしてそれが……！」
顔をこわばらせるダドリーに、ロイドは落ち着いた声で言った。
「今日、押収しました。ただし効能は、いまだ不明です。しかし恐らく、ルバーチェ商会が流通させたものかと」
「なんだと……」
「この薬物捜査を打ち切れという指示、どこから来たんですか？」
ロイドの問いに、ダドリーは悔しげに呻いた。
「警察上層部の誰か……としか分からん」
ダドリーも悟っているのだ。
クロスベル警察が汚職にまみれていることに。
するとセルゲイが、椅子に深く背もたれた。
「だったらこの薬物捜査、うちに任せてもらうしかないな」
「セルゲイ先輩！」
「仕方ねえだろう。捜査一課は、身動きとれねえんだから」
ロイドも、まっすぐダドリーを見て、うなずいた。
特務支援課は、捜査圧力とは無縁である。

そもそもが、あらゆる横槍を無視して、捜査に邁進することがモットーでもある。
こういった事態にこそ、真価を発揮する部署なのだ。
ダドリーも不承不承、セルゲイにうなずいた。
「分かりました。こちらから情報も回します」
「よし、それでいい」
「だが、下手な捜査はするなよ！　まずはどうするつもりだ？」
ダドリーに睨まれ、ロイドも困惑しつつ答えた。
「この錠剤の成分分析から始めます。あまりに不可解な薬ですから」
「どうやって突き止める？　鑑識には依頼できんぞ。鑑定がバレたら、上層部からもっと強い圧力がかかる」
「そうですね……聖ウルスラ医科大学を頼ってみるつもりです」
ロイドが言うと、エリィが安堵したように微笑んだ。
「ああ、ヨアヒム先生にお願いするのね？」
「そのつもりだよ。あの人、薬学が専門だと言ってたしね」
あの人……とは、ヨアヒム・ギュンター医師のことである。
聖ウルスラ医科大学の准教授にして、キーアの記憶治療を依頼した医師。
民間のヨアヒム医師に依頼すれば、警察上層部の手が及ぶこともない。
それを聞いて、セルゲイもゆっくりと腕組みした。

「よし、その線でやれ。うまく突き止めてくれればいいが……」
「課長、まだ何か気になることでも？」
ロイドは、上司の口ぶりに違和感を覚えた。
セルゲイは、煙草をふかしつつ、熟慮を重ねていたのだ。
「まあな。筋力や瞬発力……そういった身体能力は、薬物で高められるだろう。だが……ツキってのは上げられるのか？」
「そ、それは……」
ロイドも、今ごろになって気がついた。
ガンツは、とんでもない金額を稼ぐほど、勝負に勝ったのだ。
それは果たして、薬物で為し得ることができるのだろうか？
するとセルゲイは、なぜか不意にティオを見つめた。
「……ティオ。できればその辺りの事も、確かめてこい」
「……はい」
「この事件のためだけでなく、お前自身のためにもな……」
その会話に、ロイドもエリィも、ランディも首を傾げている。
だがこの時は、まだ知らなかったのだ。
ティオの過去に流れる、暗く深い川に……

第二章　交差した過去

「この薬を分析していただきたいのです」
ロイドは、そっと蒼い錠剤を差し出した。
それを見たヨアヒム・ギュンターの表情は、意外そうであった。
「ほう……見たことのないモノだね」
クロスベル市郊外。聖ウルスラ医科大学の研究室。
人の良さそうな薬学の専門家ヨアヒムは、錠剤に目を凝らした。
「それにしてもこの蒼色……着色料にしては、妙に色味が強いというか……」
ロイドは、説明を続けた。
「俺たちは、この錠剤が、特殊な薬効をもたらすと考えています」
「いったいどんな効果だね？」
「筋力や反射神経、その他、すべての身体能力を高めると思われます」
「すべてだって？　いやそんな……」
ヨアヒムは、専門家らしくそれを否定しかけた。
だがロイドも、真剣な眼差しを彼に向けている。

「もちろん、まだ推測の域ですが、恐らく事実です。俺たちはこれが……その……」
ロイドが言い淀むと、その先をランディが引き継いだ。
「ツキが上がると思っています。ギャンブルなどのね」
「おいおい、そんな薬があるものか。だいたいギャンブル運なんて……」
「事実ですよ、先生。実際、これを服用した男が、カジノで数十万ミラを稼ぎました」
「待ってくれ。それとこれとは因果関係があるのかい？」
ヨアヒムは、すっかり当惑しているらしい。
それでもロイドは、うなずくしかなかった。
「ある……と俺たちは思っています。だから先生にお預けするんですよ」
「にわかには信じられない話だが……わかった、調べてみよう」
ヨアヒムは、錠剤を数粒、大事そうに保管する。
ロイドは、はやる気持ちを抑えて聞いた。
「先生……成分を突き止めるのに、どのくらいかかりそうですか？」
「今日中には、主成分を分析できるだろう。遅くとも、明日の午後には連絡するよ」
「よかった……助かります」
ロイドは、ほっと胸を撫で下ろした。
鉱員ガンツの身には、まだ異変は起きていないらしい。
けれどもしガンツが中毒症状にかかっていたら、薬を求めて暴れるだろう。

ヨアヒムには、一刻も早く、その手立てを講じて欲しかったのだ。
だが当のヨアヒムは、まだ何やら考え込んでいるようだった。
「先生、何か……？」
「ああ、いや、ちょっとね……以前、聞いた噂を思い出したのさ」
「と言いますと？」
ロイドが問うと、准教授はしばし躊躇った後、おもむろに口を開いた。
「数年前だがね。製薬業界に、奇妙な噂が流れたんだ。とある狂信的な宗教団体が、不思議な薬を造りだしたと」
「狂信的な宗教団体？　七耀教会の一派……ですか？」
七耀教会は、大陸にあまねく広がる信仰組織である。
空の女神を崇め、ほとんどの大陸民がその信者だった。
ロイドも幼い頃は、聖クロスベル教会の日曜学校に通ったし、それ自体は特別、後ろ暗いところもない宗教である。
だがヨアヒムは、次第に声を潜めていった。
「いや、そんな生易しい連中ではなかったらしい。何でも空の女神の存在を否定し、悪魔を崇拝する教団だったようだ」
「悪魔ですか……」
それもまた、七耀教会の聖典に登場する概念である。

煉獄に巣くい、空の女神を否定する存在。
人間を堕落に誘い、欲望をうえつけるものとして描かれている。
その話を聞いた途端、エリィが表情を曇らせた。
「ねえロイド、こないだの……ほら、月の僧院……」
「……ああ。俺もそれを思い出してた」
数日前に見た光景は、まだ鮮明に残っている。
五百年前の遺跡……月の僧院は、まさに悪魔を崇拝する場所に思えた。
今またここで悪魔の名前を耳にしたのは、単なる偶然の一致だろうか……
そう言えば以前、この聖ウルスラ医科大学からの帰り道、悪魔のような魔獣に襲われたこともあった。
ロイドが奇妙な符合を思ううち、ヨアヒムは話を再開した。
「その薬の効能がね……悪魔の力を借りることで、人間の潜在能力を開花させ、運すら呼び込むものだったらしい」
ヨアヒムの言葉に、ロイドは思わず声を詰まらせた。
「そ、それって……まさにこの薬物……」
エリィとランディも、ぶるっと背筋を震わせた。
「やだ、偶然にしては……」
「ああ、気味の悪い話になってきたぜ、こりゃあ」

すると……今までずっと黙っていたティオが、静かに進み出た。
「……ヨアヒム先生……その薬の名前、何か聞いていませんか？」
ティオは、何か挑むような視線で問うている。
するとヨアヒムも、記憶の糸をたぐり寄せ始めた。
「ええと、何だったかな……そう！　思い出した！　《真なる叡智》……たしかそう呼ばれ
いたよ」
「…………！」
その名を聞いた途端、ティオがかすかに苦悶する。
だがヨアヒムは、気にせず先を続けた。
「まあ、余りに荒唐無稽だから、誰も信じる者はいなかったけどね。しかし一応、その噂に
いても、同業者に確かめてみるよ。続報があるかどうか……」
ロイドも身震いを堪えて、一礼した。
「お願いします……しかし、悪魔の力を借りる薬ですか……」
研究棟を出ると、すでに日は落ちかけていた。
ロイドは夕陽に手をかざし、大きなため息を吐き出した。
「後は、結果待ちだな。ヨアヒム先生だけが頼りだよ」
ロイドはそこまでつぶやくと、ティオを見た。

ティオは、さっきからずっと黙ったままである。
「ティオ、大丈夫かい？」
「……え、なにがですか？」
「さっきの会話だよ。薬の名前を聞いた時、驚いたようだったけど」
「そ、それは……」
ティオは、妙に口ごもっている。
だがティオが返事を言う前に、エリィがあわてて駆け寄った。
「ティオちゃん？　夕陽で分かりにくいけど……あなた、顔が真っ青よ！」
ロイドとランディも、ようやく気がついた。
ティオは、朦朧としたように、半ば瞼も閉じていたのだ。
「……問題ありません。少し気分が優れないだけで……」
だがティオは、魔導杖に寄りかかるようにして、やがて……
「……あっ……」
落ちるように、膝をついた。
あわててロイドとエリィが、左右から抱きかかえた。
「ティオ！」
「大丈夫？　どこかで休んだ方がいいわ！」
ランディも、急いで病院内へ駆け戻った。

「待ってろ！　すぐに誰か呼んでくる！」
「頼む、ランディ！」
叫ぶうち、ティオががくりと意識を失った。
ロイドは、その身体を支えながら、手に伝わる感触にこわばった。
倒れたティオの肌は、やけに冷たかったのだ。

「心配しないで。ただの貧血よ」
セシル・ノイエスは、点滴を繋ぎ終えて言った。
すでに日は落ち、窓の外には星が瞬いている。
聖ウルスラ医科大学では、看護師たちに宿泊用の個室が与えられている。
ティオは、いったんセシルの部屋に通され、彼女のベッドに寝ていたのだ。
「ありがとう、セシル姉、助かったよ」
ロイドが、亡き兄の婚約者に礼を言うと、セシルは優しく微笑んでくれた。
「気にしないで。今夜は私も夜勤だし。じゃあ……何かあったら、また呼んでね」
セシルは、手を振って部屋から出て行く。
エリィは、案じた表情のまま椅子に座った。
「今から思えば、ずっと様子が変だったわね、ティオちゃん……」
「ああ、ヨアヒム先生の話を聞いてた時からな」

ロイドの言葉に、ランディもうなずいている。

「ああ。たしか……《真なる叡智》って名前を聞いてからだぜ？」

ロイドは、ベッドの脇に座って、ティオの顔を覗き込んだ。

思い起こせば、課長の言葉も不自然だった。

『お前自身のためにも』とは、何を意味していたのだろう。

課長は、ティオの過去について何か知っているのだろうか。それとも……

と、ロイドが思案に耽っていると……

「……いいんですよ。何を聞いても……」

ティオが、うっすらと瞼を開き、ロイドたちを見上げている。

「……それより皆さんに、お伝えしなければなりません。私の知っている情報を……」

だがロイドは、ティオの頭をそっと撫でてやった。

「無理に言う必要はないんだぞ、ティオ」

「え……」

「ティオの過去に何があったか、分からないけど、それがもし辛い過去なら……」

そこまで言うと、エリィもティオの手を握りしめた。

「無理することはないわ。もちろん捜査も大事だけど、それとこれとは別でしょう？」

ランディも、微笑みを浮かべてティオを見下ろした。

「他人には秘めておきたい事情だってあるさ。ティオすけ、お前がそれを知られたくねぇって

んなら……そのままでいいんだぜ」

ティオは、仲間たちを見上げ、しばし黙っている。

しかしやがて、呆れたように嘆息した。

「……皆さん。よくそんなに優しいセリフを言えますね。ロイドさんならともかく、エリィさんやランディさんまで……」

「な……」

「ちょっと！」

「やれやれ、そうかもな」

三人は、それぞれの反応を見せつつ、やがて揃って微笑む。

するとティオが、おもむろに身を起こした。

その瞳には、決意の光が宿っている。

ティオは、ため息をつくように、告白を始めた。

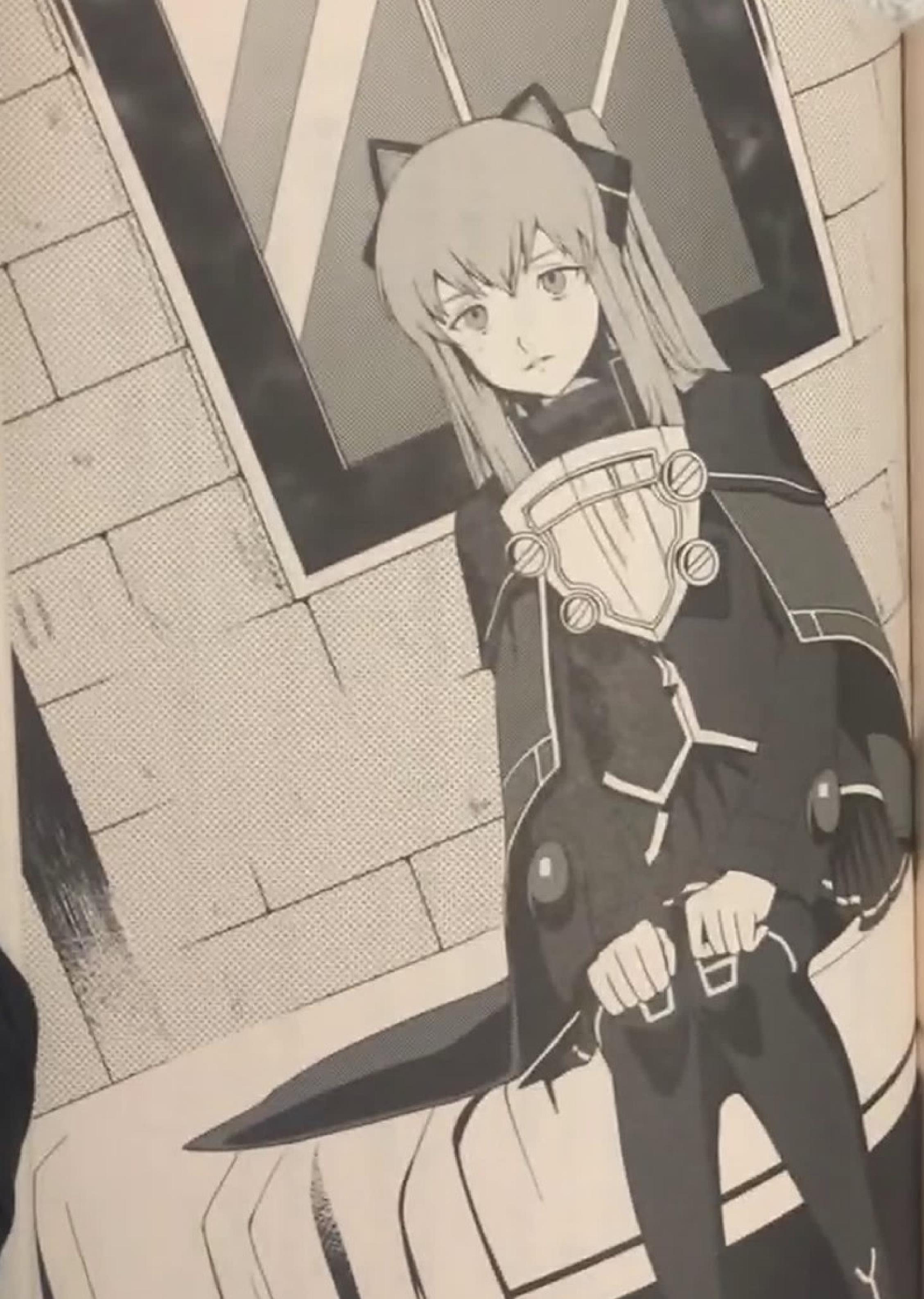
「……私は、五歳の頃、とある狂信的な宗教団体に拉致されました」

一転、ロイドたちの表情から笑みが消える。

だがティオは、かまわず先を続けた。

「その教団の目的は、今でも判らないそうです。ただ彼らは、悪魔を崇拝し、わたしを含めた他の子供たちを、供物に捧げるつもりだったようです」

「供物……生贄ってことか？」



ロイドが問うと、ティオは首を横に振った。
「……そんな目に遭った子もいたかもしれません。ですがその教団は、幾つもの拠点を持ち、拠点ごとに様々な儀式を試みていたようです。そしてわたしが連れて行かれた拠点では、儀式という名の人体実験が行われていたんです」
「人体実験ですって……！」
エリィが背筋を震わせると、ランディがはたと気づいた。
「待てよ、ティオすけ。もしかしてお前の感応力は……」
「……はい。その時の、儀式の結果、得たものです」
ティオは、そこで一呼吸おいた。
自分の中にある、深く暗い過去に、勇気を振り絞って立ち向かうように。
「私は……薬物を投与され、考え付く限りのやり方で五感を高められたんです。更には、強制的な暗示と、精神的な負荷をかけることで、霊感のようなものまで高められ……」
ロイドたちは、言葉すら発せられずにいる。
それでもティオは、惨たらしい過去を口にした。
「三年間……儀式は、毎日のように続きました。それでも私は、幸運な方だったかもしれません。わたし以外の子は……」
「ティオ、もういいよ」
「……全員、儀式に耐えきれませんでした……」

「ティオちゃん、それ以上は……」

「一人、また一人と、まわりから子供たちがいなくなって……」

「ティオすけ、無理するなって」

「ついに最後の一人になった頃、私は手に入れたんです……どこか遠くで、他の子たちが死ぬ瞬間の悲鳴を聴き取れるくらいの感応力を……」

誰もが、沈黙した。

ティオの過去は、誰にとっても想像を絶する過酷さである。

それでもティオは、なぜか微笑を浮かべ、ロイドを見つめたのだ。

「……けれど幸い、私は助けられたんです。五年前、クロスベル警察の捜査官……ガイ・バニングスさんに……」

ロイドは、思わず声を詰まらせた。

ティオが発したのは、亡き兄の名前である。

だが事情を知らぬエリィとランディは、驚きに視線をさまよわせた。

「えっ、バニングスって、ロイドと同じ姓……」

「もしかしてそのガイってのは……」

ロイドも、ようやく自分の過去を口にした。

「ガイ・バニングスは、三年前に死んだ俺の兄貴だ。クロスベル警察では捜査一課に属していた……弟の俺が言うのもなんだけど、立派な捜査官だったよ」

ロイドが兄の面影を思い出すと、その脇にエリィが優しく触れてきた。

「そうだったの……」

「ああ。セシル姉は、兄貴の婚約者だった。だから俺は、姉って呼んでるんだよ。本当の姉さんになる人だったから……」

「セシルさんが……そうか……」

ランディも、彼女の過去に思いを馳せているようだった。

ティオは、あらためてロイドに視線を向けた。

「ガイさんには感謝しています……ガイさんを含めた捜査チームが、拠点に踏み込むと、ほんどの信者が自決したそうです。そしてガイさんは、ただ一人、生き残った私を、この病院連れて来てくれて……」

ティオの表情に、また翳りが生じていた。

「けれど、あれだけお世話になったのに……三年前、ガイさんが亡くなったと聞かされた時私はあまり哀しくなかったんです。まるで感応力と引き換えに、人間らしい感情を失ったよな気までして……」

「…………」

「多分、呆然としていたんだと思います。いつも前向きだったガイさんに、私のような存在どう生きたらいいのか……結局、聞けずに終わってしまった。だから……」

そしてティオは、仲間たちに視線を向けた。

すがるような、問いかけるような瞳を。

「……今でも、よく分からないんです。邪悪な意志で、力をもたらされた私が、これからどうやって生きていけばいいのか……」

「ティオ……」

「どうしてこんな私が……生きているのか……」

ティオの小さな手が、シーツをぎゅっと握る。

するとエリィが、彼女の細い肩をだきしめた。

「いいじゃない……分からなくったって！」

「エリィさん……」

「そんなの、私たちだって同じなんだから……」

「え……？」

意外そうな顔のティオに、ランディも優しく微笑んだ。

「ティオすけは、真面目だな。そんな難しいこと、急いで解こうとするなよ」

「で、でも……」

ロイドも、深くうなずいて、ティオの髪を撫でた。

「自分がなぜ生きてるのか……それが分かってる人間なんて、そうそういるもんじゃないさ。その答えを、みんな一生かけて探してるんだよ」

「ロイドさん……」

「それでも気になるなら……答えを探し続ければいい。でも焦る必要はないし、一人で探す必要だってないんだ。俺たちも一緒に探すからさ」

「あ………」

ティオは、その答えを聞くと、半ば呆然とロイドを見上げる。

けれどすぐに顔を赤くして、エリィの胸に顔を埋めた。

「本当に……聞いてるこちらが、恥ずかしくなってきてしまいます……」

「ははっ、俺のいつものクセだな。でも辛いことや悲しいことも、分かち合えば負担は減るんだ。それが仲間ってもんだろ？」

そうロイドが告げると、さらにティオの頬は赤くなった。

「ああ、どうしてそんな恥ずかしいセリフをまた……」

「ごめん、つい……」

「でも、なんだか……」

言いかけて、ティオは顔を上げる。

そしてロイドたちを眺め、かすかに笑みを取りもどした。

「……悪くない気分です。とっても……」

＊＊＊＊

クロスベル市は、深夜の静寂に包まれていた。

だが特務支援課には、まだ煌々と明かりが灯っている。

セルゲイ・ロウは、いつも同様、黙ってロイドの話を聞いていたが、薬物の名前を聞いた途端、彼の表情にも変化が表れた。

「……なるほど。《真なる叡智》か……」

「課長、教えてください」

ロイドは、椅子に座すセルゲイに詰め寄った。

「六年前、ティオを拉致した教団について。課長もご存じだったんでしょう？　ティオの事情について……」

その答えを、エリィもランディもじっと待っている。

ただ一人、ティオだけが執務室に存在しなかった。

彼女だけは大事を取って、すでに自室で眠っている。

ロイドとしても、ティオのいない今、凄惨な事件の真相を聞いておきたかったのだ。

するとセルゲイは、おもむろにうなずいた。

「無論、知っている。なにしろガイと一緒に、教団の拠点を潰したのは俺だからな」

「そ、そうだったんですか！　じゃあ課長は、兄貴の……」

「直接の上司だよ」

ロイドも、初めて聞く事実だった。

セルゲイは、どこか懐かしむような口調で、言葉を連ねた。

「ガイは、無鉄砲な奴だが、優秀な捜査官だったぜ。コンビを組んでいた相方とは、好対照な組み合わせだった」

「え、相方って？」

エリィが訊ねると、ランディが眉をひそめた。

「まさかダドリー捜査官じゃないでしょうね？」

するとセルゲイは、手を打ち振ってそれを否定した。

「いや、違う。ガイと組んでたのは、アリオス・マクレインだ」

「なっ……！」

ロイドは、驚愕のあまり言葉を失った。

Ａ級遊撃士にしてクロスベルの守護者。

風の剣聖と呼ばれた、あのアリオスが元捜査官とは初耳だった。

まして兄とコンビを組んでいたとは……

「そんな素振り、少しも見せなかったな、あの人……」

ロイドがつぶやくと、セルゲイは納得したように微笑んだ。

「お前がガイの弟だからこそ、見守っているんだろう。どんな捜査官に育つかを……」

「兄貴も、仕事のことは話してくれなかったんです、俺には」

「仕方あるまい。そういう仕事だ」

セルゲイは、ゆったりと煙草を吸いこむ。
長く間をとった後、彼は再び口を開いた。
「ガイは、捜査官としては無鉄砲だった。一方のアリオスは生真面目……そんな二人だから、ウマが合ったんだろうな。あいつらはすぐに功績を挙げ、クロスベル警察最強の若手コンビと呼ばれるようになった」
セルゲイは、ふーっと紫煙を吐いた。
その煙が空を漂い、消え失せてようやく、また口を開く。
「そして俺たちは、国際犯罪の合同捜査に参加することになった。それが例の……『D∴G教団』事件だ」
「『D∴G教団』……」
ロイドがつぶやくと、セルゲイは指先で空中に文字を書いて見せた。
「教団名のDは、不明。∴は『～ゆえに』を意味する。そしてGは、《真なる叡智》を表しているそうだ」
「じゃあやっぱり、ヨアヒム先生が言っていた悪魔の力を得る薬は……」
ロイドたちが顔を見あわせると、セルゲイは低く声を響かせた。
「『D∴G教団』が行う儀式には、必ず《真なる叡智》という薬物が使われていたそうだ。その蒼い錠剤が、本当に《真なる叡智》なら、五年前の悪夢、再びだな」
ロイドは、あらためて蒼い錠剤を見つめる。

以前、遭遇した悪魔のような魔獣。
月の僧院で見た、儀式の間。
それらが急激に、ひとつに溶け合っていく気がした。
見透かしたように、セルゲイが声を発した。
「……ロイド。三年前、お前の兄貴を殺した犯人は、いまだに見つかっていない」
「……はい。何でも手がかりが少なすぎて、迷宮入りになったと聞いてます」
「ああ。ガイは、単独捜査が多かったからな。どんな事件を追っていたか、俺にすら報告しなかったこともある。だから犯人が絞り込めなかったんだ」
その事実にも、エリィとランディが驚愕する。
セルゲイは、謝罪するように目を伏せた。
「けど俺たちも、ガイを殺した犯人を必死に突き止めようとした。大国の諜報機関、ルバーチェ商会、もしくはテロリストかも、と。しかしもうひとつ、心当たりがあった」
「教団の残党……ですね」
ロイドの推測に、上司は深くうなずいた。
「ああ……教団は、五年前の一斉捜査で壊滅した。だが残党が大陸各地に逃げ延びたとの噂もある。可能性は十分あるだろう」
「そしてその残党が……」
「……この薬を、ルバーチェ商会に渡したのかもしれん」

執務室を、暗鬱な空気が覆った。

ロイドですら、知らなかった兄の死の背景。

エリィやランディに至っては、初めて知ったことばかりで、言葉もない。

だがその空気を和らげるように、セルゲイが身じろぎした。

「しかしガイは死んでも、奴の心意気はここに生きている。お前たち、特務支援課としてな」

「どういう意味です、課長？」

「特務支援課を思いついたのは、ガイなんだ。クロスベル特有のしがらみから逃れて、自由に捜査できる部署があっていい……ってな」

言うと、セルゲイは煙草をくゆらせた。

「生前、ガイは言っていた。今、必要なのは、若い奴が失敗してもいいから力を合わせて前に進める場所だってな。それがここだ。お前たちだ」

エリィも、ようやく声を取り戻した。

「じゃあ、もしかしてティオちゃんが支援課に来たのも……」

「ああ、ガイの遺志が息づく場所に居たかったんだろう。ティオから、はっきりと聞いたわけじゃないが」

ロイドは今一度、執務室を見渡した。

古びた建物だが、ここには設立以来、自由な雰囲気があった。

ロイドたちは、あらゆる妨害にも屈せず、今まで歩いてきた。

そのすべてに、ガイの遺志が根付いていると聞き、不思議と納得もできた。

しかしロイドたちの見えないところに、もっと高い壁が……いや、煉獄のように深く暗い穴が空いていたのだ。

ロイドは兄を思って、背筋を伸ばした。

「とにかく、この薬の被害を食い止めることが先決です。それに、もしかしたら関係があるかもしれません……教団とキーアも……」

ロイドの推理に、エリィとランディも思わず叫んだ。

「それは……！」

「ありえるな。キーアの記憶喪失も、薬が原因かもしれねえ」

セルゲイも、深く同意する。

「すべてが繋がってきたぞ。しかし解決できるか、ロイド？　この事件が、お前たちに……」

だがロイドも、上司の問いに力強く返答した。

「分かりません。でもそのために、俺たち特務支援課は集められた。違いますか？」

その意気込みに、セルゲイがうなずく。

エリィも微笑み、ランディがロイドの肩を軽く叩いた。

ロイドも、今になって兄の遺志を感じ始めていた。

たしかに兄なら、こんな場所を作っていただろう。

強き絆で結ばれた、仲間という場所を。

第三章　急変

翌日の朝陽は、やけにまぶしく感じられた。
ロイドは、朝食の席で、ティオに視線を向けた。
「本当にいいのか、休んでなくて？」
「私なら大丈夫です。昨夜はゆっくり休ませてもらいましたし、それに……」
言ってティオは、隣に座るキーアを見つめた。
「キーアが一緒に寝てくれたせいか、いつもよりぐっすり眠れた気がします」
「えへへっ、キーアのおかげ？」
「きっとそうです。それに今日の朝食もありがとう……」
ティオが口に運んでいるのは、田舎風オムライスだ。
チキンライスの上に、ふわふわ、とろとろのオムレツが贅沢に乗っかっている。
エリィも、その出来映えに感心していた。
「……ほんとに美味しい……これ、本当にキーアが作ったの？」
にこにこ笑うキーアに代わって、ロイドがうなずいてみせた。
「ああ、本当だよ。下ごしらえまでは俺がやったけど、チキンライスを炒めたのも、オムレツ

を作ったのも、全部、キーアがやってくれたんだ」
「す、すごいわね……」
ランディも、もしゃもしゃとオムライスをかきこんでいる。
「いや、マジで店に出せそうなクオリティだぞ！　キー坊、スゲーじゃねえか！」
みんなに褒められ、キーアも上機嫌だった。
「えへへー。美味しくできてよかったー」
しかしロイドは、不思議な目でキーアを見つめている。
キーアは、オムライスの作り方など知らなかった。
ところがロイドが材料を用意してやると、突然……
『……あ、わかったよー』
と言って、手際よくオムライスを作ってしまったのだ。
昔、作ったことがあり、その記憶が蘇ったのだろうか。
あるいは、なにか別の……
そう思った時、ティオがあらためてキーアに礼を言った。
「ありがとう、キーア。また料理、作ってね」
「うん、いいよー　今度はいっしょに作ろうー」
「そうですね……私も料理のレパートリーを増やした方がいいかも」
答えるティオの顔には、柔らかな笑みが浮かんでいる。

その表情も、いつもより豊かに見える。
恐らくティオは過去を告白して、晴れやかな気持ちになったのだろう。
そしてキーアと触れ合えば、誰でも穏やかな心になってしまうのだ。
それもまた、キーアの不思議な力である。
エリィとランディも、穏やかに笑っていた。
「キーア分を補充したら、ティオちゃんももう絶好調よね？」
「あとは、みっしい分が必要だな。もっともテーマパークに行くヒマはねえが」
ロイドも、安心して、食事を終えた。
「とにかく無理はするなよ、ティオ。今日は……」
ロイドが、朝の段取りを説明しかけた時。
不意にエニグマの呼び出し音が鳴り響いた。
ロイドは、食後のコーヒーを一口すすり、通信機能を立ち上げた。
「はい、特務支援課、バニングス……」
『ロイドくんか！　わしじゃ！　ピクセンじゃ！』
「ああ、町長さん」
ロイドは、コーヒーを手にしたまま答えた。
「よかった。こちらからも連絡しようと思ってたんですよ。あれからガンツさんは……」
『そのガンツが……どこにもいないんじゃ！』

「なんですって？　ガンツさんがいない？」
ロイドの反応に、仲間たちも表情を険しくする。
エニグマから聞こえる町長の声は、逼迫していた。
『目を覚ましたら、どこにもおらんのじゃ！　ホテルの者も、誰も見ていなくて……』
「カジノには連絡しましたか？」
『もちろんじゃ！　だが向こうにも行っていないと言う』
「分かりました、すぐに伺います！　後ほど！」
ロイドが通話を切ると、仲間たちも席を立った。
エリィが導力銃を、ランディが斧槍を、ティオが導力杖を手にする。
「今日は、忙しくなるとは思ったけど……」
「まさかコーヒーを飲む時間もねえとはな！」
「急いだ方が良さそうです。もし中毒症状だとすれば……」
「ああ、早く身柄を確保した方がいい。でないと、また暴れるだろう。その前に……」
ティオの言に、ロイドも衝撃警棒を手にする。
だがロイドたちが思うより、事態は拡大していたのだ。
【支援要請・劇団アルカンシェル】
【所属俳優ニコルが失踪しました。至急、捜索をお願いします】

【旧市街の不良グループに属するディーノ少年が失踪。至急、捜索をお願いします】

【支援要請・クロスベル警察　生活安全課】

【証券会社に勤める夫ボンド氏が失踪しました。至急、捜索をお願いします】

【支援要請・クレイユ夫人】

特務支援課のネットワーク端末には、失踪者を探してくれとの要請が殺到していた。

ロイドは、画面をスクロールしながら、低く呻く。

「失踪、失踪、失踪……なんてことだ。こんなに一度にいなくなるなんて」

エリィも、腕組みして画面に見入っている。

「偶然の一致とは考えられないわね。たぶん、この人たちもガンツさん同様……」

「ああ、蒼い錠剤の服用者だろう」

ランディも、即座に断定した。

「だけどこうなると、失踪の理由は、中毒症状だけとも思えないぜ」

ティオも、表情をこわばらせて言う。

「相手が教団の残党だった場合……全員をまとめて拉致した可能性もあります。私を連れ去ったように……」

ロイドは、素早く決断をくだした。

「ルバーチェ商会へ行こう。恐らくこの人たちは、ルバーチェ商会から錠剤を買ったはずだ。もし薬を求めているなら、向かう先はそこしかない」

「たしかに……だけど捜査令状も持たずに踏み込むつもり？」

だが心配するエリィに、ランディが微笑んだ。

「気にするなよ、お嬢。まだ踏み込むと決まったわけじゃない。偵察だよ偵察」

ティオも覚悟を決めたように杖を握る。

「競売会の時も、偵察と言いながら踏み込んでいた気がしますが……今は、手続きより、行動を優先すべきだと思います」

「それに、いつかは対決しなきゃならない相手だ」

ロイドは、すでに駆け出し、ドアノブに手をかけた。

「答えはきっとルバーチェにある……行こう！」

ロイドたちは警戒しつつ、ルバーチェ商会に接近した。

なにしろ《黒月》を、表だって機関銃で襲ったかもしれない相手だ。

どんな重武装で待ち構えていても、おかしくなかった。

だが裏通りに近づいても、殺気はない。

それどころかルバーチェ商会の建物には、いつものような見張りもいなかったのだ。

「ティオ……探れるか？」
路地の陰でロイドが訊くと、ティオは静かに瞑目する。
魔導杖のセンサーから、建物内の状況を読み取っているようだ。
しかし数秒後、まぶたを開けたティオは、やや拍子抜けしたようだった。
「殺気どころか、あの建物には人の気配がありませんね」
「なんだって？」
「正確には、気配はたったひとつだけ……それも敵意は感じられません」
ロイドとランディは、先に立ってルバーチェ商会に踏み込んだ。
正面のドアには鍵もかかっておらず、中はがらんとしている。
しかしたった一人、中にいた人物が、驚いて振り返った。
「お前ら……！」
部屋の中にいたのは、ダドリー捜査官だった。
「ええい、首を突っ込むなと言っただろうが！　お前たちは薬物捜査に専念……」
「お言葉ですが、そんな事を言ってる場合でしょうか？」
ロイドは、ダドリーに向かって静かに歩み寄った。
「どういうことです？　ルバーチェの連中はどこへ？」
「知るか！　それを知りたいのは私の方だ！」

「しかし、[illegible]ルバーチェを監視していたはずですよね？　[illegible]か、[illegible]していないんですか？」
するとダドリーは、苦い顔になった。
「……昨夜、警察本部に犯行予告が届けられた。クロスベル空港に爆発物を仕掛けるという予告がな」
「爆発物!?」
「そこで急遽、捜査一課は空港で警戒に当たった。ルバーチェの監視を引き揚げてな」
「で、爆発物はあったんですか？」
エリィが問うと、ダドリーの額に血管が浮き始めた。
「いや。予告された爆発物は見つからなかった。そしてここに戻ると……」
「ルバーチェの連中は消えていた、というわけですか」
ティオは、諦観を浮かべてつぶやいた。
「……怪しいですね。その爆発物の予告は、どこまで本当なんでしょうか？」
ランディも、やれやれという顔でうなずいている。
「さあな。そもそも犯行予告自体、あったのかも怪しいぜ？　そんな予告を捏造して、捜査一課を攪乱したんじゃねえか？」
ロイドも、がらんとしたルバーチェ商会を見わたしてうなずいた。
「ランディの推測は当たってると思う。つまり警察内部に、ルバーチェを逃がした奴がい

てことだ。誰かは判らないけど……」
ダドリーの表情にも、苦渋がにじみ出ていた。
「……くっ……この状況では、そう考えるのが妥当か。上層部は、どこまで警察の誇りを踏みにじるつもりだ！」
建物のエントランスからは、奥へと通じる扉がある。
ロイドは、それを指さして、ダドリーに問いかけた。
「いずれにしても、このままでは何が起きているのか、把握することすら困難です。ここは建物内を、一通り調べてみませんか？」
「なんだと……！」
さしものダドリーも、身を固くした。
だがすでにロイドは、覚悟を決めていたのだ。
「勿論、警察とルバーチェの微妙な関係は、自分も理解しています。捜査令状がない状態で家捜ししたら、どんな反撃材料を相手に与えるか……そのリスクも承知です」
「ロイド……」
エリィが心配そうに、声をかける。
ダドリーは、ロイドの瞳を真っ直ぐに見据えた。
「……だったら何故、そんな無謀なことを言い出す？」
「それ所ではない状況、だからですよ」

ロイドは、自分たちが得た情報をダドリーにも打ち明けた。
蒼い錠剤が、五年前に壊滅した狂気の教団が造りだした薬物らしいこと。
そして薬を使用していた人間が、一斉に姿を消したことを。
話を聞くうちに、ダドリーの顔も青ざめてきた。
「信じられん……その教団の話は聞いた事があるが……てっきり壊滅したものかと……」
「事は、人命に関わります」
ロイドは、きっぱりと断言した。
「しかし……」
「もしかしたら、失踪者たちの情報が、ここに残されているかもしれません」
「もしダドリーさんが納得できないのなら、せめて俺たちの……いや、俺の独断専行をこのまま見逃してくれませんか？」
だがその言葉を、ランディが一笑した。
「おいおい、自分ひとりで責任を被ろうとしてんじゃねえよ」
すでにエリィも、ホルスターから導力銃を抜いている。
「当然、私も付き合うわよ。たとえ特務支援課が取り潰されたとしても、見過ごせる状況ないもの」
ティオも、こくんとうなずいた。
「……ええ、一蓮托生です」

「みんな……」
ロイドは、仲間たちの言葉に微笑んだ。
こういう事態に動くために、特務支援課は創設されたのだ。
それを知っているからこそ、誰一人、躊躇する者はいなかった。
だがそんなロイドたちを、ダドリーは呆れたように見つめた。
「……フン……血は争えないものだな。その強引さ……奴にそっくりだ」
「え……？」
「違法捜査による証拠物件は、法的な証拠能力を認められない。連中がどんな証拠を残していても、見て見ぬフリをする必要があるぞ？」
驚くロイドに、ダドリーも背筋を伸ばしてみせた。
「それは、構いません。今、必要なのは、このクロスベルで何が起こりつつあるか……それを見極めることですから」
ロイドの言葉に、ダドリーは軽く鼻を鳴らした。
「一丁前の口を利く……だが、それが分かっているなら、とやかく言うつもりはない。せいぜい足手まといにならないよう、ついて来い」
ロイドたちは、一斉に自分の耳を疑った。
ついて来い、とはダドリー自身も踏み込むという宣言だ。
しかしダドリーは、意外そうなロイドを横目で睨んだ。

「この状況、お前たちのようなヒヨッ子どもに任せられるとでも思うか？　今からお前たちには、私の指揮下に入ってもらう」
「ですが、ダドリーさん……」
「全ての責任は私が持つ……反論は許さん！」
ロイドは、一瞬呆然としたが、すぐに敬礼で応えた。
「判りました、宜しくお願いします」
その後ろでは、ランディとティオがこっそり言葉を交わしていた。
「やれやれ……ほんと、素直じゃないっつーか」
「やはり照れ隠しの一種ではないかと……」
それが聞こえたのか、ダドリーは一段と声を張り上げた。
「とにかく、まずは建物内を捜索する！　急げ！」
「はいっ！」
ロイドは、エントランスから奥の部屋へ進入した。
広い室内には、大きなテーブルと革張りのソファが並んでいる。
マルコーニ会長が座っていたであろう椅子と机もあるが……
「ここは応接室のようですね。来客を通すような部屋に重要な手がかりを置くとも思えた
……ダドリーさん、会長の私室はどこですか？」
「分からん。さっきから探しているのだが……」

それを聞いてロイドは、再びティオに視線を向けた。
「やってくれるかい、ティオ？」
「はい……」
ティオは、導力杖を一閃するともう一度、瞳を閉じた。
怪訝そうに見つめるダドリーの前で、ティオは次第に壁際へ向いていく。
その壁面には、さほど上手くもない風景画が飾られていた。
「おっと、マフィアどもには似合わねえ趣味だな」
言って、ランディがその絵を外す。
「一般家庭ならさりげないが、こういう場所では悪目立ちだぜ……ビンゴ！」
風景画で隠されていた壁面には、数字が配置された十個のキーがあった。
ティオは、その小さなキーボードに、静かに手のひらを近づけた。
「ちょっと待ってください……今……解除コードを探ります」
「そんなことができるのか！」
驚くダドリーに向かって、ロイドとエリィが唇に人差し指を当てて見せた。
「しーっ、お静かに」
「ティオちゃんに任せてください」
しばしティオは沈黙し、手のひらを通して、キーボードと会話する。
そして唐突に、五本の指を走らせた。

「四・四・二・七・五・一・四・六・六・九・一」
ティオが、口にした数字キーを打ち終わった途端……
「これは……！」
ロイドたちの目の前で、テーブルが横に動き始めた。
そこに隠れていた床面は、四角に切り取られ、地下への階段が続いている。
エリィは、その暗い穴を慎重に覗き込んだ。
「こんな仕掛けがあったなんて……」
ロイドも、身をかがめて階段を観察した。
絨毯が敷かれた階段には、無数の足跡が残っている。
しかも、ごく新しい。
つい最近まで、頻繁に使っていた証拠だった。
「先に下りますよ、ダドリーさん」
「わ、わかった……」
ロイドを先頭に、一同は地下室へと下りていく。
階段の先には長い地下通路が続き、無数に分岐していた。
その通路さえ、厚い絨毯が敷かれ、瀟洒にあつらえられていた。
「ずいぶん豪勢だな……」
驚くロイドの横で、エリィも息を呑んでいる。

「まるで地下の豪邸ね。これだけの施設が作れたなんて……」
ロイドたちは武器を構え、地下通路を進んでいく。
しかし進むうち、ロイドの頭に、妙な疑問が浮かび始めていた。
「……たしかに豪邸のようだが、やけに通路が広いな」
「密貿易の金があまったから、広くしたんじゃねえか？」
ランディは気軽に言うが、ロイドにはそうとは思えなかった。
「……いや。このあたり、クロスベルの地下区画とも接するはずだ。あまり拡張できるはずもない。それでも通路を広くとったのは……」
言いかけた時、ティオが魔導杖を掲げた。
彼女の視線は、通路の先を鋭く睨みつけている。
「……属性反応……」
「なにっ？」
通路の突きあたりは、両開きの扉である。
ティオは、その向こうから、何かを感じ取っていた。
「……反応は一つ……二つ……いえ、三つ……！」
「どういうことだ？　建物の中に、人の気配はないと……」
「人ではありません。これは……」
唐突に、正面の扉が開いた。

同時に、その奥から、二条の光線が発射される。
咄嗟にロイドたちは、床に伏せた。
「なんだっ！」
光線は、ロイドたちの頭上を通過し、壁面に命中。
その瞬間、盛大な爆発音と共に、壁が吹き飛んだ。
「敵っ……!?」
驚くロイドたちの前に、扉の向こうから奇妙な機械が二体、現れた。
一見すると、直立するパイプのよう。
細長い銀色のボディに、眼球じみた光が明滅している。
ボディを支えるのは、ごく短い脚部。
家庭導力製品、と言われても納得してしまうだろう。
しかしその眼球から、再び赤いレーザー光線が照射されたのだ。
「避けろっ！」
ロイドたちが左右に散ると、今度は床が焼き払われた。
床に転がりながら、ティオが叫ぶ。
「解析終了！　射撃戦用オートマタ、ビープシーカーです！　破壊、火炎、冷気効果を持つレーザー砲で武装っ！」
「んだとっ！」

吼えるランディめがけ、今度は青白いレーザーが撃ちこまれる。
ランディが大きく飛び退くと、床や壁面が、ぴしぴしと凍り始めていった。
「奴ら、こんなモノまで密輸していたのか！」
ダドリーは、脇の通路に隠れ、導力銃で応戦する。
だがさらに、扉の奥から、より大きな影が出現した。
地響きと共に前進してきたのは、朱色の鎧に覆われたオートマタ。
両手両足を持つ人間型タイプで、右腕には長大な剣を握っている。
応じるように、ロイドもぐいと前に出た。
「なるほど、このための通路か……！」
見上げるほどの巨体は、広い通路を塞ぐように立ちはだかっている。
恐らくこの巨大オートマタを警備運用するために、この地下施設は、不自然なほど広く造られているのだ。
「よし、援護を頼む！」
ロイドは、ソードブレイカーを携えて、疾走した。
狙いは、巨大オートマタの懐。
だがビープシーカーも悟って、炎と冷気のレーザーを撃ちこんできた。
「気をつけて、ロイド！」
後方からエリィが、導力銃ムーランルージュを連射する。

その強烈な打撃は、ビープシーカーの硬いボディにも見事に通用し、オートマタは、火花を散らして爆砕した。
さらにティオが、魔導杖シュレーディンガーの先端を突きつける。
「そちらが氷なら、こちらも氷です！　ハイドロカノン！」
叫んだ瞬間、青白い閃光が杖の先からほとばしった。
水属性の攻撃導力魔法が、怒濤のように噴出し、もう一体のビープシーカーへ命中。
そのまま青白い奔流は、ビープシーカーを後ろの壁まで吹き飛ばした。
さらにその威力は、オートマタのボディを瞬く間に凍らせていく。
レーザー攻撃から脱したロイドは、一気に間合いを詰めた。
「行けるっ！」
ロイドは、床を蹴るように走り、巨大オートマタに肉薄した。
頭上からは、巨大な刃が振り下ろされる。
その一撃をかわすと、刃は床を断ち割った。
すると、刃から放たれた炎熱で、床材は一瞬にして蒸発した。
「超電磁ブレードかっ！」
ロイドも、噂だけは聞いたことがある新式兵器だ。
その刃に触れれば、戦車ですら溶かし、焼き切ると言う。
無論、人間など、かすっただけで肉も骨も蒸発するだろう。

「くそっ、オートマタにしては反応が速い！」
ロイドは、巨大オートマタが振り回す刃を避けるだけで精一杯である。
と、ティオが鋭い声を放った。
「……あれは、単なるオートマタではありません！」
「なにっ？」
「自律式の白兵専用人形兵器です！　エプスタイン財団でも実用化されていない兵器です！」
ティオは、魔導杖をつきつけ、赤い巨体を探っている。
「通常のオートマタとは、思考や反応速度が格段に違います！　言うなれば次世代オートマタ……しかしなぜこんなモノが……」
つぶやく間も、人形兵器は、ロイドに攻めかかっていた。
しかも超電磁ブレードの狙いは、一撃毎に正確さを増している。
どうやらロイドの動きを学習し、次にどう動くかを瞬時に予測し始めているらしい。
ロイドも、一撃をかわすのが次第に困難になってきた。
「とにかくこれじゃ接近もできない！　こいつの注意を逸らしてくれ！」
「了解！」
「任せておけ！」
後方から、エリィとダドリーが導力銃を撃ちこむ。
狙いは、人形兵器の顔面。

眼球代わりの視覚センサーを潰すつもりだった。
銃撃を受けた人形兵器が仰け反る間に、ティオは解析を進めている。
「……水属性なら、有効率一五五％！　他の属性攻撃でも一〇〇％の有効率を確認！」
「意外に脆いな！」
ロイドは、ようやくつかんだ人形兵器の防備にうなずいた。
特定の属性に耐性を持つなら、その攻撃は通らない。
しかしティオの解析では、そのような耐性は無いと言う。
巨大で、頑丈に見える人形兵器だが、あらゆる攻撃が効果的なのだ。
「ランディ、攻めるぞ！」
「おおよ！」
ロイドは、ランディと呼吸を合わせ、巨体に迫った。
素早く身を低め、一撃をやり過ごすと、左右のソードブレイカーを叩きこむ。
ばりばりと電光をまとった衝撃警棒は、人形兵器の胴体を直撃。
同時に、ランディも得物を振り下ろした。
「うっしゃあ！　潰すぜ！」
炎をまとった斧槍オーガクラッシャーが、巨体のど真ん中を打つ。
重々しい一撃を浴び、巨体は大きく傾いだ。だが……
「まずいっ！」

人形兵器は、懐に入ったロイドめがけ、再び剣を振るった。
ロイドは、超電磁ブレードを避けたが、溶鉱炉のような灼熱が、ぶわっと襲いかかる。
さらに人形兵器は、ランディにも剣を振るい、弱る様子もない。
正面攻撃では、人形兵器に痛打を浴びせるのは難しいようだった。
「しぶといっー！」
ロイドは、攻撃をかわしながら、タイミングを見計らった。
そして突然、床に転がり、人形兵器の股下をくぐり抜ける。
巨体の背後へ出たロイドは、すかさずソードブレイカーを構えた。
見上げれば、目の前には人形兵器の背中があり、導力推進装置や各部を繋ぐパイプが剝き出しになっている。
ロイドは、それへソードブレイカーを叩きこんだ。
「これでどうだ！」
ソードブレイカーは、ただ単に打撃を与えるだけの武器ではない。
犯罪者が持つ凶刃をへし折る目的と、威力を有している。
それが人形兵器の導力機構を断ち、砕き、破壊した。
ロイドの一撃ごとに、巨体が痙攣する。
遂に人形兵器の頭が、内側から吹き飛び、盛大に爆発した。
巨体はがくりと膝をつき、その機能を永遠に停止したのだ。

「……ふぅ……手間取らせたな」
ロイドは汗を拭って、ソードブレイカーを収めた。
ランディは、停止した人形兵器を凝視している。
「しかし手強かったぜ。どうしてこんなモノを、ルバーチェが？」
ティオは、崩れ落ちた巨体を撫でて、つぶやいた。
「このようなシロモノを作れるのは、エプスタイン財団の他には……」
「どこなんだ？」
「……いえ、断定はできませんので、今は……」
ティオは、何か心当たりがあるようだったが、口をつぐんでいる。
ロイドも、気にはなったが、そのまま前進を再開した。

オートマタたちが出てきた部屋の奥に、さらに通路が続いていた。
突きあたりには、木製の重厚な扉。
ティオは、魔導杖をかざして、周囲を探った。
「大丈夫です。もうオートマタの存在も感じられません」
ロイドが扉を開けると、瀟洒な部屋が現れた。
無数の調度品に飾られた、マルコーニの私室らしい。
棚には、ルバーチェ商会の取引記録らしいファイルが並んでいる。

エリィは、すぐに棚からファイルを一冊抜き取った。
「……見て、これ。例の競売会の目録よ。落札者名、価格まで全部載ってるわ」
ランディも、別のファイルをぱらぱらとめくった。
「こっちは、武器密輸の収支報告書だな。責任者はガルシアのおっさんらしい。くそっ、金にモノを言わせて、最新式の銃を買いまくりかよ」
ティオも、また別のファイルを調べ始めた。
「これは政財界との贈収賄リストですね。ハルトマン議長だけでなく、帝国派議員、局長クラスの役人、警備隊の司令にも……」
ダドリーも、そのページを覗き込み、顔を歪ませた。
「警察局長の名前もあるじゃないか。道理で、捜査一課に圧力が掛かったワケだ！」
その喧噪から離れ、ロイドは一人、マルコーニ会長のデスクを調べていた。
引き出しには、要人と交わした手紙などが詰まっている。
それを吟味するうち、ロイドの目に、ひとつの箱が目についた。
しかも、厳重に鍵までかかっていたのだ。
「怪しいな……」
ロイドは、腰からピッキングツールを取り出すと、鍵穴を探り始めた。
解錠技術も、警察学校で習ったもののひとつである。
やがて手元に、がちゃりと反応が伝わると、蓋がゆっくり開く。

[illegible]
どちらの表紙にも、不気味なシンボルが描かれている。
ロイドがページをめくると、中には《真なる叡智》の取引リストが綴じられていた。
「あった！」
ロイドの言葉に、仲間たちも駆け寄ってくる。
瞬間、シンボルに気づいたティオが蒼白になった。
「それは……！」
「知っているのか、ティオ？」
「はい。教団の拠点に、それが描かれていました。何を意味するかは分かりませんが……」
「となると、やはり薬物は、教団の残党から流れたのか……」
ロイドが呻くうち、エリィがすぐに見知った人名を発見した。
「見て、ガンツさんの名前がここに！」
「ああ。他にもニコル、ディーノ、ボンド……失踪した人の名前は全部ここにある。やっぱりみんな、同じ薬物を使っていたんだ」
「これでルバーチェ商会と薬物の裏付けが取れたわね」
ロイドとエリィは、売却リストを前にして、うなずく。
だがダドリーは、もう一冊の仕入リストを見て、顔をしかめた。
「ちっ、こちらには日付と取引額しか書いていない」

「薬物の仕入先は、不明ですか？」

ロイドが覗き込むと、ダドリーも忌々しげに呻いた。

「……ああ、記録はされていない。しかし一体、何者だ？　取引の頻度から見て、クロスベルの人間であるのは間違いないようだが」

「それがこの事件の首魁……」

ロイドたちは、顔を見あわせた。

教団の残党が、このクロスベルに潜んでいる可能性が高い。

そして今もなお、どこかで何かを企んでいる。

ルバーチェ商会と、薬物の使用者たちが消えたことにも関係しているはずだ。

「その人物をどうやって捜し出すか……」

ロイドは言いかけて……ようやく、気がついた。

箱の中には、ファイルの他にも、小さな物体が保管されていたのだ。

それはクロスベル市警のバッジ。

身分証を兼ねたモノで、ロイドたちもひとつずつ有している。

しかも表面は、鋭利な刃物で斜めに傷つけられていた。

ロイドは、その傷にたしかな見覚えがあった。

「これは……！」

裏返してみれば、持ち主の名前が刻まれている。

ガイ・バニングス捜査官――

紛れもない、ロイドの兄のバッジだったのだ。

「……そんな……どうしてこれが、ここに……」

たしかに兄が死んだ時、兄のバッジは発見されなかった。

いつも身につけていたのにどうして……と、疑問に思ったことを覚えている。

そしてティオも、傷ついたバッジに目を見開いた。

「ロイドさん、それはもしや……！」

「ああ、兄貴のだ……ティオも見覚えがあるのかい？」

「私たちを助けてくれた時に付いた傷だって言ってました……俺の勲章だって……」

その言葉に、ダドリーも大きく呼吸を吐く。

「道理でうるさく言っても、新品と交換しなかったわけだ」

「ダドリーさんもこの傷を……？」

「ああ、覚えている。私とガイは、意見をぶつけてばかりだったが……あいつが優秀な捜査官だってことは、認めていたよ」

ダドリーは、眼鏡の位置をそっと直した。

「あいつはいつも無鉄砲で、それでも幾多の事件を解決してきた。だからガイが死んだ時は誰もが信じられなかったのさ。まさかあいつが……と」

「…………」

「我々も、ガイを殺した犯人を必死に追った。だが結局、手がかりすら得られず、事件は迷宮入り……弟のお前には、辛い思いをさせたな」

ロイドは、手のひらのバッジを見つめた。

ずっと探していた遺品と、まさかこんな形で対面するとは思わなかった。

しかしこれがここにあるということは……

「……兄貴の死には、教団の残党が関わっている」

ロイドは、ぽつりと言った。

「そして兄貴を死なせた犯人は、この事件に結びついているかもしれない。俺はそう思います。だけど……」

兄の遺品を胸にしまって、ロイドは一同を見渡した。

「それを突き止めるよりも先に、この事件を解決しなきゃいけない。相手が教団の残党なら、何をしでかすか分かりません」

言うとロイドは、決意を瞳に灯した。

そして彼らにとって……

いや、クロスベルにとって一番長い日がやって来たのだ。

第四章　首魁と執行者

「……なるほど。やっとたどりついたみたいね」

太陽の光が届かぬ地下施設。

恐らく広大。しかし全貌は見えない。

その暗がりで、少女がノート型端末のキーをかたかたと叩いている。

すみれ色の髪に、古めかしいドレスを着た姿は、まるで人形のよう。

事実、この地下施設の上には、人形工房がある。

少女……レンが住み暮らす、ローゼンベルク工房が。

「これでパーティの準備も整ったのかしら？　あのお兄さんたちが鬼を見つけるか、それとも鬼がこの街を食べてしまうのが先か……」

レンは、なおもキーを打ち、ネットワークを疾走する。

飛び交う情報を貪欲に喰らい、この地下施設に居ながらにして、クロスベル市の状況をつぶさに調べ尽くしていた。

「いずれにしても、騒がしくなるわ。これも自業自得……いいえ、因果応報かしら」

レンは、画面から目を離さずに続けた。

「それにしても、お兄さんたちが戦った、あの紅いお人形……なかなか優秀に見えたけど、案外、脆かったわね」

端末の画面には、ロイドたちと人形兵器の戦闘が映っている。

レンは、ルバーチェ商会内部の監視カメラに潜り込み、その記録を取り込んでいたのだ。

「所詮、試作品ね。自律的な状況判断と、柔軟な行動選択に難ありだわ。まだまだ、あの子の足下には及ばない。それに試作品をあんな連中に流すなんて……」

レンは、ノート端末を静かに閉じた。

小柄な少女は、暗がりの奥へ歩き出し、不意に天井の方を見上げる。

「でも、これでやっと、最後の賭けが始められるわ。《パテル＝マテル》……一緒にお茶にしましょうか」

見上げた先に、鋼鉄の巨体が屹立していた。

真紅の装甲で全身を覆った、人形兵器。

それに向かってレンは、友だちのように話しかけた。

「これから長い一日になるわ……たぶん、この自治州が始まって一番長い一日にね」

巨体は、眼球を光らせ、電子音で応えた。

そしてレンの予言は……

＊＊＊＊＊

すでに日は落ち、夜の帳が下りつつある。

ロイドたちは、ダドリーと別れ、クロスベルの南の外れへ向かっていた。

ランディは、焦れたように呻いている。

「遅い、遅すぎんだろ！　あの先生！　午後には連絡をくれるんじゃなかったのかよ！」

エリィも、落ち着かぬ様子でつぶやいた。

「もしかしたら、成分の分析に手間取っているのかもね」

「ああ、なにしろ教団の錠剤だからね。いくら薬学の権威でも手こずっているのかも」

ロイドも、待ちくたびれたように嘆息する。

遅くとも夕方までには……という約束だったが、ヨアヒムから、成分分析結果はまだ届いていなかった。

錠剤の効果が分かるまでは、捜査も進めにくい。

「とにかく待っていても仕方ない。こちらから出向こう。途中までの結果だけでも、聞いていけば参考になるだろう」

「はい。時間は惜しんだ方がいいと思います……」

ティオもつぶやいて、街の景色を眺めた。

普段暮らしている街のどこかに、教団の残党が潜んでいる。
その事実は、過酷な過去を持つティオにとって、耐え難い恐怖かもしれない。
ロイドは、一刻も早く、懸念を取り除いてあげたかった。
「とりあえずバス停に急ごう。まだ聖ウルスラ医科大学に行く便は……」
だがそう言って、ロイドたちが駅前通りを抜けた時。
ウルスラ街道へ向かうバス停には、何十人もの客が列を成していた。
バスは、五分おきに来るはずだ。それほど客が溜まるはずもない。
「あれっ、遅れてるのかな？」
「らしいな……ってことは、今から歩きかよ」
ロイドとランディは、肩をすくめた。
ロイドたちの脚力なら、聖ウルスラ医科大学まで歩いてもかまわない。
ロイドのエニグマが鳴ったのは、その時だった。
だがそれに伴う時間の損失を考えると……
通信機能を立ち上げると、ダドリーの無愛想な声が聞こえてくる。
『ダドリーだ。そちらの状況はどうだ？』
「今、駅前通りです。そちらこそ、どんな状況ですか？」
ルバーチェ商会に踏み込んだ後、ダドリーは警察本部に戻っていた。
爆破予告の真偽や、警察内部にルバーチェの協力者がいることなど、確認すべきことが山の

ようにあったからだ。
スピーカーから聞こえるダドリーの声も、憤懣に満ちている。
『フンっ、爆破予告は完全にガセだったようだな。部下たちが、最新の導力探知器で空港内をくまなく調べたが、何も出てこなかったそうだ』
「やはりルバーチェの動向と何らかの関係が？」
『今、その線も探っている。上層部も、ルバーチェが雲隠れしたと聞いて、大あわてだ。まったく、いつも手を打つのが遅い……』
と、ダドリーの声が一オクターブ上がった。
『……ちょっと待て。駅前通りにいるだと？　どこへ行くつもりだ？』
「聖ウルスラ医科大学です。例の錠剤の、成分調査の連絡が遅れているので、直接訪ねてみようかと」
『なんだ、まだ聞いていないのか？　……まったく。その手の連絡は、正確な時間を決めて迅速にだな……』
ぶつぶつとぼやくダドリーの声を漏れ聞き、エリィとランディも苦笑した。
ロイドは、エニグマを握ったまま、頭を下げた。
「すみません。こちらも急ぐつもりです」
『いいか、薬の成分が明らかになれば、こちらも上層部を動かしやすくなる。その分析を依頼した医師には、期待しているぞ。何という名前の医師だ？』

「ああ、ヨアヒム・ギュンター先生と言って、神経科と薬学担当の准教授です。三十代半ばくらいですけど、かなり有能という評判ですよ」
『ふむ、それなら少しは、期待できるかもしれんが……』
そこまで言って、不意にダドリーの声が途絶える。
ロイドは、エニグマの故障かと思い、大声で呼びかけた。
「ダドリーさん？　聞こえてますか、ダドリーさん！」
『大声でわめくな。ちゃんと聞こえている』
「あ、なんだ」
『それより、ヨアヒム・ギュンターと言ったか？　その男、眼鏡をかけた、わりと飄々とした感じの男か？』
ロイドは不審な顔で、ランディたちと視線を合わせた。
「ええ、そうですけど……会った事があるんですか？」
『……………………』
「あの、ダドリーさん……？」
『……ああ。たしかに会った。二ヶ月ほど前、劇団《アルカンシェル》のプレ公演で、市長を暗殺しようとした犯人……アーネスト元秘書の取り調べの最中にな』
「……え……」
まさか今ここで、その事件の話が出てくるとは思わなかった。

あれは、[illegible]、ヘンリー・マクダエルが襲われた事件だ。
無論、エリィの祖父、その人である。
しかも犯人は、エリィとも親しかった、市長秘書アーネストだったのだ。
逮捕したのは、ロイドたち自身。
だが逮捕後の取り調べは、ダドリーたち捜査一課に任せてある。
ダドリーは、ロイドたちが忘れかけていた名を出して、先を続けた。
『お前たちが逮捕した時からずっと、アーネストは錯乱していた。取り調べもできない状態でな。そこで仕方なく、彼が以前から相談していたカウンセラーを、聖ウルスラ医科大学から呼び寄せたのだ』
「ちょ、ちょっと待ってください！　じゃあヨアヒム先生が、アーネストの？」
『ああ、主治医というワケだ。彼の治療を受けて以来、アーネストも落ち着きを取り戻し、我々もさすが聖ウルスラ医科大学の医師だと感心したが……』
ロイドは、仲間たちに視線を送った。
エリィは、自らの祖父を裏切った男の名を聞いて、顔を青ざめさせていた。
ランディも、不可解そうに腕を組んだ。
「ヨアヒム先生と、あの人が、繋がっていたなんて……」
「俺たちには、そんな話、しなかったな。患者の守秘義務かもしれんが」

ティオは、ただ黙している。
彼女なりに、この繋がりの意味を考えているのだろう。
「……分かりました。本人にそれとなく聞いてみます。ではまた……」
ロイドは動揺を抑えて、通話を切った。
四人の脳裏には、逮捕時の様子が蘇っている。
アーネストは、ティオが放った導力魔法を打ち砕き、尋常ではない速度で逃げ延びようとしたのだ。
あの絶叫も、今思えば、錯乱の度を越している。
「ははは、悔しいだろうね！」
「みんな、私の手のひらの上で踊っていたにすぎないんだよ！」
「こんなところで終わるものか……私は……次期市長になるのだ！」

ランディが、厄介そうに顔をしかめた。
「……考えてみりゃあ、あの時のアーネストの態度と馬鹿力はどう考えても……」
「ガンツさんと、そっくりかもしれませんね」
エリィも言って、眉をひそめる。
「しかもその主治医がヨアヒム先生……だったら、私たちが薬物の話をした時、共通項に気づ

呼び出したのは、ヨアヒム医師本人。
しかし、いくらかけても、通話に出る様子はなかった。
「もしかしたら、あの薬物……俺たちが思うよりずっと前から、この街に浸透していたのかもしれない。それをアーネストも手に入れていた……」
ロイドは、顎をつまんで推理を組み立てた。
「そのアーネストを、ヨアヒム先生が看た……とすれば先生も、アーネストの身体から薬物反応を得ていたはずだ。でもそれを俺たちには、言わなかった……」
「おい、ロイド……」
「まさか、あの先生も……」
ランディとエリィも、唇を震わせている。
だがティオは、確信したように強くうなずいた。
「ヨアヒム先生が治療した後、アーネストが落ち着きを取り戻した……というのも、おかしな話です。もしあの男が薬物中毒だったとしたら……その可能性が高いな」
「獄中のアーネストに薬物を投与した……」
ロイドは、恐るべき結論に達した。
「もちろん、これは推測に過ぎない。でも……」

その時、すぐ傍の建物から、あわてて男が飛び出してきた。
バス会社の事務員であることは一目瞭然だ。
「あ、あの、特務支援課の方ですよね！」
「そうです。特務支援課、ロイド・バ……」
「今、バス便の運転手から連絡があったんです！　魔獣に襲われたと！」
見ればバス停には、まだバスが来ていない。
事務員は、息せき切って叫んだ。
「ば、場所は、医科大学のすぐ手前だそうで……バスにはお客様が多数……」
「分かりました、お任せを！」
そこまで聞くと、ロイドたちは走り出した。
街道に、魔獣が現れることは珍しくない。
だが彼らが見たものは……

「遅かったか……」
ロイドは、悔しげにあえいだ。
すでに薄暗くなった街道に、定期バスが停まっている。
そのドアは開け放たれ、物音ひとつ聞こえてこなかった。
だがバスを襲ったはずの魔獣の姿も、どこにもない。そして……

「だめです……半径一〇セルジュ以内に、人体の反応はありません」
ティオも、絶望したようにつぶやく。
ロイドたちは、武器を構えたまま車内に踏み込んだ。
座席には見舞い品らしい、花束やお菓子が置かれたままになっている。
だがロイドは、不自然なことに気づいていた。
「おかしいな……争った形跡がない。魔獣に襲われたと聞いていたが……」
「ええ、それに路肩に停められているのも変よ」
エリィも、座席の間を調べて言った。
「まるで整然と、停車を命じられたみたい。本当に魔獣だったのかしら？」
するとランディも、ひざまずいて床に目を凝らす。
「血痕ひとつ付いていやしねえ。だとすると乗客は無事で、生きたままどこかへ連れて行かれたんじゃねえか？」
「あるいは、聖ウルスラ医科大学へ避難したのかもしれません」
ティオは、導力杖の先端をかざして何かを探っている。
「たしかに魔獣らしき属性反応は、残っています。しかしバスの外だけです。乗客の人たち逃げ延びた可能性も十分ありますね」
「よし……一応、セシル姉に問い合わせてみるか」
ロイドは、エニグマを取りだして通信機能を入れた。

だがいくら呼び出し音が鳴っても、医科大学からの応答はなかった。
「変だな、繋がらないなんて……」
「まさか、医科大学にまで魔獣が入り込んだんじゃ――！」
エリィの言に、ロイドの背筋が凍り付いた。
「いや、そんな……でも……」
ロイドは、先ほどの推理を思い出した。
ヨアヒム・ギュンターが、この事件に関わっているかもしれない。
だとすれば、医科大学も安全な場所とは言い切れないのだ。
そう気づいた瞬間、ロイドはバスから飛び出していた。
あわててエリィたちもバスを下り、彼の後に追いすがる。
「待ってよ、ロイド！　焦らないで！」
「急ごうぜ、セシルさんが危ねえ！」
ランディの声に、ティオも導力杖をかざした。
「もし病棟が襲われたら、大勢の患者が……」
その声を聞きながら、ロイドは衝撃警棒を握る。
夕闇は、いつしか真の暗闇に変わっていった……

聖ウルスラ医科大学。

[illegible]
[illegible]病棟にはまだ明かりが点き、しんと静まりかえっている。
だがロイドは、正門に近づくと、歩みを止めた。
「おかしいな、もう閉門してる……」
正面の入口は、黒い鉄扉で封鎖されていた。
夜でも、緊急外来を受け付ける医科大学が、門を閉ざすことは滅多にない。
エリィもランディも、異常を感じて、武器を握り直した。
「どう思う？　ここからじゃなんとも言えない……」
「ティオすけ、どうだ？　なにか判るか？」
しかしティオが魔導杖のセンサーをかざす直前……
「なんだっ……！」
ロイドめがけて、何者かが猛速で襲いかかってきた。
ロイドは、ソードブレイカーを振るい、必死にそれを弾き返す。
襲撃者は、宙を舞い、後ろへ下がった。
黒ずくめのスーツに身を固めた、サングラスの男。
明らかに、ルバーチェ商会の構成員である。
しかしその動きは、人間とは思えぬ速度だった。
「みんな気をつけろ！　こいつは……！」

ロイドが警告すると……暗闇から、ざざっと構成員たちが湧いて出た。
十数人。いずれも拳銃や鉈で武装している。
応じてランディも、前へ出た。
「例のクスリをキめてやがるな！」
叫ぶランディへ、数人の構成員が躍りかかった。
猛禽の如く空中へ飛び、凄まじい速度で鉈を振り下ろす。
ランディはそれを、斧槍オーガクラッシャーで薙ぎ払った。
ロイドにも再び、男たちが群がってくる。
「お前たち、ここで何をしている！」
だが叫んでも、答える者はいなかった。
ただひたすらに、ロイドたちへ鉈を振るい、怯む様子もない。
これほどストイックに戦うマフィアたちを見たのは初めてだ。
いや、あらゆる感情を排し、戦闘機械の如く戦っている、と言うべきか。
背後からエリィも、導力銃を狙い撃った。
「まさかバスを襲ったのも、こいつらじゃ……！」
エリィの銃弾は、構成員たちの肩を、足を、正確に撃ち抜いていく。
さしもの男たちも、ぐらりとよろめいた……が。
「……う、嘘でしょ？」

男たちは、銃弾を受けてなお、銃を構えた。
鮮血を流しながらも、その表情には一片の苦痛もない。
ティオも、覚悟した表情で導力杖を構えた。
「どうやら薬物の効果のようです。普通の人間と同じように制圧するのは無理かと……それにこの人たち……」
黒ずくめたちに向けた導力杖の先端が、淡く光る。
ティオは、訝しげに表情を曇らせた。
「感情のゆらぎが一切感じられません。もしかすると自我を失っているのかも……」
「つまり、操られているってことか？」
ロイドが言った時、背後の病院から、ガラスが砕ける音が聞こえてきた。
同時に悲鳴。
照明が次々に消え、病棟が暗黒に包まれていく。
ロイドは、構成員たちを、きっと睨んだ。
「中で何をしている！　答えろ！」
それでも構成員たちは、黙して襲いかかってきた。
ロイドが、ソードブレイカーで腕をへし折っても。
ランディが、オーガクラッシャーで足を叩き折っても。
痛みひとつ感じず、何度でも立ち上がってくるのだ。

「[illegible]」
あらためてロイドは、[illegible]に力を込めた。
「昏倒させよう！　意識を失わせるしかない！」
ロイドは、電光をまとったソードブレイカーを、男たちの胸元に叩き込んだ。
電撃を浴びた構成員たちは、さすがに痙攣し、その場に倒れていく。
ティオも、素早く水属性の導力魔法を顕現させた。
「ダイアモンドダスト！」
構成員たちの周囲に、煌めく閃光が拡散する。
まるで、大気中の氷の結晶が輝くように、それは神秘的な光となった。
同時に、構成員たちの身体が凍結していく。
もはや自由に動ける構成員は、一人もいない。
その間にエリィは、正門に取りつき、施錠された鍵を至近距離で撃ち抜く。
正門を突破したロイドたちは、敷地内へ飛び込んだ。
そのまま一気に受付へと飛び込んだが……
「ちいっ！」
ロイドは、身を低めて一撃をやり過ごした。
飛びかかってきたのは、漆黒の軍用犬。
だがその目も、以前より殺気に満ち、四肢も異常なほど膨張していた。

とても犬とは思えぬ、仔牛ほどの体格にまで育っている。

「こいつにもクスリを飲ませたのか！」

ロイドは、ソードブレイカーを連打した。

鋭い一撃は、刃物のように軍用犬を斬り裂き、壁まで押し戻す。

そこへ、無数の銃撃が襲いかかった。

また構成員の一団が現れ、機関銃を乱射したのだ。

エリィは、待合室のソファに身を隠し、導力銃で応戦した。

「病院内も、奴らの手に落ちてるみたいね！」

「ああ、何が目的か、分からねえけどな！」

ランディは叫んで、構成員めがけ金属筒を放った。

煙幕手榴弾、クラッシュボム。

炸裂と同時に黒煙が沸き立ち、構成員たちが動揺する。

ロイドは、その遮蔽を利用して、一気に突っ込んだ。

「どけっ！」

ロイドは、前後左右へ武器を振るい、構成員たちをはね飛ばした。

ランディも、炎をまとわせたオーガクラッシャーで、男たちを一掃する。

ようやく敵を排除すると、ティオも駆け寄ってきた。

「ロイドさん、向こうの部屋から生体反応が……！」

「よしっ！」

ロイドたちは、受付を通過し、事務棟の奥へと走った。

ティオが指した扉には、外側から施錠がされている。

その鍵に向かって、ランディが気合一閃、斧槍を振り下ろした。

「おおりゃっと！」

火花を散らして鍵が両断されると、ロイドはその扉を押し開けた。

すると無数の視線が、ロイドたちに向けられてきた。

「だ、誰だ！」

中にいたのは、数十人の人々。

半分は白衣を着た病院関係者や患者。さらに見舞客らしい人もいる。

ロイドは、ほっと息をついて胸のマークを指した。

「クロスベル警察、特務支援課、ロイド・バニングスです。お怪我はありませんか？」

「け、警察……！」

「助かった！」

人々の間から、わっと歓声があがり、ロイドたちはすぐに取り囲まれた。

「よく来てくれた！　あの黒ずくめの男たちが……」

「病棟の方にまだ……」

「バスに乗っていたらいきなり……」

同時に話し出す人々を鎮めるように、エリィが声を響かせた。
「皆さん、落ち着いて。順番に話してください」
広い部屋は、医師や看護師たちの控え室らしく、仮眠用のベッドもある。
そのひとつには、足に包帯を巻かれた男性が寝そべっていた。
ロイドは、その服装を見て、彼が誰だかすぐに気がついた。
「あなたは、定期バスの運転手の方ですか？　魔獣に襲われたと連絡してきた……」
「そ、そうです……」
運転手も、安堵した表情でロイドを見上げている。
「その足は、奴らに？」
「バスの前に、いきなりあの魔獣のような犬が現れて……その後、黒ずくめの男たちも現れたんです。そしてお客様たちをここまで連れてきて……」
「はい、撃たれて……幸い、ここの看護師さんに手当してもらいましたが……」
すると、処置をしたらしい年配の女性看護師がロイドに気づいた。
「あんた……たしかセシルの知り合いの……」
「そうです……あなたは……」
その女性に、ティオが呼びかけた。
「……師長さん……マーサ師長さん」
「ティオちゃん！　あんたも来てくれたんだね！」

五年前、ティオは、ここに入院していた。
邪悪な教団から救出された直後、衰弱していたティオを看病してくれた一人が、このマーサ師長である。
ティオは、顔なじみの師長に問いかけた。
「セシルさんは無事ですか？　シズクちゃんは？」
「それが分からないんだよ」
マーサは、心配そうにつぶやいた。
「セシルや患者さんたちは、病棟にいたはずさ。けど、あっちにも例の男たちが行ったらしいんだ。いったい何がどうなっているんだい？」
「すみません、詳しいことはまだ俺たちにも……それからヨアヒム先生はどちらに？」
「たぶん研究棟だね。今日はずっと研究をされてたから」
ロイドは、すばやく思考を巡らせた。
いったい、バスの乗客を連れ出した意味とはなんだろうと。
その疑問に、ティオが答えを導き出した。
「もしかしたら……生贄かもしれません」
「生贄？」
「そうです。相手が教団の残党なら、何かの儀式を企んでいるかもしれません。私をさらったように、この人たちも儀式の生贄にするつもりで……」

するとエリィも、確信してうなずいた。
「きっとそうよ。失踪したガンツさんたちも、そのために連れ去られたんじゃ？」
「じゃあセシル姉やシズクちゃんも……」
ロイドの背筋を、悪寒が走り抜けた。
彼は再び、衝撃警棒を握り直して、人々に向きなおった。
「病棟へ行ってきます！　皆さんは、安全が確認できるまで、ここにいてくださいね！」
「セシルたちを頼んだよ！」
威勢のいい応援を背に、ロイドたちは再び走り出す。
そしてすぐに、ティオが異変を察知した。
「多数の属性反応を捉えました！　屋上庭園！　しかも……さっきの軍用犬とは、比べものにならないくらい反応が強い！」
「なんだって！」
ロイドたちは、警戒しつつ階段を駆け上がり、上階へ向かった。
そして屋上庭園に通じるドアを開けると……

「ロイド！」
わななくような、女声が聞こえてきた。
夜の闇に覆われた屋上庭園には、街灯の明かりだけが点いている。

その光をスポットライトのように浴びるのは、セシルだった。
彼女の背後には、パジャマを着た子供たちも十数人、かたまっている。
その中には、目を閉じて震える少女もいた。
目を患い、長期入院しているシズク・マクレイン。
無論、《風の剣聖》アリオスの娘である。
そしてセシルは、子供たちを背にかばい、迫り来る何かに身を挺していた。
しかし彼女たちを取り囲んでいたのは……
ロイドは、励ますように声を飛ばした。
「セシル姉！　シズクちゃん！」
「なんだ、あれは……！」
ロイドも、一瞬それが何か判別できなかった。
高さ、約五アージュ。
見上げるほど大きな、紫色の、ヤドカリに似た生命体。
その甲殻は、不気味な突起で覆われ、前部ではカギ爪を備えた腕が、かちゃかちゃと忙しく動いている。
だが幾多の魔獣を退治してきたロイドも、初めて見るシロモノだった。
それが五体、セシルと子供たちにじりじりと迫っていたのだ。
エリィとランディも、すぐに武器を構えた。

「まさか、これもルバーチェ商会の連中が……」
「それにしちゃあ、可愛気がなさすぎるぜ！　もしかしたら教団の手先じゃねえのか！」
ティオもすばやく、導力杖による解析を終えていた。
「魔獣デスムーン。強度三四。属性有効率、地が二〇〇、火が一二五ですっ！」
ロイドは、それが難敵と知って口元を引き締めた。
「ランディ、魔獣を押さえるぞ！　その間にセシル姉たちを逃がす！」
「おお、任せとけ！」
言う間に、エリィとティオはその場で精神を集中し始めた。
彼女たちも、並みの武器では効かぬと悟り、導力魔法の準備に入ったのだ。
ロイドは、二人の発動時間を稼ぐため、魔獣の真っ直中へ飛び込んでいった。
「セシル姉、今行くっ！」
ロイドのソードブレイカーが、前後左右の魔獣を殴打する。
だが魔獣デスムーンの巨体はびくともせず、ランディも斧槍を叩きつけた。
「かち割ってやるよ！」
しかし満身の力を込めた一撃も、甲殻にひびを入れたのみである。
魔獣もカギ爪で応戦し、ランディはそれを斧槍で受け止めた。
「今のうちだ、ロイド！　早く行け！」
ロイドは、魔獣の間を駆け抜けた。

[illegible]魔獣たちのカギ爪が、容赦なく襲いかかってくる。
それを巧みに回避し、ロイドはセシルたちの元へたどり着いた。
「セシル姉、大丈夫かい！」
「え、ええ……」
「早く建物に入って！　正面受付の方はもう安全だから……」
その時、魔獣のカギ爪がロイドを直撃した。
硬質の革ジャケットが、まるで薄紙のように裂け、血がしぶく。
それでもロイドは、セシルたちをかばい続けた。
「手強いっ……！」
だがその時、ようやく。
エリィの身体から、琥珀色の光が放たれた。
地属性の導力魔法が、彼女の腕から顕現したのだ。
「釘付けにするわ！　ゴルゴンブレス！」
瞬間、一体の魔獣デスムーンの足もとに、導力魔法が拡散した。
その光に呑まれた巨体が、ぴしぴしと音を立てて石化していく。
麻痺の攻撃魔法を受け、デスムーンはくぐもった悲鳴を撒き散らした。
だが容赦せず、今度はティオが目を見開く。
彼女は、微妙な位置に動き、魔獣たちに向かって杖を突きつけたのだ。

「行きます、ジアータイタニス！」
叫びと共に、やはり琥珀色の光が杖から閃く。
そこから直線上に位置する魔獣を、地表から導力魔法が突き上げた。
下腹部を貫かれたデスムーンたちは、苦しみ悶え、絶叫する。
ロイドは、その隙にセシルの背を押した。
「今のうちだ、早く！」
「わかったわ……みんなこっちよ！」
セシルは、子供たちから先に屋内へ逃がしていく。
だが同時に、魔獣たちの身体にも属性の光が集まっていく。
ロイドはすぐに、それが特殊攻撃の準備だと悟った。
「させるかあっ！」
セシルたちをかばうように走り、デスムーンの鼻面へ一撃を見舞う。
ソードブレイカーから電撃が走ると、集束した属性の光も雲散した。
ランディも同様に、斧槍で魔獣の攻撃を妨害した。
「喰らいなっ！」
炎をまとった斬撃を浴び、遂に一体の魔獣が爆砕する。
するとエリィも二度目の導力魔法を発現させた。
「もう一度行くわ！　ゴルゴンプレス！」

再び、石化魔法がデスムーンの巨体を硬化させていく。
だがその威力に耐えきれず、魔獣は甲殻ごと粉々に砕け散った。
ティオも、新たな射線を確保すると、地の導力魔法を打ち放つ。
「そこです！」
導力魔法ジアータイタニスが再度、二体の魔獣を貫いた。
デスムーンは、続けざまに吹っ飛び、残る一体にロイドが肉薄する。
旋風の如く回転したソードブレイカーが、電撃をまとって魔獣を打つと、デスムーンは奇怪な雄叫びを上げて絶命した。
「……やったか」
だらりと腕を下げるロイドに、セシルが駆け戻ってきた。
「大丈夫、ロイド！　その腕……」
「平気さ。こんなのかすり傷だ。それよりセシル姉たちは大丈夫だったかい？」
「ええ、あの魔獣がいきなり病院内に現れて……子供たちを連れて逃げる途中だったの。いったい何が起きているの？」
その問いに、ロイドたちも、困惑した顔を見せるしかなかった。
「俺たちにも、まだ詳しいことは分かってないんだ。それよりここは危ない。早く子供たちを安全なところへ連れてってあげて」
「受付近くの控え室に、他の看護師さんたちもいらっしゃいます」

エリィに言われて、セシルもこわごわとうなずいた。
「分かったわ……ロイド、あなたたちはどうするの？」
「研究棟に行ってみる。ヨアヒム先生を捜さないと……」
ロイドは、屋上庭園に面してそびえる建物を見上げた。
明かりは半ば消えているが、中から物音や気配は伝わってこない。
セシルも心配そうに、研究棟を仰ぎ見た。
「ヨアヒム先生、朝からずっと研究室に籠もっていたはずよ」
「うん。セシル姉も、気をつけて避難してくれよ」
ロイドは、セシルたちが階下へ去るまで、ずっと見守っていた。
そしてその姿が見えなくなると、再び研究棟に視線を向ける。
だが彼は、あまりにも静かな研究棟に不審を覚えていた。
「どういうことだ、まさかあそこにはもう……」

ロイドたちは、照明の落ちた研究棟に踏み込んだ。
廊下には、書類が散らばり、どの部屋にも争った跡がある。
しかし人っ子一人いない状況に、ランディが短く舌打ちした。
「遅かったようだな。ここにいた人はみんな拉致されたんじゃねえか？」
ロイドたちは、最上階のヨアヒムの研究室に踏み込んだ。

だがこの部屋だけは、争った形跡がなく、整然としたままだった。
開け放たれた窓からは、冷たい夜風が吹き込む。
だがその窓を背にして……
「おやおや……存外、早かったものだ」
一人の男が、ロイドたちを出迎えた。
それを見た瞬間、ロイドの身体は、凍りつくほど戦慄した。
ヨアヒムではなく、もっと意外な人物。
こんな所にいるはずがない……と、ロイドは我が目を疑った。
「お前は……！」
「ア、アーネストさん……！」
エリィは、思わず敬称をつけて、その名を呼んだ。
無理もない。
彼女はずっと、彼の善なる仮面と接してきたのだから。
元市長秘書、アーネスト・ライズは、月光を背にして微笑した。
「やあ、エリィ……何ヶ月ぶりかな？　まだ宵の口だが、月の綺麗な晩じゃないか」
元々は、端正な顔立ちの、青年だった。
しかし今、ロイドたちの前に現れた男の瞳は、血のように赤い。
ランディが吐き捨てるように呻いた。

「こいつ……様子が変だぜ」
「くくっ……言うものだな」
ティオは、魔導杖を握りしめて、アーネストと間合いを詰めた。
「……どうやらあなたが、ルバーチェの男たちと魔獣を率いていたようですね」
ロイドも、あらためてソードブレイカーを構えた。
「それよりどうして、お前がここにいる！　拘置所にいるはずのお前が……！」
市長暗殺未遂犯として、彼は拘留中のはずだ。
それがこうして目の前にいる事実が、ロイドには信じられない。
だがアーネストは、事もなげに肩をすくめてみせた。
「拘置所か……あの建物なら、この病院と同じく、既に我らの手に落ちている」
「なに……！」
「たかが看守程度、我々の力をもってすれば、制圧など容易い」
その言葉に、ランディが呆気に取られた。
「拘置所の警備は、ベルガード門の警備隊が担当しているはずだ……そんな場所を制圧したってのか？」
「ふふっ、まあいいじゃないか……全ては、偉大なる我らが『同志』の計画によるもの。ルバーチェの連中は、大いなる儀式を遂行するための駒に過ぎない」
その言葉に、エリィが眉を寄せる。

「偉大なる『同志』……？」
ロイドも、すぐその意味を悟った。
「そうか……つまりお前も首魁ではない。お前を拘置所から連れ出したのは、《D∴G教団》の残党にして、ルバーチェの背後に潜んでいた人物……」
「ほう……」
「この部屋の主……ヨアヒム・ギュンターというわけか」
ロイドは、遂に真実にたどり着いた。
何百人ものルバーチェの構成員へ、薬物を供給できる人間は一人しかいない。
それが、この事態の首魁なのだ。
と、アーネストは、乾いた哄笑を響かせた。
「ククク……ハハハハハハハハハッ……！」
笑いと共に、アーネストの身体が赤く発光する。
ロイドたちを圧するように光が膨張すると、やがてアーネストの手に……
一振りの長剣が現出した。
漆黒の柄に、真紅の刃。
禍々しい剣を握りしめ、アーネストはロイドたちを睥睨した。
「それが判ったところで、お前たちに何ができる？　私を退けられるかね？　『同志』の導きによって《真なる叡智》に至った私を……！」

エリィは、両手で導力銃を構えた。
「どうしてそこまで堕ちてしまったんですか！　邪悪な教団に手を貸すなんて……」
「堕ちた？　いや、真実に目覚めただけさ。そう……今なら判る。このクロスベルという地がどんな意味を持っているのか……理屈抜きで判るんだよ！」
ティオとランディは、不審そうにアーネストを見つめた。
「……意味不明です……」
「完全にイッちまってるな……」
アーネストを包む光は、ますます強まっていく。
しかしロイドは、毅然として間合いに踏み込んだ。
「戯言は、そのくらいにしてもらおう。元市長秘書、アーネスト・ライズ、自治州法に基づき、傷害、騒乱、不法占拠、薬物使用、拘置所脱走などの容疑で現行犯逮捕する」
それでもアーネストは、不敵な笑みを崩さなかった。
「そう焦ることはない。まだ夜は始まったばかり……『同志』の趣向も、これからだ」
「どういう意味だ？」
「そちらに招待状がある。せいぜい目を通しておくといい」
言って、アーネストはデスクを指さした。
机上には、黒と白のファイルが一冊ずつ置かれている。
だがロイドが一瞬、それへ目をやった時、アーネストが窓辺へ走った。

「それではまた会おう！　お前たちがこの先の死地を切り抜けられたらな！」
「逃がすか！」
あわててロイドは、アーネストの後を追った。
ここは研究棟の最上階である。
いくら薬物で強化されていても、飛び降りられるはずがない……
そう思ったロイドの目の前で、アーネストは窓から身を躍らせた。
「おいっ！」
ロイドたちは、窓から身を乗り出した。
見下ろせば、夜のエルム湖が眼下に広がる。
その湖面を横切るように、巨大な影が飛翔してきた。
同時に、甲高い叫び声。
エリィは、思わず絶句した。
「なんなの、あれ……！」
悠然と飛んできたのは、巨大な翼竜である。
長い翼で滑空し、音もなく、研究棟へ接近する。
その背中に、アーネストは軽々と着地した。
アーネストは、赤い眼光を閃かせ、にたりと笑う。
そのまま翼竜は、上昇気流に乗って、月めがけて飛び去っていった。

ロイドたちは、ただそれを見送るしかできなかった。
しばらくして、我に返ったロイドは、デスクをふり返った。
二冊のファイルが、夜風に吹かれて、ぱらぱらとめくれている。
それを見た途端、またロイドは驚愕を漏らした。
「これは……！」
絶句したロイドの周囲に、仲間たちも集まってくる。
最初に反応したのは、やはりティオであった。
「このシンボル……教団の……」
ファイルには、どちらもはっきりと例の印が描かれている。
そんなファイルがなぜここに……
思いつつ、ロイドは黒いファイルを開いた。
すると中には、見覚えのある《真なる叡智》の売買記録が綴じられていた。
つまり、ルバーチェ商会で見つけた記録と同じもの。
しかも製造記録まで記されていた。となれば……
「やはり……ヨアヒムが……」
ロイドが言葉を失った時、ティオが感情を抑えてつぶやいた。
「教団の残党……この事件の首謀者……」

次いでロイドは、白いファイルも確かめた。
最初に目に入ったのは、金銭の授受記録である。
支払人は、ヨアヒム・ギュンター。
受取人は、ハルトマン議長である。
しかも、一介の医師に支払うにしては、あまりに莫大な金額だった。
「どういうことだ、なぜ議長が、ヨアヒム先生に金を……」
さらにハルトマン議長からは、アパートの斡旋、交通費、研究費など、ヨアヒムのありとあらゆる費用が送られていた。
「これ……ハルトマン議長が、ヨアヒムを支援していたんじゃないか？　教団の残党と知ったうえで……」
「なんですって？」
「あるいは強請られていたのかもしれない。いくら議長だって、こんな金額、おいそれとは出せないだろう？」
ロイドが帳簿を見せると、エリィは愕然とした。
「まさか議長が……なんてこと……こんな人がクロスベルを司っているなんて……」
マクダエル市長の孫娘らしい言葉だった。
ランディもティオも、黙してこの真実を受け止めている。
ヨアヒム・ギュンターこそ、ロイドたちが炙り出そうとした事件の首魁、教団の残党に間違

いないのだ。
だがロイドは、すぐに驚愕から抜けだし、また黒いファイルを手にした。
「……この黒いファイルによれば、薬物を製造している場所は、病院じゃないな」
「じゃあ先生……いいえ、ヨアヒムは、別に拠点を設けていると？」
エリィの言を聞きつつ、ロイドはファイルをめくった。
「ああ。もしかしたら、失踪した人たちは、みんなそこにいるかもしれない」
するとティオが、白いファイルに手を伸ばした。
それをぱらぱらとめくるうち、途端にティオの顔が硬直した。
「…………！」
「どうした、ティオ……これは！」
ファイルに並んでいたのは、子供たちの顔写真。
みな表情は固く、恐怖に怯えた様子が見て取れる。
エリィは、口元を手で覆って戦慄を堪えた。
「これは……」
「はい……かつて教団に拉致された子供たちです……」
ティオは一瞬、躊躇い、それでも勇気を振り絞るように写真をたしかめた。
一枚一枚見つめるうち、記憶が甦るのか、顔が青ざめていく。
それでもティオは、過去と向き合い、やがて……

「あ……」
自分自身を見つけた。
写っていたのは、八歳ぐらいのティオ。
だがその目は完全に虚ろで、生気はまったく感じられない。
ロイドたちがいたたまれず押し黙ると、ティオはそれを仲間たちに見せた。
「……私……この頃に比べたら……少しはマシな表情になりましたよね？」
「ティオ……」
「もちろんよ、ティオちゃん……」
「ティオすけは、見違えるほど可愛くなったぜ」
絶句したロイドに代わって、エリィとランディがうなずいた。
ロイドが、エリィが、ランディが。
それぞれの手をティオに伸ばし、彼女の肩を支える。
するとティオも気が済んだように、ファイルをロイドに渡した。
「……お世辞でも嬉しいです。ロイドさん、後は確認してください」
「……わかった」
ロイドは、白いファイルをめくった。
するとまた、見覚えのある顔が目に飛び込んできた。
「……レンじゃないか」

ローゼンベルク工房の謎の少女。
黒の競売会の招待状を渡してくれた、あのレンも、幼い頃の写真が写っていた。
無論、その表情は暗く、陰鬱に覆われている。
「あの子も、教団に拉致された一人だったのか？」
「かもしれません。道理であれだけ見事なハッキングができたはずです」
ティオも、ようやく納得したようである。
だがロイドがさらにファイルを読み進め、最後のページに至った時……
「……！」
ロイドは、最後の写真を凝視した。
それは顔写真ではなく、どこか暗い場所の風景。
祭壇のような上に、透明な球体が据えられている。
しかもその球体の中には、身体をまるめて眠る一人の少女が浮かんでいた。
その少女こそ……
「キーア……」
「嘘でしょ……」
「キー坊……」
「…………」
ロイドたちは、その写真に食い入るように見入った。

だが紛れもなく、球体の少女はキーアなのだ。
しかも、その写真だけが比較的新しい。
ロイドは、写真を見つめたまま、ヨアヒムとの邂逅を思い出した。
「これは、たぶん教団の儀式なんだろう。キーアは、何かしらの役割を果たしていたんだと思う。そしてそれをヨアヒムは、知っていた……」
エリィも、力強くうなずいた。
「ええ。けれどキーアは、競売会に出品されていたわ」
「何らかの理由で、キーアは教団から離れた……と見るべきだな」
ロイドがつぶやくと、ランディも身震いした。
「ってことは、ヨアヒムはキーアを探してたのか？」
「その可能性も否めないよ」
「けど俺たちは、そんなことも知らず、キーアをあいつに預けようとしてたのか……」
ティオも、ふーっと深いため息を吐く。
「……危ないところでしたね。もう少しでキーアちゃんを教団の手に戻すところでした」
ロイドは、写真から目をあげてうめいた。
以前、この研究室に来た時、キーアは入院を妙に嫌がっていた。
その時は、単なる子供のわがままだと思ったのだが……
「もしかしたらキーアが入院を嫌がったのは、ヨアヒムが理由だったかもしれないな。あの子は、記憶はなくしていても、教団の邪悪さは感じていたのかも……」

ロイドは、キーアの直感に感謝した。
あのわがままが無ければ、今頃、キーアはどうなっていたか。
そして自分たちの無知にも、戦慄した。
無論、あの時点で、ヨアヒムの正体に気づくことなど、到底無理だったが。

すると開け放たれた窓辺の向こうから……
夜風と共に、誰かの声が聞こえてきた。
「……ええ、恐らく気づいていたのね、あの子は」
「君は……」
振り向いたロイドたちの前で、レンが笑っていた。
その身体は、空中に浮かぶ巨大な手のひらの上にある。
少女は、高層ビルほどもある人形兵器の手に乗っていたのだ。
「よくそこまでたどり着いたわね。クロスベルにそびえる高い壁に……」
「レン……」
「もっとも壁と言うよりは、底知れぬ奈落と言った方が似合いだけど」
そしてレンは、子供とは思えぬ不敵さを放った。
「あらためて自己紹介するわ。結社《身喰らう蛇》の執行者、Ｎｏ．XV……《殲滅天使》レン

よ」

「結社……それじゃあ君は……」

ロイドもようやく、彼女を理解した。

結社とは、存在自体が謎に包まれた組織である。

一説によると、エプスタイン財団に匹敵する最先端技術を有するとも言い、リベール王国においては、国中の導力が停止する異変にも関わったと噂される。

盟主と呼ばれる存在を頂点とし、その構成員は執行者と呼ばれている。

つまりその一人が、レンなのだ。

ロイドは、窓辺から少女に呼びかけた。

「レン……君が、俺たちに競売会の招待状を渡したのは、どういう意味だったんだ？」

「そのままの意味よ。このクロスベルにそびえる高い壁……つまりルバーチェ商会や、ハルトマン議長と結びついた教団の残党……それを見つけ出してほしかったのよ」

「知っていたのか、君も？　教団の残党がクロスベルにいると？」

レンは、静かにうなずいた。

「ええ。クロスベルには、教団の幹部司祭にして《真なる叡智》の開発者が潜んでいる……とまでは、知っていたわ」

「だったら、なぜ自分で探さなかったんだ？　君なら……」
「たしかにね。あなたたちより早く見つけられたかもしれない。でもね」
少女は、悪戯っぽく笑った。
「このクロスベルは、教団と七耀教会の緩衝地域。レンも執行者として活動するつもりはなかったの。あくまで観察だけしようって」
「でも俺たちには、力を貸してくれた……」
「ええ……あたしにも、見過ごせない過去だったから……」
レンがそう言うと、ロイドも気づいた。
教団から救出されたティオが、エプスタイン財団に引き取られたように。
もしやレンは、結社に引き取られたのではないかと。
そして自分に儀式を施した教団を許せず、ロイドたちに協力を……
だがそれを問う前に、レンはすみれ色の髪を夜風になびかせた。
「けれど、まだよ。あなたたちは、真実を知っただけ」
「分かってる。ヨアヒムを捕らえなければ、この事件は終わらない」
「そうね。だからひとつだけ、忠告してあげる。あの子はすべての鍵よ。くれぐれも奴らに奪われないことね」
「……キーアのことか？」
「他に、誰がいるの？　ふふふっ……」

するとレンの位置が、次第に浮上してきた。
人形兵器が導力器を噴かし、遠ざかろうとしているのだ。
「それでは、皆さん、良き夜を。すべてが終わったら、また会えるかもしれない……」
「待ってくれ、レン！　君は……！」
「行きましょう、《パテル＝マテル》」
それが、人形兵器の名なのだろうか。
呼ばれた瞬間、人形兵器は轟音を上げ、レンと共に夜空へ飛び去った。
部屋には突風が吹き込み、書類が吹雪のように舞い上がる。
それでもロイドたちは、彗星の如く消えゆくレンを、しばし見つめていた。

第五章　クロスベルの一番長い日

「……そう。急いで街に戻るのね」
セシルは、心配そうな顔でロイドを見つめた。
聖ウルスラ医科大学の周辺には、警備隊の装甲車が集まっている。
ロイドからの連絡で、タングラム門から部隊が駆けつけてくれたのだ。
昏倒したルバーチェの構成員たちは、すべて捕縛され、タングラム門へ護送されている。
もう特務支援課が、やるべきことは無いかに見える。
それでもロイドは、すまなそうにセシルを見た。
「ごめん、セシル姉……本当なら復旧の手伝いをしなくちゃいけないけど……」
「ふふっ、気にしないで。警備隊の方々もいるし、あなた達はあなた達にしか出来ないことをするべきよ」
「……ああ」
「……キーアちゃんの身が、危ないかもしれないんでしょう？」
ロイドは、セシルにも事情を話していた。
ヨアヒム・ギュンターが、この事件の首魁らしいことも。

「……正直、ヨアヒムの狙いは、まだはっきりとは分からない。この混乱した状況で、俺たちがどう動くべきかも……」
「ロイド……」
「でもキーアは……あの子だけは、必ず守ってみせるよ」
ロイドの言葉に、仲間たちもうなずきあった。
「……私も同じよ、ロイド」
「絶対に……守ります」
「ま、変態野郎の元には、意地でも戻させないッスから」
エリィが、ティオが、ランディが、それぞれの思いを口にする。
セシルは、そんな四人を見て、小さく微笑んだ。
「大丈夫……あなた達ならきっとやれるわ」
「セシル姉……ありがとう」
するとロイドたちに向かって、警備隊の指揮官が歩み寄ってきた。
眼鏡をかけた女性佐官の階級は、二佐。
クロスベル警備隊副司令にして、タングラム門の部隊を預かるソーニャ・ベルツも、笑みを浮かべている。
「フフ……その様子なら、大丈夫そうね」
「ソーニャ副司令……」

ロイドたちが敬礼すると、彼女も小気味よく礼を返した。
「拘置所も襲撃され、警備隊も相当混乱しているけど……この事態、ベルガード門の部隊と連携して、収拾に当たらせてもらうわ」
「判ってる。今夜は、長い夜になりそうだけど……お互い、頑張って乗り切りましょう」
「よろしくお願いします。正直、俺たち警察だけでは……」
ロイドは、ざわつく気持ちを落ち着かせた。
警察と警備隊が協力すれば、この非常事態も乗りきれるはずだ。
ただ、そのためにはどうしても捕らえなければならない。
首魁、ヨアヒム・ギュンターを。
そして、どうしても守らなければならない。
あの、小さな少女を。

ロイドたちが、クロスベル市内に帰還したのは、もう夜更けである。
特務支援課に戻り、一切をセルゲイ・ロウに報告するには、だいぶ時間がかかった。
そして執務室には、もう一人……
「おかしいとは思わんのか、お前たち？」
ダドリー捜査官は、黒と白のファイルを前に怒鳴った。
彼は、それを吟味したものの、まだ腑に落ちぬ様子である。

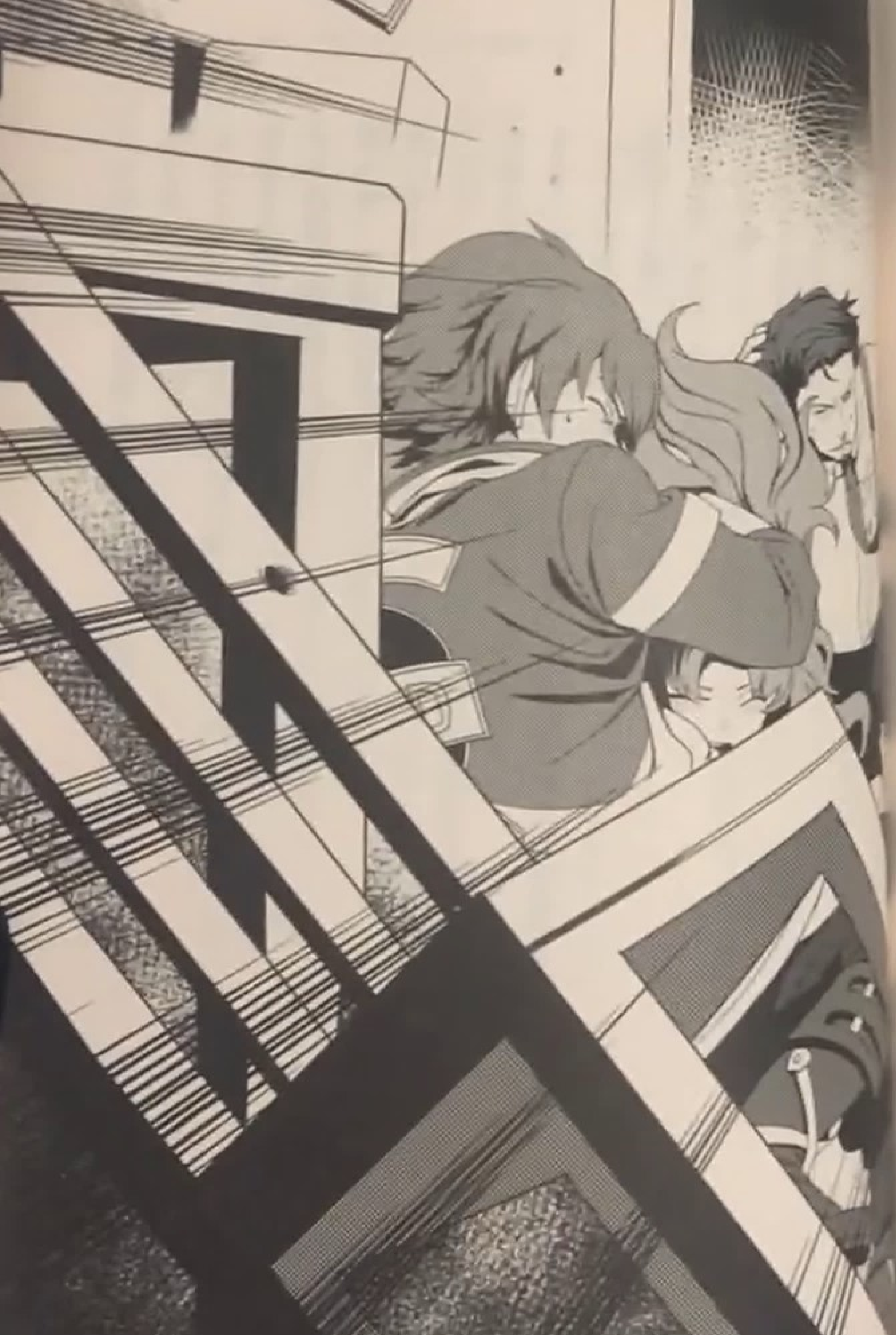
「どうしてわざわざこんな証拠を残していく？　我々を真実から引き離すための……ミスリードさせるための罠ではないのか？」
「ま、たしかにな」
セルゲイも、くわえ煙草で顔を上げた。
「だが現場を見たのはロイドたちだ。お前ら自身はどう思うんだ、そこを？」
「もちろん偽装の可能性はあります。しかし事態が急変する今、ヨアヒムにもそのような小細
工を弄する余裕はないと思います」
ロイドは、きっぱりと断言する。
彼は、クロスベルに戻る道中、考えに考え抜いた結論を口にした。
「ヨアヒムはこのファイルを残すことで、俺たちに自ら正体を晒しました。つまりもう隠れ
しない。堂々と行動する、というメッセージだと思います」
「で、何をするつもりだ、奴は？」
「キーアの奪還です」
ロイドが言うと、ダドリー捜査官は驚愕した。
だがエリィも、ランディも、ティオも動じてはいない。
彼らもみな同意なのだ。そして案じている。
隣の広間で、神狼ツァイトとたわむれるキーアのことを。
ロイドは一瞬、キーアに視線を向けて、声量を落とした。

「俺たちは、キーアを守り、ヨアヒムを捜索しなければなりません。しかしうちの人数だけで、それを両方行うのは無理です」
「うむ……こういう時こそ捜査一課の力を借りたいところだがな」
セルゲイが一瞥すると、ダドリーはさらに唇を噛んだ。
「……間が悪いことに、例の拘置所襲撃の報せがあってな。しかも拘置所の近くにあった、警察学校と訓練場も襲われたらしい」
「なんですって……」
「そちらへの対応で警察本部は、蜂の巣をつついたような騒ぎだ。この状況では……」
捜査一課も、自由に捜査員を動員できない。
それを悟ると、ロイドもすばやく決断した。
「判りました。こうなったら……あの人たちを頼りましょう」
「誰だ、いったい？」
「遊撃士協会……《風の剣聖》アリオス・マクレインさんたちを……」
その言葉に、セルゲイが眉をはね上げた。
意外そうな表情には、ロイドを気づかうような面持ちもある。
「いいのか？　たしかに安全策だが、お前たちの手でキーアを守れなくなるんだぞ？」
「かまいませんよ。こだわりやプライドとか……キーアを守るために一番いい方法は、たぶんそれなんです」

遊撃士協会には、アリオスの他にも強力な遊撃士が多数いる。
彼らの戦闘能力は、ロイドたちより遥かに上だろう。
それに遊撃士協会なら、他国にも支部がある。
もしもの場合は、キーアを国外に逃がしてもらうという手もあった。
エリィたちも、ため息をまじえてうなずいた。
「課長、そうしましょう。警察のメンツは、いったん置いといて」
「キー坊を預けてる間に、俺たちがヨアヒムを捕まえてみせますよ」
「キーアを託せるのは、遊撃士協会しかありません」
ランディも、ティオも、言葉に熱を込める。
セルゲイも、沈黙するダドリーを見やって、紫煙を吐いた。
「どうやらそれが最善のようだな。だったら急げ。国際定期船の最終便は、確か九時半だ。今夜中にあの子を逃がせるかもしれん」
「はいっ！」
「アリオスが戻っていたら、そのまま任せればいい。奴なら、どんな敵が来ようが、キーアを守り切れるだろう」
ロイドは、壁時計を見た。
まだ最終便には、十分間に合う。
今すぐ遊撃士協会に連絡すれば……と、思った矢先。

不意に、広間から呼び出し音が聞こえた。
導力通信器のベルに、エリィが怪訝な顔をした。
「なにかしら、こんな時間に……」
ロイドは、急いで広間へ行き、受話器を取った。
「はい、特務支援課……」
『あっ、ロイドさん？　よ、よかった！　繋がって……！』
相手は、若い女性だった。
しかし動揺しているのか、名乗りもしない。
ロイドは、記憶の糸をたぐり寄せ、相手を推測した。
「その声は……ノエル曹長？」
警備隊副司令、ソーニャ二佐の副官。
この特務支援課にも一度、ソーニャ副司令に随行して来たことがある。
そのノエル曹長の声は、やけに切迫していた。
『実はロイドさんたちに、お伝えする事があるんです！　ベルガード門の部隊との連絡が途絶しました！』
「何だって？　一体、何があったんだ？」
『わ、分かりません。こちらも現在確認中で……一応、そちらにも伝えるよう、副司令に指示されました！』

ノエルの声は、スピーカーを通じて広間に流れている。
傍で聴いているエリィたちの表情もたちまち曇った。
この非常事態である。
何が起こってもおかしくないが、まさか警備隊まで……
「わかった、情報感謝します！」
ロイドが受話器を置くと、ランディが呻いた。
「まずいぜ……ロイド、ルバーチェ商会で見たファイルを覚えてるか」
「ああ、《真なる叡智》の取引リストだろ？」
ロイドも、すでに薄々感づいていた。
「ベルガード門の部隊は、警備隊司令が指揮している。だがその警備隊司令も、ルバーチェ商会から《真なる叡智》を購入していた……」
「待ってよ、まさか……」
目を見開くエリィに、ロイドは首を横に振った。
「いや、最悪を予想しよう。もしベルガード門の部隊が《真なる叡智》を服用していたら、拘置所を制圧することも可能だ。だからアーネストは……」
と、広間で寝そべっていた神狼が、むくりと身を起こした。
神狼は、何かを警戒するように牙を剥き、ぐるぐると喉を鳴らし始めた。
「あれっ、どうしたの、ツァイト？　お客さん？」



キーアも、不思議がってツァイトを見る。
気づいたロイドも、窓の向こうに目をやった。
「なんだ？　外に何か……」
瞬間、ツァイトが吼え、同時にティオが叫ぶ。
まるで神狼の意志を通訳したかのように……
「囲まれている、伏せろ！　……だそうです！」
「なにっ――」
一秒後、凄まじい銃撃が特務支援課を襲った。
窓ガラスが粉々に砕け散り、無数の銃弾が壁や家具を撃ち抜いていく。
ロイドは、キーアをかばって床に伏せた。
「危ないっ――！」
二人の頭上を弾丸が飛び交い、砕けたガラスが散らばる。
エリィとランディも床に這い、ガラス片から身を守った。
「まさか、これルバーチェ商会……！」
「ちがう、この銃声は……」
ランディは、まっ先に気づいていた。
ルバーチェ商会が使う機関銃とは、明らかに銃声が異なっている。
気づいたダドリーも、導力銃を引き抜いて叫んだ。

「これは警備隊の自動小銃の音だ！　しかしいったいどうして！」
「まさか……」
ロイドは、砕けた窓から外の様子を窺った。
特務支援課へ通じる階段の上には、装甲車が停まっている。
その周囲に警備隊員が散開し、こちらへ銃撃を加えているのだ。
「彼らも、薬物で意志を失っているんだ……」
「なんですって！」
「ベルガード門の部隊は、ヨアヒムの支配下に入ったのさ」
ロイドは、自分の予測が甘かったことを恥じた。
まさかこのクロスベル市のど真ん中へ、薬物で操った警備隊員を送り込んでくるとは……
セルゲイ・ロウは、壁にかけてあったショットガンを手にした。
「脱出するぞ、ロイド。キーアを連れて、先に行け」
ダドリー捜査官も、導力銃を構えている。
「奴らの狙いは、キーアだ。早く遊撃士協会へ連れていくんだ」
「そんな、課長……」
「我々が後衛を務める。さっさと行け」
「ダドリーさん……」
二人にしんがりを任せることには、躊躇いを感じる。

だが他の手立てを考えている余裕はなく、それが唯一の最善に思えた。
ロイドは、二人に一礼すると、キーアを神狼の背に乗せた。
「キーア、しっかりつかまっててくれよ。ツァイト、頼むぞ」
「うんっ！　キーア、ちゃんとつかまってるね！」
「ウォンっ！」
その時、正面の扉が爆砕した。
恐らく手榴弾。
続けて警備隊員が雪崩をうって突入してくる。
それをセルゲイとダドリーは、威勢良く迎え撃った。
「一課のエースの実力、改めて見せてもらうぞ！」
「そちらこそ、かつてあの二人を率いた、伝説の班長の実力、見せてもらいます！」
セルゲイがショットガンで、ダドリーが導力銃で警備隊を迎え撃つ。
瞬く間に広間は、銃弾が飛び交う戦場と化した。
その銃撃に背を向け、ロイドたちは裏口へ走った。
「先に行きます、課長！」
ロイドたちは、裏口から抜け出し、中央広場へ出る階段を駆け上がった。
ランディは後ろを振り返り、舌打ちをした。
「今の連中、やはりベルガード門の部隊だ！　知った顔がいたぜ！」

「武装した警備隊相手だ、警察本部に応援を頼もう！」
ロイドは叫んで、中央広場に駆け入った。
北へ向かう通りを抜ければ、警察本部のある行政区に達する……
だが中央広場にも、警備隊の装甲車が横付けされていた。
その砲塔がロイドたちに向き、機関砲が容赦なく連射された。
「まずいっ！」
ロイドたちは、広場中央のオブジェに身を隠した。
周囲の警備隊員も射撃を始め、周囲の石畳に銃弾がはねまくる。
突然の騒ぎに、辺りの通行人も悲鳴をあげた。
「なんだ、いったい!?」
「どうしてこんな街中で……！」
しかし通行人にもかまわず、警備隊は射撃を続ける。
ロイドは、容赦のない射撃に歯噛みした。
「これほどの人数で攻めてくるとはな！　四、五十人はいるか？」
「こうなったら裏通りを！　そっちの方が近いわ！」
エリィの言にうなずき、ロイドたちは広場を脱した。

＊＊＊＊＊

クロスベル歓楽街。
カジノハウスや、ホテルが立ち並ぶ一角は、まだ夜のにぎわいに満ちていた。
劇団《アルカンシェル》専用劇場からは、今夜の公演を観終えた観客たちが、ぞろぞろと帰り始めている。
そんな彼らのすぐ近くを……
「急げ！　もうすぐだ！」
ロイドたちが、必死に駆け抜けていく。
その声を聞きつけ、劇場の窓から、金髪の美女が顔を覗かせた。
「あ～ら、弟君じゃない？　なにしてるの～？」
姿を見せたのは、劇団《アルカンシェル》の看板女優、イリア・プラティエ。
妖艶な演舞で《炎の舞姫》と呼ばれる劇団の至宝は、気さくに声をかけた。
それにつられて、黒髪の少女も窓から顔を出した。
「え、ロイドさん？」
イリアと並ぶ新進女優、リーシャ・マオ。
二人とも、ロイドたちとは事件を通じて、知り合った仲である。

だが二人に向かって、ロイドは鋭い声で警告した。
「だめです！　二人とも窓から離れて！」
「え～？　どういうこと？」
「いいから早く！　危険なんです！」
そこへロイドたちの後方から、警備隊の装甲車が追いすがって来た。
石畳をこするように疾走し、ロイドたちめがけて機関砲を連射する。
あわてて、観客たちが逃げ惑った。
「なんだ！」
「実弾だ、伏せろ！」
流れ弾は、劇団の看板にも命中し、激しい火花が散る。
それでもイリアは、ぽかーんとそれを眺めていた。
「え、え……アトラクションか何か？　気合いが入ってるじゃない！」
「違いますよ、イリアさん！　早くこっちへ！」
あわててリーシャが、イリアを窓辺から引き剝がした。
その間にロイドたちは、行政区へと走っていく。
イリアは残念そうな顔で、それを見送った。
「ちょ、ちょっと……凄いライブ感じゃないの！　よーし、こうなったらあたしも……」
「なに言ってるんですか、イリアさん！　いいから避難しましょう！」

「ちょっとー　引っ張らないでってば！」
だがリーシャも、遠のくロイドたちを追っていた。
何が始まったのか、見極めるような視線で。

＊＊＊＊＊

行政区へ足を踏み入れた途端、ロイドたちは愕然とした。
見れば警察本部にも、警備隊の装甲車が迫っていたのだ。
しかも警察と装甲車は、すでに激しい銃撃戦を始めている。
「なんてことだ……」
ロイドは、今になって事態の大きさに驚嘆した。
まるでヨアヒムが、クロスベルにしかけた戦争に思える。
そして背後からは、先ほどの装甲車が追いすがってきた。
「走るぞ！」
逃げるロイドたちへ、機関砲が浴びせられた。
流れ弾をくらって、街路樹が、街灯が、次々に吹き飛んでいく。
走るうち、ロイドたちは、市庁舎の傍を行き過ぎる。
その時、エリィが呻きを漏らした。

「あれは……！」

見れば市庁舎も、装甲車で封鎖されている。

警備隊員は、中にいた議員たちを前庭に集め、拘束しようとしていたのだ。

その議員の先頭に、白い髭をたくわえた老人が立っている。

彼こそ、クロスベル市長、ヘンリー・マクダエル。

杖をついてはいるが、市長は毅然とした態度で銃口の前に立ち塞がっていた。

「いったい誰の命令か！　このクロスベルは自由自治が気風の独立州である。いかなる勢力であろうと、軍事的支配を認めるわけにはいかん！」

老人とも思えぬ気迫は、ロイドたちのところまで聞こえている。

「今すぐ帰隊したまえ！　さあ早く！」

しかし警備隊員たちは、無機質な表情のまま、銃口を向け、彼らを威圧していた。

「勇敢な市長さんだな、エリィのお祖父さんは……」

ロイドたちは物陰に隠れると、その様子に感嘆した。

「おじいさま……」

エリィは、導力銃を固く握りしめている。

その緊迫をほぐすように、ロイドは、彼女の肩を軽く叩いた。

「大丈夫だ。見る限り、警備隊も、議員たちに手を出すつもりはないらしい」

「ええ……でもまさか、市庁舎まで制圧するなんて……これじゃあ……」

政治的なクロスベルの乗っ取り。

それが今、現実のものとなろうとしている。

ロイドも嘆息して、周囲を見渡した。

「とにかく警察本部も頼れない。このままじゃ孤立無援だな」

「どうする、ロイド？」

ランディの問いに、ロイドは東を指さした。

「こうなったら、遊撃士協会を頼るしかないな。アリオスさんなら、力になってくれる」

「選択肢は、それしかないようですね」

ティオがうなずくと、ロイドたちはまた走り出した。

エリィも、市庁舎を見やって、小声で祈る。

「おじいさま、御無事で……」

＊＊＊＊

「グレイス先輩、大変です！」

港湾区、クロスベル通信社。

若い男性カメラマンが、血相を変えて駆け込んできた。

帰り支度を始めていたグレイス・リン記者は、その声だけで、なにか事件が起きたことに感

づいた。
「なに、どうしたの？　とうとうルバーチェと《黒月》が抗争？」
「こ、抗争どころじゃないですよ、戦争です！」
「せ、戦争……？」
グレイスは、社の窓をがらっと開けた。
クロスベルの夜景は、いつものように美しい。
だがその明かりを乱すように、いくつもの火の手が上がっていた。
遠くから、銃声も聞こえているが……
「……なんなの、あの音？　銃声にしては……」
「銃声じゃありません、機関砲の音です！」
「はあっ？　いったいどこの誰がそんなモノを……」
「警備隊ですよ！　どうやらベルガード門の部隊が、市庁舎を占拠したそうで……」
さすがのグレイスも、耳を疑った。
「まるで反乱じゃない！　警察はなにしてんの！」
「それが……警察本部も警備隊と交戦中らしく……」
「ロイドくんは？　特務支援課はどうしたの？」
「よく判りませんが、中央広場からも火の手が上がってます。たぶんあれは、特務支援課の建物のはず……」

そう言ってカメラマンが指さした方角に、黒煙が上がっている。
グレイスは、愛用のカメラを抱えて走り出した。
「行くわよ！　なにが起こってるのか、つきとめないと！」
「待ってください、先輩！　町中で戦闘が……危険です！」
「危険が怖くて、記者なんて務まらないわよ！　嫌なら帰っていいわ！」
「置いてかないでくださいよ、先輩！　グレイス先輩！」

＊＊＊＊＊

「そんな……」
ロイドは、呆然と立ちすくんだ。
遊撃士協会の建物が、廃墟のように焼け落ちている。
壁には無数の弾痕。辺りには、警備隊員が十数人倒れている。
明らかに、襲撃を受けた後だった。
「まさか遊撃士協会まで襲うとは……」
「アリオスさんたち、大丈夫かしら……」
ロイドとエリィが心配すると、ランディが辺りの様子を確かめた。
「いや、倒れてるのは、警備隊員ばかりだぜ。恐らく遊撃士に撃退されたな」

「でしょうね。いくら薬物で強化されていても、《風の剣聖》に勝てるはずがないわ」
ロイドは、ツァイトの背にまたがったキーアを撫でた。
「……キーア、大丈夫か？　ケガしてないか？」
「へいきだよー。えへへ、みんなとはじめて会った時みたいだねー」
「はは……そうだな」
言われて、ロイドたちも思い出した。
黒の競売会の夜。
ロイドたちは、ルバーチェ商会に追われながら、キーアと逃げたのだ。
あの夜が、今は途方もなく昔のことに思えた。
ランディとティオも、感慨深そうに顔を見あわせている。
「競売会から、まだ三週間かよ……」
「ちょっと信じられませんね……」
エリィも、ひと呼吸おいて、微笑んだ。
「ふふっ、ほんとね。……さて、遊撃士協会も頼れないなら、残るはタングラム門のソーニ副司令だけね」
「ああ、連絡してくれるかい。繋がりにくかったら、ノエル曹長でもいいだろう」
ロイドに言われ、エリィは自分のエニグマを取りだした。
と、ツァイトが威嚇の声を上げた。

ロイドたちも素早く武器を構え、周囲を警戒する。
「追いつかれたか！」
サーチライトを煌々と点け、再び装甲車が急迫してきた。
砲塔の機関砲が火を噴くと、ロイドたちはあわてて物陰に飛び込んだ。
「まずいっ！」
機関砲弾を浴びて、街灯が、街路樹が、音を立てて吹き飛んでいく。
ロイドたちは、北上して港湾区から脱しようと試みた。
しかし今度は北から……
「しまった！」
黒ずくめの男たちが、機関銃を乱射してきた。
その傍には軍用犬の群れ。
無論、ルバーチェ商会の構成員たちである。
ロイドたちは、南北から挟撃され、もはや身を隠す場所すら得られなかった。
「どうするの、ロイド！」
「このままじゃ全員、やられちまうぜ！」
「せめてキーアちゃんだけでも……」
エリィが、ランディが、ティオが、悲痛に叫ぶ。
だがロイドですら、この危地を乗り切る術が浮かばなかった。

「仕方ないっ！　ツァイト、キーアと逃げてくれ」
「え、キーアにげるの？　ロイドたちは？」
「俺たちは……」
身を挺して、時間を稼ぐしかない。
ロイドがそう覚悟すると、ランディがにこっと微笑んだ。
「……俺たちも後から行くぜ、キー坊」
エリィとティオも、キーアに笑顔を向けている。
「いい子だから、ツァイトと一緒に行って」
「……キーアを、一人にはさせません」
仲間たちも、一瞬にして同じ覚悟を決めていた。
どの目にも、不思議と恐怖はなく、むしろ気概が灯っている。
ありったけの導力魔法と戦技を駆使して、キーアを逃がす。
今、特務支援課がすべきことは、それだった。
ロイドは、優しくキーアの髪を撫でた。
「さあ行くんだ、キーア。今なら……」
その時。
路地から新たなサーチライトが迫ってきた。
暗闇から猛スピードで迫るそれに、ロイドは身を固くした。

「くっ……また装甲車か……！」
しかし現れたのは、高級リムジンだった。
大型の導力車は、石畳を走り抜け、こちらへ迫る。
だがロイドの予想とは裏腹に、リムジンは装甲車の横っ腹へ突進したのだ。
凄まじい衝撃音と共に、装甲車は石段の方へ押しだされ、前のめりに突っ伏す。
エリィは、そのリムジンを見て歓声を上げた。
「あれは……！」
リムジンは、ロイドたちの前に到達すると、素早くドアを開いた。
中から手を伸ばしたのは、マリアベル・クロイス……
エリィの幼なじみにして、クロスベル国際銀行総裁の娘である。
「さあ！　みなさん早く！」
マリアベルは、金髪を揺らして、ロイドたちに手を伸ばす。
咄嗟にロイドは、キーアを抱えて車内に飛び込んだ。
「すまない、マリアベルさん！」
ロイドに続いて、エリィたちもリムジンへ逃げ込んだ。
その間も、周囲からは、容赦のない銃撃が続いている。
しかしリムジンには、頑丈な装甲が施されているらしく、銃弾は、カンカンという虚しい音を立てて、弾き返されていた。

そして運転席に座る人物が、鋭い声を飛ばす。
「出すぞ！　しっかりつかまっていたまえ！」
「あなたは……」
驚きつつも、ロイドたちはシートベルトを締めた。
リムジンが急発進するや、銃撃も強まったが、車は疾風の如く、東通りを脱出する。
ロイドは、ようやく安堵の息を吐いた。
「助かりました、マリアベルさん、それに……」
「礼には及ばんよ。それより詳しい事情を聞かせてくれ」
運転席の人物は、車を北上させながら訊ねた。
「この街の一端を担う者として、私も是非、聞いておきたいのだ。この事件を……」
その男こそ、ディーター・クロイス。
マリアベルの父親にして、クロスベル国際銀行総裁であった。

＊＊＊＊＊

「ツァオ様、街で……！」
支社長室に飛び込んだラウは、身を固くした。
黒月貿易公司の建物は、先の襲撃で半壊している。

だが支社長ツァオ・リーの部屋は難を逃れ、無傷であった。
その部屋の窓から、すでにツァオは外の様子を窺っていた。
「ええ、何やら始まったようですね。さっきから警備隊とルバーチェの構成員が駆けずり回っていますが……ふふ、こんな光景が見れるとは」
夜風に乗って、焦げ臭い匂いも漂って来た。
恐らく、火の手の上がった建物からだろう。
ツァオは、窓を閉めて、それを遮った。
「で、この事態に対処しているのは、いったい誰ですか？　クロスベル警察？」
「それが……例の特務支援課が、警備隊と交戦しているのを見た者が……」
ほほお、とツァオは感嘆した。
「良くも悪くも、彼らは期待を裏切りませんねえ。しかしこうまで大きな事態を、彼らが収拾できるかどうか……」
「ツァオ様、我々もこの機に乗じて……」
だが支社長は、ラウの進言を右手で制した。
「たしかに、我らが動けば、混沌とした状況をさらにかき回せます」
「では今すぐ……」
「しかし、それで利益が得られるかどうかは、疑問です」
ツァオは、棚の奥から双眼鏡を取りだした。

「我々は、勝ち馬に乗ればいい。それを見極めるまで、軽挙妄動は慎むように」
「……はっ」
「しかし軽挙妄動したくもなる、騒ぎですね……」
にやりと笑って、ツァオは屋上への階段を上がっていった。
誰が勝ち馬になるかを確かめるために。

＊＊＊＊

市の北端、クロスベル国際銀行。
ロイドたちは、リムジンでその建物内にかくまわれた。
最上階に位置する総裁室からは、クロスベルの夜景が一望できた。
だが今夜は、街の明かりに混じって、ちらちらと襲撃の炎も見えている。
燃えているのは、特務支援課や、警察本部の建物だろうか。
しかし案じても、今のロイドたちに敵を一掃するだけの力はない。
そして無力さを痛感しているのは、ディーター・クロイスも同じだった……
「そうか……いつの間にか、そんな事態に……」
ロイドから説明を聞き終え、ディーター総裁は瞑目した。

「その《教団》の残党とやらの罪深さはもちろんだが……そんな輩に付け込まれた者たちには心底呆れ果てたよ……まったく、なんということだ」
ロイドたちは、簡単な食事をふるまわれ、喉を潤していた。
警備隊も、ルバーチェの構成員も、攻めてくる様子はない。
しかしディーターは、安堵することもなく、事態の重大さに心を痛めているようだった。
「私とて、クロスベルの状況が、難しいものであるのは判っている。ルバーチェのような存在や議員、役人たちの腐敗についても、ある程度は仕方ないと諦めていたが……どうやら私は、とんだ愚か者だったようだ」
「……おじさま……」
エリィは、心配そうに総裁を見つめる。
マリアベルも、疲れたように目元を押さえた。
「そうですわね……クロスベル国際銀行は少なからず、クロスベル自治州の政治に影響力があります。お父様は今まで、あえて中立であろうとしていましたけど……」
「その怠惰が、今回の事態を引き起こす一因にもなったようだ。……すまない。お詫びのしようもないくらいだ」
「そ、そんな……」
ロイドが動揺すると、ランディも顔をしかめた。
「いや、さすがにそれは、気にしすぎじゃないッスか？　実際、権限や責任があるわけでもな

いですし……」

だがディーター総裁は、まだ気がおさまらないようである。

「いや、時の政権に対して、財界がある程度働きかけるのは、本来は常識的なことだろう。それ以前に、私にもクロスベルを愛する市民の自負があったはずだ。だが忙しさにかまけ……その愛郷心も薄れていたらしい」

その言葉を聞いて、エリィが首を横に振った。

「……それは私たち市民、一人一人がそうだったと思います」

ディーターは、あらためて襟を正すように、ロイドに向き直った。

「だが私も、これ以上の暴挙は見過ごせん。この事態を解決するため、我が銀行は総力をもって、君たちに協力させてもらおう」

「……ありがとうございます」

ロイドはほっとしたが、マリアベルはまだ険しい表情である。

「と言っても、この状況は、如何ともしがたいですわね。警察本部や警備隊の副司令とも連絡が途絶しているとか？」

「ええ……何度か連絡したんですが」

そこへ、ティオが進み出た。

「何らかの理由で、通信妨害がかかっているようです。導力ネットワークによる連絡を試せないでしょうか？」

「……だとすれば、地下区画の導力ケーブルが遮断されているかも……何とか迂回ルートを確保すれば通信網を回復できるはずですわ」

マリアベルの言を聞くと、ディーターもうなずいた。

「ならば技術部のスタッフに最優先でやらせたまえ。警察本部、タングラム門の警備隊、遊撃士協会との連絡は勿論だが……市内の各端末との連絡も取れれば、さらに状況も掴めるようになるだろう」

ディーターは、あらためてロイドに視線を向けた。

「行内には、エプスタイン財団の工房もある。今のうちに装備も調えた方がいい」

「ありがとうございます」

「行内に備蓄してあるゼムリアストーンも使うといい。他には？」

「いえ……キーアをかくまっていただいているだけでも十分です」

キーアは、別室で休んでいた。

いつものように、戦闘を面白がっていたが、やはり疲れていたらしい。

銀行に着くなり、くたっと眠ってしまったのだ。

だがロイドは、それでいいと思っていた。

たぶん、これから始まる戦いは苛烈を極める。

その光景を、キーアには見せたくなかった。

第六章　彼らの御子

ロイドたちは、急いで装備を新調した。
武器も防具も、今、手に入る最善のモノに更新。
エプスタイン財団の職員の手を借り、可能な限りの改良を施すことにした。
無論、ディーターから提供を受けた希少鉱石ゼムリアストーンを用いてだ。
それが済むまでの間、ロイドたちはキーアの部屋へ戻っていた。

「すぅ……すぅ……」
キーアは、行内の貴賓室で静かに眠っていた。
すこやかに寝息を立てるその表情は、とても渦中の人物とは思えなかった。
ロイドとエリィは、キーアの寝顔を覗き込んで微笑んだ。
「はは……あんなことがあったのに、よく眠ってるな」
「きっと疲れたのよ。ずっとツァイトの背に乗っていたし」
神狼ツァイトも、ずっとキーアの傍にいる。
時折、キーアが寝返りをうつと、口でシーツの端をくわえ、寒くないよう、肩にかけてやっ

ていた。
ランディは、先ほどの戦闘を回想してつぶやいた。
「奴ら、キーアを生け捕りにしたいらしいな。俺たちには、ほとんど威嚇射撃だったが、課長
たちには容赦なく撃ってきてたし」
ティオも、キーアの髪を撫でさすって言う。
「キーアを傷つけずに奪い取れ……そんな風に操られているのかもしれません」
マリアベルも、初めて見るキーアに興味をそそられたらしい。
寝顔を見つめ、小さく嘆息した。
「まあ、これだけ可愛かったら、さらいたくなる気持ちも判りますけど……ヨアヒムと言った
かしら？　ずいぶん不気味な男みたいですわね？」
「正直、奴が何を考えているのか、はっきりとは判らないんです」
ロイドは、ディーターにも視線を向けた。
「何のためにキーアが必要なのか……キーアの写真がどこで撮られたものなのか……そもそも
キーアが、どうしてあの競売会の場にいたのか、それすら不明なんです」
エリィも、静かに目を伏せる。
「この子の記憶が戻っていたら、手がかりになったんでしょうけど……」
「なるほど……歯がゆいですわね」
と、マリアベルがうめいた時。

キーアが、苦しげに寝返りをうった。
「……ロイド……どこぉ……エリィ……ランディ……ティオ……」
「キーア？」
「……暗い……暗いよぉ……ねえ、どこ……どこに行ったのぉ……？」
呼ばれて、ランディとティオも寝顔に歩み寄った。
「やっぱり、うなされてるな……かわいそうに」
「なにか過去の記憶を夢見ているのかもしれません。あの写真の……球体に閉じこめられていた記憶とか……」
ふと、ロイドは考えた。
自分が捜査官になった理由を。
元々は、亡くなった兄の遺志を継ぐためだった。
クロスベルにそびえる高い壁を崩し、越えるためだった。
だがその壁の向こうに、キーアがいた。
かつて兄が救い出した、キーアが。
本当に継ぐべき兄の遺志は、キーアを守ることだと思った。
兄が救ったキーアを、もう一度、教団へ渡すことだけは、絶対にしたくない。
ロイドは、キーアの額に触れて、祈るようにつぶやいた。
「俺たちはどこにも行かない……キーアのそばにいるよ、ずっとな」

エリィも、ランディも、ティオも、その言葉にうなずいている。
しかし、彼らが浸る静寂を覆すように……

激震が、国際銀行ビルを襲った。
続けて、非常サイレンが鳴り響く。
マリアベルがあわてて、行内通信器を手に取った。
「どうしたの！　今の衝撃はいったい……」
『警備隊の襲撃です！　正門を吹き飛ばされました！』
スピーカーから聞こえる叫びに、マリアベルは青ざめた。
「そんな！　超合金製のゲートがなぜ……！」
『相手は、導力誘導弾を撃ち込んでいます！』
「なんだって！」
ロイドとランディは、声を揃えて窓辺に走った。
見下ろせば、たしかに正門には装甲車が迫っている。
砲塔には、戦車をも撃破できる導力誘導弾が六発。
そのひとつがまた、白煙の尾を引き、銀行ビルに向かってきた。
直後に着弾。
再び、激震が最上階にも伝わってきた。

「あんなモノまで持ち出すとは！」
叫ぶロイドの目には、乗り込んでくる警備隊の群れが見えた。
ゲートを突破された以上、直接迎え撃つしかない。
ロイドたちは、一斉に武器を手にした。
「マリアベルさん、ツァイト、キーアを頼む！」
「ロイドさん！　エリィ！」
「奴らを絶対にここまで上がらせるな！」
叫ぶロイドに、仲間たちは黙してうなずき、走り出す。
そしてまた階下からは、弾着の衝撃が伝わってきた……
銀行ビルの一階は、さながら戦場と化していた。
行内警備員たちは物陰に隠れ、必死に導力銃で応戦している。
だが突入してきた敵は、その物陰めがけて導力誘導弾を放ち、吹き飛ばしていく。
ロイドたちは、黒煙を突っ切って、その戦場に飛び込んだ。
「エリィ！　ティオ！　援護、頼む！」
叫喚と共に、ロイドは敵勢の只中へ乱入した。
迎え撃つのは、斧槍を掲げた警備隊員。
だがロイドが衝撃警棒を振るうや、左右のそれは黄金の光を放った。

[illegible]警棒は、特殊合金製の斧槍を次々に叩き折る。
身体にぶち当てれば、敵は一撃で昏倒。
あるいは、後方へ吹っ飛ばされて気絶。
相手が斧槍で襲いかかろうとも、衝撃警棒はそれを凌駕する速度で弾き返す。
瞬く間にロイドは、二十人近い警備隊員を制圧した。
「……ふーっ……！」
ロイドの手にあるのは、たった今、エプスタイン財団の手によって完成された衝撃警棒
ルラウンダー。
その各部には、星のような煌めきを持つ石が用いられている。
希少鉱石ゼムリアストーン。
超硬度を有するそれを活用した、究極の衝撃警棒である。
先のソードブレイカーを遥かに凌ぐ破壊力を有し、その扱いやすさから、ロイドの反応
も高まっていた。
だがそれで尽きる敵勢ではない。
倒れた仲間を踏み越え、どっと行内になだれ込んでくる。
しかし今度は、ランディも前線に飛び出した。
「今度は、俺の番だ！」
ランディは、長大な斧槍をぶんっ！　と薙いだ。

瞬間、その穂先から爆炎があふれる。
迫る警備隊員たちは、その熱気をまともに浴び、蜃気楼に呑まれた。
炎熱にあおられた敵は、銀行入り口のガラス扉を突き破って、後方へ吹き飛ばされていく。
ランディは、斧槍を構え直すと、鼻の下を指でこすった。
「……よっしゃ。調整したばかりだが、イイ出来だぜ」
彼の斧槍にも、ゼムリアストーンの煌めきがある。
特殊斧槍、テスタロッサ。
ランディが、この決戦のためにあつらえた逸品だ。
それでも敵は、なお数を増していた。
爆発で崩れ去った瓦礫に隠れ、自動小銃を連射する。
さらに装甲車が入口まで乗り付け、砲塔を動かした。
至近距離から、導力誘導弾を発射するつもりなのだ。
ロイドとランディも、あわてて物陰へ飛び込んだ。
「くそっ！」
「まずい！　この距離じゃ……」
だが二人の背後に、エリィが駆けつけた。
エリィは、両手に優美な形状の導力銃を構え、装甲車に相対した。
装甲車の砲塔は、ゆっくりと狙いを定める。

導力誘導弾が発射される寸前、エリィは引き金を絞った。
「させるもんですか！」
エリィが放ったのは、たった一発の銃弾。
しかし飛び出したのは、物理的な弾ではなく、蒼い光弾だった。
その一撃が、今まさに放たれようとしていた導力誘導弾を直撃。
大型の誘導弾を真っ直ぐ貫き、炸裂した。
同時に導力誘導弾は、盛大に爆発した。
「やった！」
叫ぶロイドの前で、他の誘導弾も誘爆する。
その衝撃で、装甲車も吹き飛び、エントランスいっぱいに破片が飛び散った。
「派手にやったな、お嬢！」
ランディは、飛んでくる破片を避けつつ笑った。
「……ざっとこんなものよ！」
エリィも、銃口にふうっと息を吹きかけて、微笑する。
導力銃オワゾーブルーは、ゼムリアストーンを精錬して造った武器だ。
威力は勿論、命中率は格段に向上し、ほぼ必中と言っていい。
それでもなお……
警備隊員は、続々と攻め寄せていた。

いくら仲間が倒れようと、装甲車を潰されようと、怯む気配は無い。
瓦礫を乗り越え、機関銃を放ち、手榴弾を放ってきた。
ロイドは、突っ込んでくる警備隊員を打ち倒しつつ、吼えた。
「どれだけいるんだ、敵は……！」
「今んとこ、三百人はいるぜ！」
ランディも、斧槍を振り回して、迫る敵を薙ぎ倒していく。
「けど、これだけとは限らねえ！　タングラム門の全兵力が、敵に回ったと見ていい！」
「戦い甲斐があるわね！」
エリィは、機関銃手を狙撃して、敵の火力を削ごうとした。
しかしエントランスは、濛々と立ちこめる黒煙で、視界もままならなくなってきた。
このままでは突破を許してしまう……
ロイドがそう覚悟した時、ようやくティオが駆けつけた。
「お待たせしました！」
ティオは、最も調整に手間取った得物を一閃した。
「アブソリュートゼロっ！」
叫んだ刹那、突進する敵を、導力魔法の光が包み込んだ。
床面から隆起したのは、巨大な氷塊。
それに呑まれた者たちは、瞬時に凍り付いた。

ティオは、魔導杖ジャノワールを手に、敵を見据えた。
「ここさえ通さなければ、キーアも守れます！　頑張りましょう！」
「おお！」
ロイドとランディも声を揃えて、武器を構えた。

＊＊＊＊＊

「ふふ……やるものですね」
黒月貿易公司の屋上で、ツァオ・リーは微笑した。
北を見れば、国際銀行ビルに火の手が上がっている。
ひときわ激しく燃え盛っているのは、エリィが撃破した装甲車。
それをツァオは、双眼鏡を手にして観察していた。
「我々は、大人しく引っ込んでいるしかなさそうですが……存外、面白い物が見られそうですね。今やこのクロスベルは、戦争状態……」
ツァオは、再び双眼鏡を覗いた。
「しかし、果たして本当にこの事態を御せるのか、見物です」
「ですがツァオ様、あのままではいずれ……」
腹心のラウも、双眼鏡で戦況を眺めている。

国際銀行ビルへ、警備隊が陸続となだれ込んでいく。
数百人規模の襲撃に、ロイドたちだけで応戦できるとは思えない。
しかしツァオは、同情する素振りも見せず、微笑を維持していた。
「ここで倒れてしまうのなら、彼らも所詮、その程度の器だったという事です……おっと、また後続部隊が来ましたよ」
国際銀行ビル前には、新たな装甲車が到着し、警備隊員を吐き出していく。
終わりのない、波状攻撃であった。

＊＊＊＊

「来たぞ、新手だ！」
ロイドが、そう叫ぶのは、もう何度目だろう。
黒煙を突破して、またも警備隊員が襲いかかってくる。
ロイドはそれを打ち据え、薙ぎ払い、前線を支え続けた。
「ランディ、そっちはどうだ！」
「まだまだあ！」
斧槍を握るランディも、敵を吹き飛ばし、肩で息をした。
「……とは言うものの、キリがねえな！」

ロイドとランディの身体に、重い疲労がのしかかる。
エリィも、導力銃の焦点を合わせる集中力が途切れかけていた。
「でもこれ以上は後退できないわ、ここで支えるしかないっ！」
「そうです！」
ティオも、導力杖から撃ち出した波動で、敵勢を押し返した。
「キーアには触れさせません！　指一本……！」
その名を耳にして、ロイドも四肢に力を込めた。
「ああ、諦めるな！　キーアのために！」
そしてまた、次の敵が躍りかかってくる。
死闘は、なおも続いたのだ。

＊＊＊＊

「グ、グレイス先輩……一体何が起こってるんですか!?」
カメラマンは、震える手でシャッターを切っていた。
目の前では、壮麗な国際銀行ビルが燃えている。
クロスベルの繁栄の象徴が蹂躙される様に、カメラマンも思わず、ファインダーから目を離してしまった。

その後頭部を、グレイス・リンは軽くはたいた。

「いいから撮りまくりなさい！　それがペンとカメラしか武器の無い、あたしたちが出来る唯一の戦いよ！」

「は、はい……！」

戦場に来ている記者は、クロスベル通信社のグレイスたちのみ。

これ以上の独占スクープはない。

しかしさしものグレイスも、歓喜する気にはなれなかった。

望遠レンズを覗けば、行内で戦うロイドたちの姿が見える。

だが怒濤の如く押し寄せる敵を防ぎきれるのか、グレイスも不安にかられたほどだ。

(ロイド君……きっと凄い記事にしてみせるわ)

(だから絶対に生き延びて……)

(あなたたちの目で、自分たちの活躍を読んでちょうだい！)

グレイスは祈るように、シャッターを切るしかできなかった。

＊＊＊＊

六度にわたる攻撃を、ロイドたちは打ち砕いた。

打ち倒した敵は、もう三百人にも達しただろうか。

そこでようやく、敵の動きが途絶えた。

ロイドも、汗を拭って、ひと息ついた。

「これで終わりか……？」

「だといいな……だいぶ消耗したぜ……」

タフなランディですら、息を荒げている。

エリィとティオも、だらりと武器を下ろした。

「敵の気配が絶えたわ。ほんとうに追い返したのかも……」

「待ってください、あれは……」

突然、装甲車の残骸が、恐るべき膂力ではね飛ばされた。

代わって建物内に足を踏み入れたのは……

「あ……ああっ……」

ロイドの口から思わず、恐怖が漏れた。

筋骨隆々とした真紅の巨体が、ずしり、ずしりと前進してくる。

悪鬼のような顔。鋭く太い牙。背中から生えた翼も鮮血の如く赤い。

その腕は、人間どころか、導力車でも握りつぶせそうなほど。

現れた魔獣は、ロイドたちを見下ろすと、奇怪な咆吼を響かせた。

「強度三六！」

ティオが、素早くその正体を解析した。

「水属性は有効率０％、まったく効きません！　地、風、火属性も有効率一〇〇％を切っています！」
「なにっ――！」
「有効率一九〇％の空属性だけが狙い目です！　それからこの魔獣は……」
その刹那、爆光がロイドとランディを呑み込んだ。
魔獣が放った閃光が、二人の身体を壁面に叩きつける。
ロイドは、全身の骨が砕けるような激痛にあえいだ。
「ぐ……はあっ……！」
「ロイド！　ランディ！」
すぐさまエリィが、回復技ホーリーバレットを撃ち込む。
だが癒しの光を浴びても、ロイドの身体はまだ痺れ、意識も朦朧としていた。
「なんて奴だ……こいつは……」
『抵抗はムダだよ、特務支援課の諸君』
すると魔獣は一歩踏み込み、牙の間から不意に声を放った。
「その声は……」
『君らが人の限界に縛られている限り、僕には勝てない……』
エリィとティオも、声の正体に気がついた。
「ま、まさか！」

「ヨアヒム・ギュンター……」
たしかに、魔獣の声には聞き覚えがある。
見抜かれて、魔獣もぎざぎざと喉を鳴らした。
『正解だ。もっともこれは仮の姿。君らの相手などこれで十分だからね』
ロイドは、必死に意識を繋いで立ち上がった。
「いったい何をするつもりなんだ……こんな事をしでかして……クロスベル全土を混乱に陥れて……」
ふらつきながらも、ロイドは魔獣を睨みつけた。
「お前は……《Ｄ∴Ｇ教団》は、一体何をするつもりなんだ……！」
『それが知りたいなら、仲間になってもらうしかないな。《真なる叡智》を服用すれば、僕
至った境地も理解できるだろう』
「ふざけないでください」
ティオが、導力杖をしっかと構えた。
「あなたには、キーアちゃんを渡しません。絶対に……絶対に！」
ティオは、忌まわしい過去と対決するように、声を飛ばす。
だがヨアヒムの声は、あくまで子供と戯れるかのようだった。
『フフ……別に各拠点での儀式は、僕がやった事ではない。無論《真なる叡智》のプロトタイプの実験データは回収させてもらったよ。そのデータを元に、この古の聖地で、僕は《真なる

叡智》を完成させた……」

「お、お前は……」

ロイドが、一歩踏み出すと、魔獣は牙を剝き出した。

「至らぬ身である君たちに、理解してもらうつもりはない……我々の要求はただ一つ。あの方を……キーア様を返してもらうというだけだ」

「キーア様だと……」

ランディも身を起こすと、魔獣はさらに前進した。

「キーア様は元々、我らが御子。その身を君たちが預かったのは、ただの偶然に過ぎない。あの方にはただ、あるべき場所に還っていただくだけさ」

ロイドの脳裏に、あの写真が蘇った。

透明な球体の中で眠るキーアの姿。

ヨアヒムが言う『あるべき場所』とは、あの光景だろうか。

「ふざけるな……！」

ロイドは、疲労した身体を叱咤するように叫んだ。

「叡智がなんだか知らないが、俺たちにだって分かってるさ」

「ええ、あなたが邪悪な輩だってことがね」

エリィも、両手で導力銃を構えた。

ランディも斧槍を突きつけ、不敵に笑ってみせる。

「キー坊のためなら、命なんざくれてやるよ。その代わり、お前も道連れだ」

「そうです、私たちは決して退かない」

ティオも、導力杖の砲口を開いた。

「あなた方、教団は、大勢の子供たちを死に追いやった。もうたくさんです。あの悲劇を繰り返すなんてことは……」

しかし魔獣は、醜い哄笑をこだまさせた。

『ならば祈りたまえ、君らが崇める女神に。だが恩寵はない。救われぬまま、ここで死ぬがいいさ……くくっ、くくくくくっ！』

その声めがけて、ロイドが突進した。

衝撃警棒に渾身の力を込め、魔獣の巨体へ叩き込む。

エリィは光弾を連射し、ランディは炎の斧槍を打ちつけた。

そしてティオは、空の導力魔法、ダークマターを顕現させる。

閃光に呑まれた魔獣の身体が、裂かれ、焼かれていったが……

「な……んだと……」

ロイドたちは、啞然としてその巨体を見上げた。

魔獣の肉体は、見る間に再生し、傷口も塞がっていく。

そしてにたりと笑った悪鬼は、左右の豪腕を振り抜いた。

『所詮、人間なのだよ、君らは！』

ロイドが、ランディが、再び吹き飛ばされた。
しかも魔獣の豪腕は、強烈な波動を生み出し、後方にいたエリィとティオまで弾き飛ばしている。
四人は、何度も床にバウンドし、失神寸前に追い込まれた。
「があっ……！」「ぐっ—」
「きゃあっ—！」「はうっ……！」
ロイドたちは、仰向けになって痙攣した。
もはや立ち上がるどころか、意識を繋ぐだけで精一杯だ。
魔獣は、悠然と瓦礫を踏み越えた。
『キーア様はどこだ？　言え、ロイド、言え』
「断…る……」
倒れたまま、ロイドはあえいだ。
「貴様に……教えるものか…キーアは……渡さない……」
『ならばお別れだね。君たちに用はない』
魔獣は、丸太のような足をロイドの上に向けた。
『恨むなら、君たちを見放した女神を恨みたまえ……死ねっ！』
言って、魔獣はロイドを踏み潰そうとする。
だが絶望したロイドの前に、小さな影が割って入った。

「だめえええええ——っ！」
揺れるのは、黄緑がかった髪。
両手を広げ、魔獣の前に立ち塞がる。
その姿に、誰もが驚嘆の声を上げた。
「……キ、キーア……！」
『おお、キーア様！』
いつの間にか駆けつけた少女は、毅然として魔獣を見上げている。
きつく結んだ唇は、強い意志の表れだった。
「ロイドたちをいじめちゃだめ！　いじめたらキーア、絶対にゆるさないんだから！」
その姿に、ランディも上体を起こし、ティオも声を上げる。
「キー坊……いいから下がってろ……」
「だめです！　戻ってきてください！」
だが魔獣は、赤黒い舌を伸ばして歓喜に震えた。
『……キーア様、お迎えに上がりましたぞ。そのような愚物どもは放って、我らの元にお戻りください。貴女様は、我らの大切な……』
だがキーアは、一歩もそこを動かなかった。
そして次第にその身体が……
蒼い、清冽な光を放ち始めたのだ。

「いいから早く約束してっ！」

『おお、キーア様……！』

「ロイドたちにこれ以上、ひどいことしないって！」

ロイドは、その眩しい光に手をかざした。

「……キーア……どうしたんだ……いったい……」

そして魔獣は、さらに歓喜の色を強めた。

『ふふ……ふははははっ……それでこそ！　それでこそ我らの御子！』

魔獣は、ぐいとキーアに詰め寄る。

『かしこまりました。キーア様さえお戻りになれば、彼らには決して危害は加えませぬ』

「……ほんとう？」

『ええ、もちろんです。さあ……どうぞこちらへ』

ヨアヒムの声に促され、キーアも魔獣に一歩近づいた。

だがロイドは、瀕死の身体で起き上がり、キーアを抱きかかえた。

「行くな、キーア！」

「ロイド！　だいじょうぶなの？」

見上げる少女に、ロイドは血にまみれた顔で微笑んだ。

「キーア……『暗い』のが怖いんだろう？　俺たちから離れるのが、寂しくて嫌なんだろう……だったら、こんな奴の言うことなんて聞いたら駄目だ！」

「……で、でも……」

なぜかキーアは、すまなそうな目をした。

「キーア……キオクがないし……だ、誰なのかもわからないし……ロイドたちにメーワクかけ
るなら……い、いっしょになんて……」

それは、初めて見せた逡巡。

ロイドは今まで、そんなキーアの目を見たことがなかった。

「迷惑なんかじゃない！　俺は……俺たちは、キーアに傍にいて欲しいんだ！」

「………え……」

エリィも、ゆっくり身を起こした。

「わたしたち……あなたのおかげで成長できたと思う……あなたを見守ることで、それぞれ
強くなれたのよ……」

ティオも、魔導杖を支えに立ち上がった。

「……何のために生きているのか、判らないわたしでも……みんなとキーアを守るためなら、何だってできる気がするんです……」

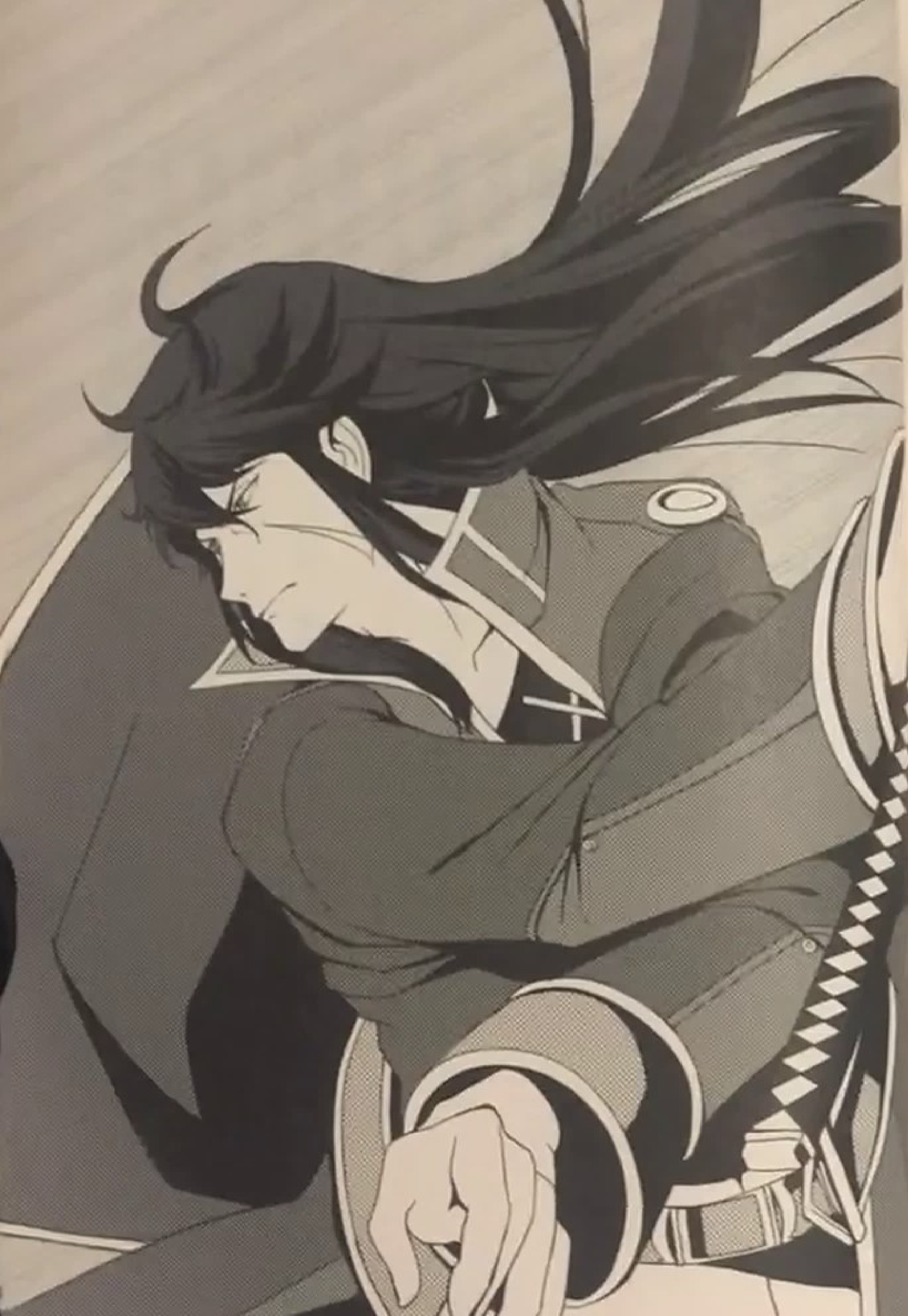
ランディは、もう斧槍を構え直していた。

「だからキー坊……余計なことは気にすんじゃねえ。お前はノンキに笑いながら、すくすく育
ってればいいんだ。それだけで俺たちは、パワーを貰えてるんだからよ……」

「……エリィ……ティオ……ランディ……」

キーアは、居並ぶ仲間たちの顔をひとつずつ確かめた。
そして彼らの背後に……
「グルルル……」
いつの間にか、神狼ツァイトも駆けつけていた。
牙を剝き出す白き狼は、キーアの傍に寄り添い、魔獣を睨む。
ロイドも、キーアが放つまぶしい光に包まれながら言った。
「過去や記憶が気になるなら、俺たちが一緒に取り戻すよ。少なくともこんな奴の言いなりになる必要はないんだ。だからキーア……ここにいてくれ」
「……ロイド……」
言いさした瞬間、光量が落ち、やがて消えていく。
キーアも、ロイドにしがみつき、小さくつぶやいた。
「………うん。キーア、みんなと一緒にいる。ずっと、ずっといるね」
ロイドも安堵して、その髪を優しく撫でてやる。
だが魔獣は……
『妄言を言うものだね、ロイド・バニングス……よくも我らの御子をたぶらかしてくれたな……皆殺しにしてくれる！』
ロイドは、キーアの身体をツァイトの背に乗せた。
「行け、ツァイト！　キーアを連れて逃げろ！」

エリィとランディも、並んで魔獣の前に出た。
「ここは、あたしたちが引き受けるわ！」
「時間なら稼いでやる！　早く行け！」
そしてティオも、静かに導力杖を一振りした。
「さあ、始めましょう……ここから先は、一歩も通しません」
『小癪な戯れ言を！』
魔獣は、耳をつんざく絶叫を発した。
しかしロイドたちが最後の戦いを覚悟した時だった。
不意に何者かが、瓦礫を乗り越えてきた。
駆けつけたその影は、音もなく長刀を引き抜く。
その苛烈な声が、魔獣に突き刺さった。
「戯れ言は貴様だ、ヨアヒム・ギュンター！」
男は、凄絶な眼差しを魔獣に突き刺した。
「これ以上、好き勝手はさせぬ……！」
「あなたは……！」
ロイドたちは、現れた男に驚嘆した。
駆けつけたのは、黒髪の剣士。
左頬に流れる傷は、流星を思わせる。



《風の剣聖》アリオス・マクレインが、魔獣に背後から斬りかかったのだ。
「八葉一刀流、二の型《疾風》！」
凄絶な速さの一撃が、斜めに魔獣を斬った。
あれほど頑強だった魔獣の肉体が裂かれ、体液が噴出する。
魔獣は、唐突に現れた敵に、絶叫を発した。
「おのれ……遊撃士風情が……！」
しかしアリオスは、二の太刀、三の太刀と連撃をくり出していく。
無数の刃に裂断され、魔獣は手も足も出ない。
アリオスを捉えようと両腕を振り回すが、《風の剣聖》の前に、その巨体がぐずぐずと崩れ始めていった。
「バカな……あと一歩……あと一歩で……！」
魔獣は、喉をかきむしり、もがき、吼え……
遂に、体奥から爆ぜ、木っ端微塵に吹き飛んだ。
剣を収めたアリオスは、ロイドたちに視線を向けた。
「……危ないところだったな。それとも手助けはいらなかったか？」
「いいえ、そんな……」
ロイドも安堵して、顔をほころばせた。
「ありがとうございます。あなたが来ていなければ、みんなどうなったか」

「いや、礼を言うのは私の方だ」

「え？」

「医科大学で、シズクを助けてくれたそうだな。本当に恩に着る」

アリオスは、深々と一礼した。

「我々も遊撃士協会を襲われた後、市内で奴らと戦っていたのだ。そしてこちらへ来る途中、あの人たちと合流してな……」

「えっ、あの人たちって……」

すると、また瓦礫を乗り越えて、銀行内に入ってきた者がいる。

眼鏡をかけたエリート捜査官は、辺りの状況に顔を強ばらせた。

「なんだ、いったい何がどうなってる！　説明しろ、ロイド！」

「ダドリーさん！」

そしてショットガンをかついだ上司も、にやりに笑ってみせた。

「ふ……さすがに俺もトシだな。若いもんの足には追いつけねえぜ」

「あ、かちょーだぁ！」

キーアは、嬉しそうにセルゲイ・ロウを指さした。

さらに続々と、遊撃士たちも集まってくる。

その仲間たちを見やって、アリオスはおもむろに口を開いた。

「薬で操られたルバーチェの連中は、すでに市内から脱している。私の仲間がそれを追って、

[illegible]の拠点を突き止めた」

「なんですって！　じゃあ……」

「うむ。恐らく、ヨアヒム・ギュンター本人は、そこにいるだろう」

ロイドは、痛む身体を引きずって、アリオスに迫った。

「教えてください。奴は、今どこに……」

「クロスベル北東のアルモリカ古戦場……」

《風の剣聖》は、ロイドの目を真っ直ぐ見て言った。

「その奥に遺跡がある。太陽の神殿……そこが邪悪の巣窟だ」

「古戦場……あんな場所に！」

ロイドも、何度か通りかかったことがある。

月の僧院と同じく、街道から外れた中世の遺跡だ。

たしかに人目にもつかないし、アジトを築くにはもってこいの場所である。

「では、今すぐそこを叩けば……！」

と、ダドリー捜査官がその言を手で制した。

「……そう単純な話じゃない。どうやら東クロスベル街道にも、相当な戦力が展開しているようだ。主にマフィアどもらしいがな」

「それに警備隊の残存兵力も、いるようだ」

セルゲイも、あたりに倒れた警備隊員たちを眺めて言った。

て車さえあれば、突破できるかもしれんが……」

「……それは私が何とかしよう」

ふと聞こえてきた声に、ロイドたちは振り返った。

見れば、ディーター総裁とマリアベルが現れている。

マリアベルは、キーアの元へ駆けつけると、その身体を抱きしめた。

「キーアちゃん、無茶をしてくれますわね？　いきなり走っていくから、止めるヒマもありませんでしたわ……」

「ご、ごめんなさぃ……」

セルゲイ課長は、歩み寄ってきたディーターに一礼した。

「初めまして、特務支援課のセルゲイです。それで……何とかできると仰るのは？」

「ガレージに私のリムジンがある。防弾仕様だし、かなりの速度だから、強行突破には打って付けだろう」

「ああ、先ほどの……！」

ロイドは、自分たちを救出してくれた導力車を思い出した。

たしかにあの頑丈さなら、途中でルバーチェや警備隊と遭遇しても、なんとかなる。

それを聞いてアリオスも、力強くうなずいた。

「ならば、太陽の神殿へ向かうメンバーを選ぼう。私の他には……」

「……待ってください」

ロイドは、アリオスの前に進み出た。

同時に、心を同じくしたように、エリィ、ティオ、ランディも続く。

《風の剣聖》に向かって、ロイドは強い思いを口にした。

「どうかここは、俺たちだけで行かせてもらえませんか？」

「なに……？」

「ふむ……」

セルゲイとダドリーも、その言葉に驚いている。

「い、いきなり何を!?」

しかしロイドは、すでに悟っていた。

そうすることが、最善であることを。

「ヨアヒムの狙いは、恐らくキーアただ一人です。キーアを奪われた時点で俺たちの負けですが……逆に言えば、キーアを守り抜いて、彼を逮捕できれば俺たちの勝ちです」

ランディも、同じ答えにたどりついていたようだ。

キーアの頭を撫で、にっこり微笑んでみせた。

「その意味じゃ、キーアがいるこのビルこそ、絶対に守りきる必要がある……確実な戦力を残すべきだぜ」

「アリオスさんが残ってくだされば、ここは鉄壁の守りになります」
ティオも、セルゲイとダドリーを見つめて言う。
「課長たちと応援の警官隊がいれば、完全に死角も無くなるかと。だとすれば、ヨアヒムを逮捕に行けるのは、わたしたちだけです」
アリオスは、しばし黙していたが、やがて静かに瞑目した。
「……なるほどな。確かにその通りだ」
しかしダドリーは、ロイドたちの様子に顔をしかめている。
「り、理屈は分かるが……お前たちだけでヨアヒムが逮捕できるのか？　今も苦戦していたではないか」
「それに肝心なことを忘れているぞ」
セルゲイは、ポケットから煙草を取りだして火を点けた。
「お前らの中で、車の運転が出来るヤツはいないだろうが」
「あ……」
ロイドも、今頃になって気がついた。
しかし徒歩で向かえば、突破は難しい。
事件解決には、絶対に迅速な移動が必要だった。
するとセルゲイが、ふーっと紫煙を吐いた。
「だから、俺も行かせてもらおう」

「課長……車の運転なんて出来んのかよ？」
ロイドとランディは、意外すぎる申し出に目を丸くした。
特務支援課創設以来、現場には一度も出てこなかった上司である。
しかしセルゲイは、悠然と構えて煙草をふかした。
「これでも警察学校じゃ、車両運転の教官も兼任してたんだ。まあ、任せておけ」
思ってもみなかった運転手の登場に、ロイドたちは顔を見あわせる。
そして結論が出たと察したのか、キーアが近づいてきた。
「ロイドたち……行っちゃうの？」
見上げる瞳は、寂しげ。
自分一人置いていかれる不安に満ちている。
キーアの不安をかき消すように、ロイドはその肩に手をやった。
「ああ……でも大丈夫だ。絶対、みんなで戻ってくるからさ」
「ええ……もちろんよ」
エリィも膝を付くと、キーアの身体を抱きしめた。
ティオも、オムライスの味を思い出したのか、微笑んでいる。
「戻ってきたらまた、料理を手伝ってちょうだいね？」
「確かにキーアの料理は、魔法みたいに美味しいですし」

ランディは、ぐりぐりとキーアの髪を撫で回した。
「だったらいっそ、派手にパーティでもやろうぜ。知ってる連中全員、特務支援課に集めまくってよ」
「はは……それもいいな」
ロイドは、キーアの肩をつかむ手に温もりをこめた。
「……キーア。本当は心細かったんだな。昔のことを覚えてなくて、自分が誰かも判らなくて……ゴメンな、気付いてやれなくて」
「ロイド……」
キーアは、ロイドの腰にぎゅっと抱きついた。
「……うん、何だかちょっとずつ、胸がモヤモヤしてきちゃって……でも……ロイドたちがいてくれて、ゼンゼン寂しくなかったよ……」
「キーア……」
「だから……だからね……ゼッタイに無事に戻ってきて！」
ロイドは、しがみつく少女を胸に抱きしめた。
この小さな命のために戦うと、心の中で誓う。
「ああ……約束だ」
キーアのための決戦が、始まろうとしていた。

第七章　太陽の神殿

装甲リムジンは、深夜の街道をひた走っていた。
東クロスベル街道から分岐した、アルモリカ古道と呼ばれる細い道。
市街を遠く離れたため、街灯も無く、辺りは暗い。
だがセルゲイ・ロウは、巧みなハンドル捌きで、疾走を続けていた。
「この先だな、ロイド！」
「はい！　次の三叉路を右に曲がれば古戦場です！」
助手席のロイドは、かつてその場所をパトロールしたことがある。
だが目指す太陽の神殿には、足を踏み入れたことがなかった。
「あの遺跡はかなり広いんです！　ヨアヒムが潜んでいるとしても、見つけ出すには時間がかかるかもしれません！」
「でも行くしかないわ！　それに時間もない！」
後席からエリィに続いて、ランディも声を上げた。
「たしかにな！　拉致された人たちもどうなってるか、心配だぜ！」
そして二人に挟まれたティオは、青ざめた顔でつぶやいた。

「恐らくヨアヒムは、生贄を集めて何らかの儀式を行っているはずです……なんとか阻止できればいいのですが……」
と、そこまで言って、ティオは急に後ろを振り返った。
「後方から車両が接近！」
「なんだと！」
「警備隊の装甲車です！」
ロイドは、後部の窓からそれを確認した。
夜道を、煌々とサーチライトを付けて、装甲車が追って来る。
ランディは、その車体に描かれたマークと番号を見て、叫んだ。
「あれはベルガード門の部隊だ！　それに……」
声を制するように、ぶーんっ！　という妙な砲声が轟いた。
同時に、装甲車の砲塔で閃光が走り、装甲リムジンの周囲に無数の機関砲弾が着弾した。
六本の機関砲を束ねた、バルカン砲を放っているのだ。
「ちいっ……！」
セルゲイは、ハンドルを鋭く切って、攻撃をかわす。
だが続けざまに、装甲車の砲塔で、もっと大きな閃光が瞬いた。
しゅるしゅるという尾を引く音を確かめ、ロイドは叫んだ。
「課長、導力誘導弾です！」

「くそったれ！」
低速で飛翔した誘導弾は、リムジンの尾部に吸いこまれた。
だが一瞬早く、セルゲイはアクセルを踏み込む。
誘導弾は、わずかに車体を外れ、地面で爆発する。
しかしその衝撃で、リムジンは後ろが持ち上がるほど、あおりをくらった。
「きゃああっっ！」
エリィは天井に頭をぶつけ、ティオは必死に席にしがみついている。
ロイドは、追ってくる装甲車に歯噛みした。
「まだ警備隊が残っていたとは……このままじゃまずいな」
「下車して戦えば、なんとかなるが……」
ランディが呻くと、セルゲイが首を横に振った。
「奴らの狙いは、俺たちの足を止めることだ。よほど太陽の神殿に行かせたくないらしい」
「じゃあ課長、このまま……」
「ああ、走るぞ！　ここで停まれば、奴らの思うつぼだからな！」
その時再び、バルカン砲が連射された。
機関砲弾は、装甲リムジンのタイヤを狙っているらしい。
地を這うように着弾し、車の周囲で炸裂した。
そのうち……

「がっ……！」
唐突に、セルゲイが悲鳴をあげた。
見れば、運転席脇のドアを、一発の機関砲弾が貫通している。
その破片が、セルゲイの足を切り裂いたのだ。
「課長！」
「大丈夫ですか！」
気遣うロイドとエリィに、彼らの上司は苦痛を堪えて見せた。
「し、心配ない……この程度……」
「し、しかし……」
ランディも、傷の具合を覗き込み、眉根を寄せた。
「止血しねぇとヤバいぞ！　いったん停車しましょう！」
ロイドは、助手席からハンドルを握りしめた。
「運転なら俺が代わります、だから課長……」
だが、ティオがまた鋭く叫んだ。
「後方からもう一台、装甲車が接近！」
「そんな……！」
ロイドの目に、新手が映った。
砲塔に機関銃のみ装備した偵察タイプ。

セルゲイが負傷した今、二台を相手にするのは難しい。
ロイドは、上司からハンドルを奪おうとした。
「課長、停車してください！　早く手当てをしないと……！」
だがセルゲイも、頑としてハンドルを譲らなかった。
「いいからしっかりつかまってろ！」
「課長……！」
「お前ら若い連中の道を拓くのが、俺たちオヤジの役目だ……絶対に送り届けてやる！」
呆れて、ランディも目を覆った。
「この隠れ熱血オヤジが……そんなにはりきらんでくださいよ！」
仕方なくロイドは、後方の装甲車を見定めた。
助手席から身を乗り出し、導力魔法を撃って、くい止めるしかない。
そうロイドが覚悟した時、ティオの顔が、急に明るくなった。
「……待ってください！　後方から来たのは……！」
その声をかき消すように、衝撃音が響いた。
後方から来た装甲車が、ベルガード門の装甲車に横付け、強引に体当たりしたのだ。
タングラム門の装甲車は、バランスを崩し、速度も緩む。
突然の行動に、ロイドが驚くと、彼のエニグマが鳴った。
「……聞こえますか、ロイドさん！　ノエルです！」

「君か！　もしかして後ろの装甲車は……」
見れば、新手の装甲車には、タングラム門部隊のマークがある。
副司令ソーニャ二佐の部隊から、ノエル曹長が駆けつけてくれたのだ。
セルゲイも、ふうっと大きく息を吐いた。
「……正直助かったぞ……」
「どういたしまして！　装甲車は、こちらが相手をしておきます！　そのまま行ってください！」
ロイドも、エニグマに向かって安堵の声を送った。
「ありがたい！　それにしても、もう通信妨害は回復したのか？」
と、回線に、新たな声が割り込んできた。
「ハッ、復旧できたのは、ボクのおかげだけどな！」
「その声は……ヨナか！」
ロイドは、唐突に聞こえてきたハッカー少年の声に驚いた。
「ああ、天才ヨナ様さ！　クロスベル国際銀行と協力して、導力ネットも回復してやったぜ！ありがたく思えよな！」
恩着せがましい声だが、ティオはエニグマに優しく応えた。
「ありがとう、ヨナ……恩に着ます」
再びノエルの声が、車内に響いた。

「すでにクロスベル警察と遊撃士は協力し、市内に入ったベルガード門の部隊を制圧しています！　間もなく、警官隊も、そちらに応援に到着するでしょう！」
「おいロイド、せいぜい死ぬなよな～！」
「ああ、また会おう！」
ロイドたちのリムジンは、装甲車を振り切り、古戦場へ到達した。

古戦場を奥へ奥へと進むうち、暗がりの中、偉容が近づいてきた。
サーチライトに照らし出されたのは、荘厳な石造建築。
石壁に囲まれた太陽の神殿が、月明かりに浮かびあがる。
中央には広い階段があり、そこから頂上へと道が続いていた。

しかしそれへ踏み込む前に、ロイドたちはセルゲイの手当てを済ませた。
車内に備え付けの救急キットから包帯を取りだし、止血する。
だがエリィは、苦悶する上司の顔を覗き込んだ。
「課長、やっぱりこれだけじゃ不十分です。わたしが回復魔法を……」
しかしセルゲイは、手を打ち振ってそれを止めさせた。
「こんな傷に貴重な魔力を使うな。それは、お前たちの戦いにとっておけ」
「でも……」

「だいたいお前たち、今日は戦闘続きで余力も少ないだろう。お前たちがやるべきことは、俺を癒すことじゃない。ヨアヒムを捕らえることだ」
それを聞いてロイドは、仕方なく引き下がった。
「……判りました。力不足ですいません」
「俺はここに残って、応援部隊を待つ。一人前になりかけの部下どもを見送るのは、少々気がひけるがな……」
言ってセルゲイは、煙草に火を点けた。
いつもと変わらぬその様子に、ランディが苦笑する。
「ったく……カッコ付けすぎだぜ」
「クク……それがオヤジの特権ってヤツだ」
セルゲイは、紫煙を吐くと四人の部下を見つめた。
「……ロイド、エリィ、ティオ、ランディ………お前らもそれなりに成長した。無事、この件にケリを付けたら、晴れて一人前として認めてやる」
いつになく、力のこもった声だった。
「……だから絶対、無事に戻ってこい。キーアとツァイトも待ってる」
セルゲイの視線は、いつになく優しげだった。
彼にとっては、兄ガイに続いて、弟の捜査官までも失うかもしれないのだ。
だがロイドは、力強い視線でそれに応えた。

「……必ず、帰ってきます」
上司を背に、ロイドたちは神殿に踏み込んでいった。

神殿の中は、しんと静まりかえってた。
石畳からひんやりとした冷気が伝わり、人の気配は無い。
そしてティオが、怪訝そうに顔をしかめた。
「……気をつけてください。ここも時、空、幻……上位の三属性が働いています」
「月の僧院と同じか。警戒して進もう」
ロイドも、武器を握りしめて前進した。
曲がりくねった通路を進み、奥へ、奥へと向かううち、やがて視界が開けた。
「ずいぶん広いな……」
ロイドは、暗い広間を見渡した。
城で言えば、さながら謁見の間、というところだろうか。
正面には玉座が据えられ、その背後には教団の紋章が掲げられている。
さらに玉座の背後には、地下へと通じる道がなだらかに下っていた。
ロイドたちが、その通路を駆け抜けると……
「これは……」
異様な風景があった。

直径、数十アージュにも及ぶ巨大な縦穴が、ぽっかりと口を開いていたのだ。
通路は、その縦穴に沿って、地下深くへと続いている。
だがその底は、漆黒に塗り潰され、どこまで深いのかも分からない。
ランディは、斧槍を担いで、嘆息した。
「なんて深さだ、こりゃあ……ここからの目測だと、深さ五百アージュって所か。やれやれ……骨が折れそうだぜ」
その穴を覗き込み、ティオが微かに震えている。
青ざめるティオに、ロイドはそっと歩み寄った。
「ティオ、大丈夫か？　顔が青いぞ」
「……問題ないです。ただ、昔いた場所のことを少し思い出してしまって……」
「昔いた場所……教団の拠点のことか？」
ロイドが問うと、ティオは小さく声を震わせた。
「……はい。この縦穴は、煉獄に続く黄泉路を見立てて建造されたんだと思います」
「なんだって？」
「女神を否定する悪魔に近づき、彼らに供物を奉げる儀式を執り行うために……」
ティオの横顔は、辛い過去を思い出しているようだった。
それを聞いてランディも、苦い表情になる。
「ハッ、道理で辛気臭いわけだ」

ロイドは、ティオの肩をぽんと叩くと、その瞳を見据えた。
「だったら行こう。煉獄とヨアヒムの繋がりを断つために……」
「……はい」
「……それがすべてを救うはずだよ」
ロイドたちは、奈落へ向かって駆けた。
暗黒の只中へ吸い込まれるような感覚に耐え、ひたすら石段を下りていく。
だがやがて階下に、見なれた黒ずくめの男たちが見えた。
ロイドたちを待ち構えていたのか、整然と居並んでいる。
「ルバーチェの……ここにもいたのか！」
「やはりヨアヒムは、この下にいるのよ！」
ロイドとエリィは、すぐに武器を構えた。
しかしティオだけは、彼らの異質さを感じ取っていた。
「待ってください！　様子が……おかしい……！」
ルバーチェの男たちは、攻め寄せる気配もない。
ただじっと、その場に立ちつくしているだけだ。
しかしそのうち、がくがくと震えながら、けたたましい雄叫びを上げた。
「が……ああああああああああっ！」
「なんだ！」

身構えるロイドの目前で、構成員たちの身体が黄色い瘴気を発する。
それに呑まれた途端、男たちの肉体はばきばきと音を立て、奇怪に変容したのだ。
肌は灰褐色の甲殻に覆われ、腕は肥大し、口から牙が伸びていく。
それはまさしく、煉獄に住む悪魔の如き姿だった。
「魔人化！」
ティオが叫ぶと、魔物と化した敵は漆黒のエネルギーを撃ち放った。
その射撃は、ロイドたちの周囲に着弾し、階段を、壁面を吹き飛ばす。
「怯むな、行くぞ！」
ロイドは、真っ先に飛び出すや、左右のオールラウンダーを振り抜いた。
その威力は、魔人を十アージュも吹き飛ばし、撃砕する。
「援護するわ、ロイド！」
エリィの射撃も、正確無比に集束し、魔人の目を、喉を撃ち抜いた。
さらにランディが、炎をまとった斧槍を振りかざす。
「どけってんだよ、ザコどもが！」
灼熱をはらんだ斧槍テスタロッサは、蜃気楼を発して、魔人を焼き切っていく。
そしてティオも、導力杖を横に薙ぎ払った。
「邪魔です、ビームザンバー！！」
吹き飛ばされた魔人は、遺跡の壁に突っ込み、昏倒する。

と、倒れた魔人たちが、また瘴気を発した。
まるで毒気が脱けたかのように、彼らは元の人間に戻ったのだ。
エリィは、その光景をこわばった顔で見つめた。
「これも……《真なる叡智》の効果かしら？」
「だろうね。恐らく身体能力を強化した先には、こんな末路が待っているんだ」
ロイドが言うと、ティオが倒れた者たちを走査した。
「……不思議ですね。私たちの攻撃を受けたのに、命に別状はありません。まるで魔人の部
だけを倒して、元の人間が残ったような……」
彼女の言葉を聞き、ロイドも通路の先を見据えた。
「だとすれば、ガンツさんたちが心配だ。もしやみんな魔人にされてるんじゃ……」
しかしロイドの懸念は、すぐに晴れた。
階段を下りきった先には、無数の牢獄が連なっていたのだ。
そして鉄格子の中には……
「ガンツさん！　ここにいたんですか！」
「あ、あんたらは警察の……」
檻の中には、何十人もの人々が囚われていた。
エリィも、すぐに失踪者の詳細が書かれた警察手帳を取りだした。

「劇団アルカンシェルのニコルさん……旧市街のディーノくん……証券会社勤務のボンドさん……皆さん、御無事ですね！」
鉄格子に嵌められた錠は、ランディが次々に斧槍で破壊していく。
解放された人々は、泣き崩れるようにしてロイドにしがみついた。
「よかった～、来てくれて～！」
「ガンツさん！　いったいどうしてこんなことに！」
「そ、それは……町長の目を盗んでこっそり、またあの薬を買いに行ったら、黒ずくめの男たちに拉致されて……」
「まったく！　でも、間に合って安心しましたよ」
しかしやがて、牢獄の奥まで行ったランディが、表情を曇らせた。
「なあ……檻は全部、解放するのか？」
「当たり前だよ、ランディ。捕まってる人はみんな……」
「だけどよ。捕まって当たり前の奴がいるんだぜ？」
ランディはそう言って、檻の中を指さす。
そこに居たのは、哀れな虜囚となったマルコーニ会長であった。
「お、お前たちは、特務支援課のガキども！」
ルバーチェ商会の会長は、癪に触るような声で吼える。
ロイドは、鉄格子越しに話しかけた。

「あなたも捕まっていたとは……もしや教団とつるんで、この事件を引き起こしたかと思っていたのですが……」
「違う！　わしも被害者だ！　昨夜、あの薬を飲んだ連中が、急におかしくなってしまって……わしをここに……ガルシアもどこかへ拉致して……」
そう言うとマルコーニは、がっしと鉄格子をつかんだ。
「だからわしは無関係だ！　早くここから出せ！　市民の保護は、警察の義務だろう！」
しかしロイドは、その要請を毅然としてはねのけた。
「ふざけるな！　元凶はヨアヒムだが、あんたも無実ではないんだ！」
「くっ……」
「あんたは、ガンツさんたちに《真なる叡智》を売りさばき、危険が無いか確かめたんだろう？　そしてあわよくば販売ルートを確保して、金を稼ごうとした。違うか？」
「いや、わしは……わしは……」
「自業自得だ。一方的な被害者面などさせるものか……」
ロイドは、怒りと共にため息を吐き出した。
この男さえ、ヨアヒムに加担しなければ、事態はここまで大きくならなかったのだ。
エリィも鋭い視線を、マルコーニに突き刺した。
「今度ばかりは、あなたがたをかばう議員も現れないでしょう。ハルトマン議長に至っては、ヨアヒム氏に資金援助をしていた疑惑も出ています。もうあなたの後ろ盾は無くなったと覚

した方がいいでしょうね」

「ぐぐぐぐ……」

ロイドは、ひと呼吸置いて、冷静さを取り戻した。

「……あんたには、まだこの檻の中にいてもらう」

「そんな！」

「今は、あんたにかまってる暇は無いんだ。後から来る警察の応援部隊を待つんだな。その後は、クロスベル警察の牢屋に入ってもらう。そして……」

ロイドは、鋭い眼光を閃かせた。

「お前がなぜ、兄貴の警察バッジを持っていたかも、説明してもらうぞ」

ロイドは、鉄格子越しにマルコーニに詰め寄った。

この男こそ、兄を殺した張本人かもしれないのだ。

しかしマルコーニは終始、狼狽するばかりだった。

「待て！　あれを見たのか！　違う！　わしは預かっただけだ！」

「誰から！」

「分からん！　あれは郵送されてきただけで……」

「ごまかすな！　そんな言い訳が通用すると思うか！」

「本当だ！　嘘じゃない！」

やがてマルコーニはひざまずき、許しを請うように指を組んだ。

ロイドは、大きく息を吐き、仲間たちに振り返った。

「やれやれ。謎は、謎のままらしいよ……」

エリィもティオも、黙してロイドを見つめるしかできない。

そんな雰囲気を打ち消すように、ランディが視線を巡らせた。

「おい、それよりガルシアのオッサンはどこだ？　てっきり一緒に捕まってるものと思ったが

……」

するとマルコーニが、牢の中から声をあげた。

「ガルシアは最後までヨアヒムに抵抗していた……だが、化物になった部下たちに力ずくで連行されて……」

「フン……そうか。ちょっと気になるな」

ランディは、ちょっとどころではない様子でロイドを見やった。

無論、ロイドもガルシアの行方に不安を覚えた。

しかし今は、彼一人を案じている場合ではない。

ロイドたちは、さらに煉獄の奥へと足を踏み入れていった。

通路は、次第に禍々しさを強めていった。

どこからか、血のように赤い光が射し込み、視界まで朱に染まる。

ロイドたちは、まるで血塗られた道を歩むような感覚に襲われた。

「だいぶ走ったはずだが……」

「ええ、通路が曲がりくねっているから、どれだけ進んだか、判らないわ」

エリィも導力銃を握ったまま、辺りの様子を窺っている。

やがて通路は、なだらかな傾斜路に行き当たった。

見上げれば、天井は高い吹き抜けになっている。

通路の左右には、明かりが灯り、傾斜路の先には階段と踊り場が見える。

その踊り場に……

「フフ……やっと来たようだね」

聞き知った声に、ロイドたちは身を固くする。

その声に向かって、エリィがまっ先に銃口を向けた。

「アーネストさん……！」

すっくと、その男が立ちはだかっていた。

手には、あの魔剣。

悠然と立ってはいるが、いつでも一撃を繰り出せるように見える。

ロイドは一歩、間合いを詰めた。

「お前たちの計画は、もう破綻している。いい加減、罪を認めたらどうだ？」

「その『罪』とやらは、人間が勝手に決めたものだろう？　今日から、このクロスベルは新たなる《聖地》となる……どうしてそんな下らないルールを気にかける必要があるのかな？」

アーネストの瞳も、鮮血の色に染まっていた。

もはや理性的な会話が通じるとも思えない。

それでもロイドは、捜査官としてアーネストに相対した。

「……お前がどんな経緯でヨアヒムに取り込まれたか、事情を聴くのは後だ。今は、そこをどいてもらう！」

「ハハ、できるかな！　偉大なる『同志』から授かった《真なる叡智》に至る力……！　その目で確かめるがいい！」

叫ぶや、アーネストは両腕を掲げた。

同時に、不気味な瘴気が身体を包み込み、肉体が膨張する。

巨大化した身体には、鈍い銀色の甲冑が張り付いた。

見る間に彼の身体は、装甲騎士のような出で立ちに変貌したのだ。

そして眼光には、憤怒が灯っている。

ティオが、あえぐようにうめいた。

「強度四一……難敵です」

「……ククク……イイ心地ダ……」

アーネストは、声すら人間離れしていた。

「魔ノチカラヲ取リ込ミ、人ヲ超エタ存在ニ進化スル……コレゾ《真ナル叡智》ヘノ道！」

しかしロイドも、左右の衝撃警棒をぐいと握った。

叫んだ時、頭上で咆吼が響いた。
見上げれば、吹き抜けの天井上から、巨大な影が急降下してくる。
聖ウルスラ医科大学に現れた、あの翼竜である。
あわててランディが、斧槍を突き上げた。
「こっちにもいたのか！」
炎をまとう斧槍テスタロッサが、翼竜の鼻面を叩いた。
翼竜はいったん怯んだものの、口から黒煙を撒き散らす。
それに呑まれたエリィとティオが、苦しげに悶えた。
「なんなの、これっ……！」
「視界が……」
黒煙に呑まれ、二人は支援攻撃の狙いも定められない。
その間隙に乗じて、アーネストが跳躍した。
「死ヌガイイっ！」
ロイドの脳天めがけ、大上段から魔剣が振り下ろされる。
凄まじい剣戟を、ロイドは寸前で避け、後方へ跳んだ。
しかしアーネストも諦めない。
さらに踏み込み、二の刃、三の刃と撃ち込み続ける。

「ちぃっ……！」
ロイドは、衝撃警棒オールラウンダーで、その刃を弾き返した。
アーネストの刃は、一撃一撃が重い。
だがロイドが支えねば、黒煙に襲われたエリィとティオが斬られてしまう。
二人が黒煙から脱するまで、一人で抗うしかなかった。
「そこをどけ！」
ロイドは地を蹴って飛び退くと、間髪入れず、アーネストの懐に疾走した。
衝撃警棒に赤い閃光をまとわせた、渾身の一撃。
戦技、ブレイブスマッシュが、魔人の腹部で炸裂する。
だがアーネストは、一瞬よろめいただけで、すぐさま魔剣を振り抜いた。
「小癪ナ！　ダブルザンバー！」
叫喚と共に、魔剣から波動が射出された。
怒濤の如きそれを、ロイドは必死に回避する。
すると、ロイドをかすめた波動は、壁面に激突。
頑強な石壁を、木っ端微塵に吹き飛ばした。
「くっ……！」
爆発の衝撃を浴び、ロイドは体勢を崩した。

まともにくらえば、即死は間違いない。
だが寸前、ティオが黒煙から逃れてきた。
「させません、ビームザンバー！」
ティオの魔導杖からも、圧するような波動が疾駆した。
それはロイドに迫るアーネストの波動に立ちはだかり、衝突し、相殺した。
アーネストは、巨体を揺るがせて切歯した。
「邪魔ヲスルナ―！」
しかしティオは、毅然として魔導杖の先を突きつけた。
「悪魔を滅するには、女神の力……ダークマター！」
空属性の攻撃導力魔法が、アーネストを捕捉する。
ティオの攻撃を浴びた途端、魔人の身体から、ばきっ！　ばきっ！　と装甲が弾け飛ぶ。
強力な魔法の重力に捕らわれ、アーネストの動きが止まった。
「ヌウッ……！」
一方、ランディは、翼竜がくり出す、噛みつき、黒煙、爪、翼、尾での攻撃を、必死にテスタロッサで振り払っていた。
反撃を加えようとしても、空中へ逃れ、痛打はままならない。
斧槍を握って、ランディは間合いを測りかねた。
「くそっ、面倒な奴だぜ！」

そこへエリィも、ようやく黒煙を脱してきた。
「ランディ、頭下げて！」
導力銃オワゾーブルーが、青い光弾を連射する。
それは翼竜の大きな翼に、無数の穴を穿っていった。
翼をばたつかせても、魔獣は飛び上がれず、尻餅をつく。
間隙を見逃さず、ランディは翼竜へ斧槍を振り下ろした。
「これでどうだ！」
渾身の一撃は、翼竜を真っ二つに両断した。
魔獣が爆砕すると、ランディは、ロイドへ振り返った。
「こっちは片づいたぜ、ロイド！」
「よし、一気に決めよう！」
ロイドとランディは、魔法によって拘束されたアーネストへ突進した。
電光をまとった衝撃警棒と、炎をまとった斧槍が、同時に魔人へ打ちこまれる。
二人の同時攻撃を受け、アーネストは真後ろへ吹き飛ばされた。
「ガ……ガアアアアアッッ！」
衝撃のあまり、アーネストは、傾斜路へぶち当たり、深くめり込む。
すると彼の身体から、先ほどの瘴気がぶわりと立ち上った。
邪気が消え失せたアーネストは、元の姿を取り戻したものの、仰向けになって昏倒するだ

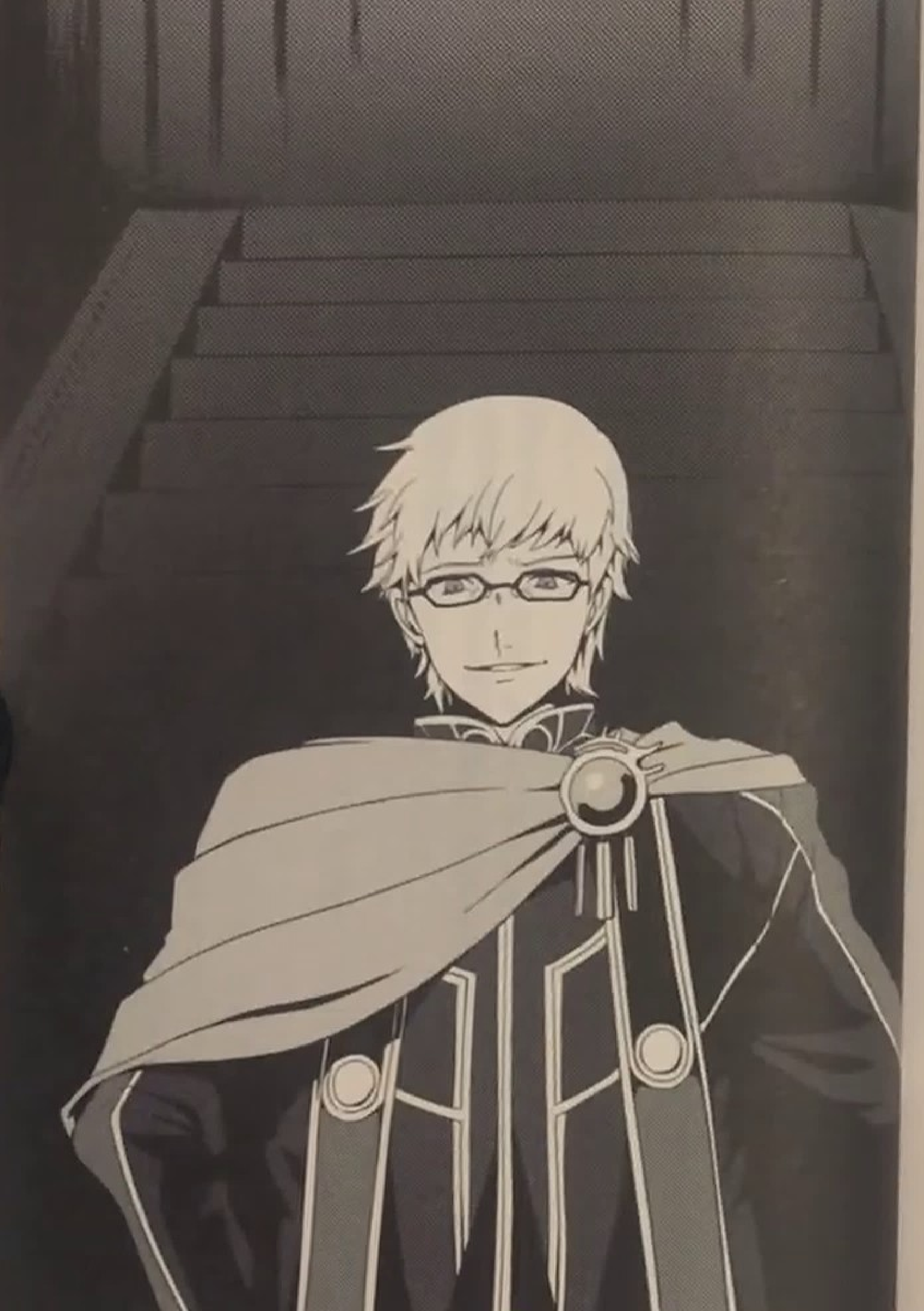
揺り動かしても、アーネストは目を覚ます気配もない。
エリィは、首を横に振って、通路の先を指さした。
「今は、この人に関わっている場合じゃないわ。先を急ぎましょう」
「そうだな……後始末は、応援部隊に任せるとしよう」
ロイドたちは、アーネストを後に、傾斜路を進んでいった。
一歩進む毎に、澱んだ邪念を感じながら。

やがて長い長い真っ直ぐな通路が開け、その行き止まりに巨大な門が見えた。
恐らく、この神殿の最奥部。
しかしその門の前には、威圧を発する巨漢が待ち構えていたのだ。
「ガルシア・ロッシ……！」
ロイドは、スーツ姿の彼の名を呼んだ。
だがルバーチェ商会のナンバー二は、返事もせず、全身に瘴気をまとわせている。
瞳は赤く輝き、表情は獣性を剝き出している。
ロイドは、その変貌ぶりにほぞを嚙んだ。

「まずいな……恐らく《真なる叡智》を投与されている。あの男の能力が、薬物によって強化されているとしたら……」
するとランディが、斧槍を手に前に出た。
「情けねえぜ、キリングベア……あんたほどの男がよ」
「が……ぐぐぐっ……」
「百戦錬磨の元猟兵が、薬で操られるとは落ちたもんだな。あんたにも意地があるなら、その呪縛、自分で剝ぎ取ってみろよ！」
しかしガルシアは、咆吼を上げてロイドたちに飛びかかった。
一撃は、見えぬほど速い。
瞬時にしてロイドとランディは、左右に吹き飛ばされ、壁面にめり込んだ。
「がっ！」「くそっ！」
「ロイド！　ランディ！　しっかり！」
エリィが導力銃を、ティオが導力魔法を、巨漢に撃ち込む。
だがガルシアが吼えるたび、その傷は癒え、まるでダメージは与えられなかった。
ロイドは、朦朧とする意識に抗い、巨漢に狙いを定めた。
「まともな攻撃は、効かないようだな……」

「ここは通させてもらうっ!」
ロイドとランディが放った技が、互いに共鳴し合い、増幅する。
それは真の絆で結ばれた者だけが撃てる、究極の奥義。
あらゆる戦技の中で、最大の威力を持つバーニングレイジが、巨漢を吹き飛ばした。
「が……ああっ……」
紅蓮の奔流に呑まれ、ガルシアが背後の門にぶち当たる。
床にバウンドした巨体は、微動だにせず、遂に瘴気も消え失せた。
「やった……か……?」
ロイドとランディは、ガルシアの元に駆け寄った。
すると巨漢も、唇だけをわずかに動かし、声を漏らした。
「礼を……言うぜ……」
「ガルシア……」
「クスリに……操られるとは……俺も……ヤキが回ったもんだ……」
ロイドは、彼の傍にかかんで問いかけた。
「やはりヨアヒムに薬物を投与されたのか?」

「ああ……無理矢理……注射しやがった……あの野郎……最初から胡散臭えと思ってたんだ……よくも俺の部下たちを……」
そしてガルシアは、わずかにまぶたを開いた。
「……ヨアヒムは……この先にいる……」
「そうか……」
「気をつけろ……あいつは……あいつは……」
そこまで言って、ガルシアは意識を失った。
薬物を打たれても魔人化しなかったのは、彼自身の強靭な精神の故だろう。
ロイドは立ち上がって、巨大な門を見据えた。
「ようやく、たどりついたな」
その言葉に、エリィが、ランディが、ティオがうなずく。
「行きましょう、ロイド」
「決着をつけようぜ。キー坊のためにも」
「彼を、許すわけにはいきません……」
ロイドも仲間たちに視線を送り、大門を押し開いた。



両開きの扉の先には、円形の地下湖が広がっていた。
通路は、湖面を真っ直ぐ渡り、広い階段へと繋がっている。
階段は、やがて祭壇へと至り、その頂上には……
「みなさん、あれは……！」
ティオが、指さした先には、透明の球体が据えられていた。
間違いない。押収した写真の中で、キーアが囚われていた球体である。
ロイドも、ゆっくり辺りを警戒した。
「そうか……あれはこの場所を写していたのか……」
「ふふっ……その通りだよ」
不意の笑みに、ロイドたちは身を固くした。
いつの間にか、階段の下に、ヨアヒム・ギュンターが立っている。
だが彼は白衣ではなく、壮麗な司祭服を身にまとっていた。
そしてヨアヒムの頭髪も、真っ白に変わっていたのだ。
「ようこそ我らの起源にして聖地へ、特務支援課の諸君。君たち自ら、キーア様を返しに来てくれるとは、手間が省けるね」
「ふざけるな。お前に、キーアは渡さない」
ロイドは一歩、間合いを詰めた。
「キーアは、俺たちが両親の元に返す。誰がお前などに……」

だがそれを聞くとヨアヒムは、両手を広げて笑いたてた。
「ははは……なるほど。君たちはまだ、キーア様がこの時代の生まれだと思っているのか？」
「こ、この時代……!?」
ロイドたちは、その意味深な言葉に耳を疑う。
しかしヨアヒムは、平然と先を続けた。
「いいだろう。《真なる叡智》に至らぬ者に話すのは、本来禁じられているが……君たちには特別に教えてあげよう」
ヨアヒムは、背後の球体を指さした。
「キーア様はな、眠っておられたのだよ。あの祭壇の、聖なる揺りかごの中でまどろむよう
……そう、五百年も前からな」
「ご、五百年だと――」
ロイドたちは、思わず絶句した。
だがヨアヒムは、歌うように先を続ける。
「そんなに驚くことも無いだろう？ 現代の技術では不可能でも、古の技術ならばそれが可
だ。五百年前、古代遺物を創造した錬金術師の集団がこの地にあった。この祭壇は彼らの技
を元に造られたと伝えられている」
ティオが、悟ってつぶやいた。
「星見の塔を建造した中世の錬金術師たち……」

「そうだ。以来、キーア様は五百年もの永き眠りに就かれていた……当然、その素性を知
は、我が教団にすら残っていない。そういう事さ」
ロイドは、あまりの事実にしばし動けなかった。
「なんてことだ。それじゃキーアは……両親にも会えないのか……」
「ふっ、キーア様に過去など不要……彼女こそ、古代の叡智を蓄えた真の神になるのだ
な！」
叫ぶヨアヒムに、ロイドは間合いを詰めた。
「神だと……それはどういう……」
「ハハハ、文字通りの意味さ！ いい加減、気付くべきなんだよ！ 《空の女神》？ そ
ものが何処にいる！ 全ては七耀教会によるまやかしだと何故気付かない！」
ランディとエリィは、その乾いた声に顔をひきつらせた。
「しょ、正気かよ……」
「女神の存在を疑う人がいるなんて……」
それでもヨアヒムは、司祭服をひるがえして言った。
「それが、我が《D∴G教団》の真理だ。よく誤解されるのだが、我々は別に悪魔とい
を崇拝しているわけではない。ただ、女神という概念を否定するために好都合だから概
利用しているにすぎない。毒をもって毒を制す……という事だよ」
「ふ、ふざけないで……！」

ティオが、怒気を露わにした。

「だったらどうしてあんな酷いことを……みんな、泣き叫んでた……悪魔なんて崇拝してもいないのにどうしてそんな……！」

あふれ出した感情が、ティオの声を震わせていた。

ロイドたちですら、そんな嗚咽のこもった声を聞いたのは初めてだ。

しかしヨアヒムは、そんなティオの思いすら、一笑に付した。

「……ティオ・プラトー……君の名前は覚えているよ。アルタイル・ロッジで素晴らしい感応力を示した検体……まさかこんな形で再会するとはね」

ロイドは、ティオをかばうように前に出た。

「……ちょうどいい。改めて話してもらおうか……大陸各地の拠点で行っていた数々の非道な儀式の目的を……！」

「まだ判らないのかね？　全ては《真なる叡智》の完成度を高めるためさ。人が極限状態の時に示す、想念の強さや潜在能力の開花……それが《真なる叡智》の完成度を高める恰好のデータだったわけだ」

ヨアヒムは、陶酔したように続けた。

「各地の拠点で多種多彩な実験が行われた理由も同じ……多様なデータが多ければ多いほど《真なる叡智》は完成に近づいた。ちなみに子供が多かった理由は、単にデータサンプルの精度の問題さ。思春期を迎える前の幼く無垢な検体の方が色々と……」

「……っ……」

ティオが、苦悶を飲みこんだ。

ヨアヒムの言葉に、慈悲はない。

捕らえ、殺した子供たちに対して、一切の罪悪を感じていないのだ。

ロイドとエリィも、その言を封ずるように叫んだ。

「やめろ……！」

「いい加減にしなさい！　この人でなし！」

ランディも、柄が折れんばかりに斧槍をきつく握っている。

「……まさか猟兵以上の外道がいるとはな……」

長々と話したヨアヒムは、ひと呼吸ついた。

「しかし我々が力を取り戻すのに、ずいぶん時間がかかったものだ。六年前……あの忌々しい作戦でほとんどの拠点が失われたが……ハルトマン議長は、よく役に立ってくれたよ。しかもルバーチェという、便利な手足のオマケ付きでね」

ロイドは、さらにヨアヒムに詰め寄った。

「どうやって《真なる叡智》を広めたんだ……？」

「ああ、聖ウルスラ医科大学で開発された、画期的な栄養剤という触れ込みでね。警備隊の司令殿も、まさかこんなにあっさり信じるとは思わなかったが……」

その告白に、ランディが天を仰いだ。

「阿呆司令が……迂闊すぎんだろ！」

ヨアヒムは、双眸に狂喜を宿して言った。

「恐らく古代の錬金術師たちも、同じことを考えたのだ。女神を超える存在を創ろうとして……その素質をキーア様に顕現させた。しかし恐らく、弾圧の手が伸びたため、やむなくあの御方を後代に託し、長き眠りに就かせたのだろう」

「ヨアヒム、貴様……！」

「今までに捕らえたあらゆる検体より、キーア様は優秀だった！　ずば抜けていた！　まさに神の御子だった！」

ヨアヒムが哄笑を響かせると突然、その手に魔導杖が現れた。

残忍な司祭はそれを構えると、不敵な笑みをちらつかせた。

「だが私の叡智をもってすれば、神の御子を、真の神へと昇華できる。さあ、返してもらおうか、我らが神の御子を……」

「そ、その髪は……」

さらにヨアヒムの髪は、ざわざわと波打つように、白く変化していく。

変貌を目の当たりにし、ロイドは怖気を覚えた。

「僕の髪は、こちらの方が地の色でね……《真なる叡智》を投与し続けたおかげで、少々風変わりな体質になったんだ。何せここ数年、まったく睡眠を取っていないからねえ」

「数年だと？」

驚愕するランディに、ロイドもようやく納得した。

「なるほど……それで病院勤めをしながら、ここまでする時間が取れたのか」

「さすがは捜査官。いい所に気付くじゃないか。ちなみにこの杖は、例の錬金術師どもが造り上げた魔導具の最高傑作の一つさ。古代遺物すら凌駕する力を秘めていてね……」

ヨアヒムは、その魔導杖をぶんと一振りした。

「さて、そろそろ幕引きとさせてもらうよ。多分、今日という日は、記念すべき一日になるだろう……キーア様が《神》となり、我らが悲願が達せられる日としてね！」

歓喜に満ちた声で、ヨアヒムは哄笑する。

しかしエリィは、我に返って導力銃を構えた。

「大勢の子供たちを死に追いやって、なにが叡智よ！　なにが悲願よ！」

ランディも、挑むように前へ踏み出した。

「てめえの欲望のために、キー坊を利用させてたまるか！」

ティオも、導力杖の先を向けて超然と言い放つ。

「私と同じ悲劇を……レンと同じ悲しみを……キーアには繰り返させません」

そしてロイドが、深く呼吸を吐いた。

「お前を逮捕する、ヨアヒム・ギュンター……覚悟はいいな？」

だがヨアヒムは、再び乾いた笑い声を撒き散らした。

「覚悟だって？　叡智を帯びた私に、君たちが勝てるとでも？」

瞬間、ヨアヒムの魔導杖から、紫色の波動が拡散した。
円形に広がったその波動は、毒々しい色を増していく。
しかもその中央に、眼球じみた何かが顕現した。
その眼球に見つめられた途端……
「な……！」
ロイドは、四肢の硬直を覚えた。
全身が一切動かせず、鼓膜にはうわんうわんという波動が反響している。
エリィもランディも、同様に麻痺したままだ。
ティオは、必死に声を搾り出した。
「く、空間が……呪縛されている！」
「さあ、捕まえたよ」
ヨアヒムは、階段を下りてきた。
「早速、君たちにも《真なる叡智》を飲んでもらおうか。そうすれば君たちは、僕の思うがまま……キーア様も納得してお戻りになって頂けるだろう」
ロイドは、ようやくヨアヒムの狙いを悟った。
「そ、それが狙いで俺たちをここまで……！」
「今頃、分かったのかい？　君たちのような愚物に、どうしてわざわざ面会の時間を割いたと思っていたんだ？　全てはキーア様のため……それ以外の理由はない……」

ヨアヒムは、ロイドの正面へ歩み寄った。
「所詮、君たちに僕は倒せない。僕の計画を見抜けるはずもない。愚物が叡智を知るなど、あり得ないことなんだよ。くくっ……くくくくくくっ……！」
ヨアヒムは、高らかに勝利の声を響かせる。
だが、ロイドは……
微動だにできぬまま、ヨアヒムの目を見据えた。
「……お前は、決して全能でも無敵でもない」
「なんだと？」
「もしお前が全能なら、五年前、俺の兄貴に拠点を潰されはしなかったはずだ」
その言葉に、ヨアヒムの目がすうっと細まる。
「そうか……貴様、あの……ガイ・バニングスの……ほほう、そうか、そうだったのか！　なるほど……兄の殉職後、君も捜査官になったというワケか！　ははっ！　これは傑作だ！　まさか君が、あの厄介な男の弟だったとは……！」
ロイドは、呪縛から逃れようともがきながら呻いた。
「……それは肯定の言葉と受け取っていいのか？」
「確かに当時、ガイ・バニングスは、僕という存在に迫っていた。厄介だからルバーチェに抹殺を依頼したんだが……」
「なにっ！」

「しかし、どうやら殺したのは、全く別の勢力だったようだねえ。三年前、マルコーニは、さも自分たちの手柄のように、僕に恩を着せてきたが……ガルシアは否定していたから、その可能性は無いだろう」

その真相を聞き、ロイドはぎこちなく笑って見せた。

「なるほど……だろうと思ったよ。あんたみたいな男に、兄貴が負けるとは思えないからな」

「ほう、面白い事を言うじゃないか」

ヨアヒムは、もはやロイドが自分の掌中にあると信じ、微笑んでいる。

しかしロイドも、挑むように笑っている。

「キーアが競売会の場にいた経緯……多分それも、あんたにとっては、想定外の出来事だったはずだ……自らが《神》と崇める存在を、簡単に手放すわけがないからな……」

「ぬ……うっ……」

ヨアヒムは、苛立ちを露わにして吼えた。

「確かにあの日、キーア様は永き眠りから、ようやくお目覚めになった……だが、僕がそれを知った時には、この祭壇から居なくなっていたのだ。おそらくご自分で地上に彷徨い出たのだろう……」

だがその弁明を、ロイドは一笑した。

「そして偶然、出品予定だった人形のトランクに入り込んだのか？　バカな！　そんな事がありえるはずがない。つまり、今回の事件に関しては、黒幕であるあんたも知らないことが、少

なくないという事だ」

「ぐっ……」

思わずヨアヒムが口ごもると、ランディも笑みを取りもどした。

「はは……良いツッコミだぜ、ロイド！」

エリィとティオも硬直したまま、微笑んだ。

「たしかに……さすがロイドね」

「慧眼です……所詮、ヨアヒムもその程度の黒幕ですか」

侮蔑を浴び、ヨアヒムの額に血管が浮き上がった。

「だ、だからどうした！　キーア様がお戻りになれば、そのような瑣末な疑問は……」

しかしロイドはもう、ヨアヒムの戯れ言を聞く気は無かった。

目の前にいる男が、急速に小さな存在に思えてきたのだ。

「《真なる叡智》？　冗談も大概にしたらどうだ？　あんたが今していることは、古代の力を盗んで使っているだけだろう……」

「な……！」

「あんたが非道な実験を元に、完成させた薬も同じだ。罪も無い子供たちを弄び、愚かな試行錯誤を繰り返した挙句、偶然見つけた結果でしかない……そんなもの、断じて《叡智》であるものか！」

「き、貴様……」

ヨアヒムは、魔導杖を掲げ、ロイドに振り下ろそうとする。
だがそれを制するように、エリィとティオが声を飛ばした。
「確かに《叡智》と呼ぶには、下劣すぎるわ」
「……卑しいと言ってもいいかと思います」
ロイドも、ヨアヒムと対峙したまま、思いをぶつけた。
「あんたは、自分が高邁だという下らない幻想に取り憑かれ、それをキーアに押し付けようとしている。あの無邪気で、天真爛漫で、思いやりもある、あの子に……」
言葉を連ねるうち、ロイドの内奥から力が湧き上がってきた。
瞼には、キーアの笑顔も浮かんでいる。
それを思うと、力は次第に膨れ、熱く高まった。
「キーアは、俺たちにとって大切な子だ。お前にはわたさない……」
「黙れ、キーア様は我らの……」
「お前の《神》になど、させるものか！」
叫んだ刹那……
ロイドの声音が、辺りに反響した。
その叫喚は辺りを震わせ、ヨアヒムの波動と衝突する。
瞬間……ぱりーんっ！　という音とともに、紫色の眼球が砕け散った。
ヨアヒムは、動揺も露わに、後ろへよろめいた。

「馬鹿な……！」
そしてランディが、安堵の声をあげた。
「か、身体が動くぜ！」
「呪縛が……解けた……！」
エリィとティオも、自由を取り戻している。
無論ロイドも、ぐいとヨアヒムに詰め寄った。
「……ヨアヒム・ギュンター、あんたの器はもう見切った。この上、何をして来ようとも、俺たちは絶対に屈しない……大人しく投降してもらおう」
ロイドが衝撃警棒を、ランディが斧槍を構える。
エリィは導力銃の焦点をヨアヒムの額に合わせ、ティオは導力魔法の発動準備に入った。
それでもヨアヒムは絶望もせず、胸元に手を入れた。
「ははっ……参ったな……これじゃあ……しか……じゃないか……」
「……？」
「何をぶつぶつ言ってやがる？」
ロイドとランディが眉を寄せると、ヨアヒムは声量を高めた。
「ひ……はははっ！　これじゃあ切り札を使うしか、無くなったじゃないか！」
ヨアヒムが取りだしたのは、小さな薬瓶だった。
その中には、《真なる叡智》と同じ形だが、蒼ではなく、真っ赤な錠剤が入っている。

ヨアヒムは、それを開けると、一気にすべて、口の中に流し込んだ。
「これぞ《真なる叡智》の最終進化形！　さしずめ《紅の叡智》と言ったところかな？」
言いながらヨアヒムの身体が、びくんっ、びくんっと鳴動する。
ヨアヒムは、歓喜に満ちた顔で辺りを見渡した。
「見える……見えるぞ……大いなる《D》……失われた力の源が……ひゃはっ……ひゃはははははははっ！」
次の瞬間、ヨアヒムの身体から瘴気が弾けた。
同時に、その肉体が膨張し、灰褐色の装甲に覆われた魔物に変じていく。
その変貌はアーネストの比ではなく、ティオも唇を震わせた。
「強度四五……これほどの力を得たとは……」
魔人化を果たしたヨアヒムは、うっとりとした声を地底湖にこだまさせた。
「アア……ココチヨイ……」
「今コソ我ハ……総テノ真実ヘト至ッタ……」
「我ニハ総テガ視エル……きーあ様ノ失踪ノカラクリ……貴様ノ兄ノ死ノ真相……くろすべるノ地ニ課セラレタ避ケラレヌ運命スベテガ……」
すると魔人の身体から、不可視の波動が拡散した。
ロイドたちはそれに呑まれ、後方へ吹き飛ばされる。
「があっ……！」

「きゃあああっ！」
ロイドも、エリィも、床に叩きつけられ、バウンドする。
さらにここまで続いていた通路が、音を立てて地底湖に沈んでいった。
もはや退路すら無い。
しかしロイドは、ぐらつきながらも、身を起こした。
「……覚悟を決めよう……これが最後の戦いだ！」
「おおっ！」
真っ先に、ランディが立ち上がる。
斧槍を携えた彼は、あらん限りの力を得物に込めた。
「喰らいやがれ！」
蜃気楼の斧槍が、深々と魔人の装甲を貫き、灼熱を流し込む。
爆ぜるように、装甲が吹き飛び、魔人は絶叫した。
「ガアアアアアッ！」
続けてティオが、高々と導力杖を掲げる。
その周囲には、すでに導力魔法の波動が広がっていた。
「行きます、ダークマター！」
手早く発動した空の属性魔法が、爆光となってヨアヒムを呑んだ。
魔人の身体は、軋むような音を立て、硬直する。

だがヨアヒムは、魔導の束縛を強引に振り払った。
「小癪ナ！」
突如、その手に現れた巨大な剣が、ランディを斜めにぶった斬る。
枯葉のように舞ったランディは、円柱に叩きつけられ、苦悶を発した。
「ぐおっ！」
さらに魔人は、ティオめがけて手のひらを差し向ける。
そこから放射された冷気の渦が、ティオの身体をびしびしと凍結させた。
「くっ……不覚ですっ！」
しかしその隙に、ロイドとエリィは、互いのタイミングを推し量っていた。
「エリィ、今だ！」
「分かってる！　これで決めましょう！」
エリィの放った光弾が、砲撃の如き轟音を上げた。
閃光は魔人を撃ち、炸裂と共に、装甲を吹き飛ばしていく。
その剝き出しになった肉体めがけて、ロイドが一気に急迫した。
「うあああああっっ！」
ロイドは叫喚と共に、膨大な電撃をヨアヒムにぶち込んだ。
「貴様アッー！」
ヨアヒムが伸ばした腕は、電撃に包まれ、内奥から吹き飛んだ。

真っ白い電光に焼かれ、ヨアヒムの身体が崩れていく。
ロイドは、後方へ飛びすさって、悶絶する魔人を見上げた。
「やった！」
……だが。
これほどの攻撃を受けても、魔人は生命を維持している。
それどころか、ヨアヒムはさらに強い瘴気をほとばしらせたのだ。
「な……んだと……」
ロイドは、間近でその変容を目撃した。
すでにヨアヒムの身体からは、すべての装甲が剝がれ落ちている。
中から現れたのは、剝き出しの筋肉。
さらに魔人の周囲に、うねるような閃光が何本も現出する。
エネルギー状の腕は、素早くロイドたちを薙ぎ払った。
「があっ！」
「きゃああっ！」
壁面に叩きつけられたロイドは、骨格を砕かれるような激痛に耐える。
それを嬉しげに眺めながら、魔人は醜悪な笑顔を見せた。
「グ……ハ……ハハハハハ……」
もはや人間の言葉すら、しゃべろうとはしていない。

しかしロイドも、必死に意識を繋いでいた。
仲間たちもすでに疲労の極みにあり、立つだけでやっとである。
それでもロイドたちは、瞳にたぎるような戦意を宿していた。
「……みんな……絶対に帰るぞ……キーアの元へ……」
「ええ……」
「分かってるぜ……ぐっ……」
「諦めてはだめです……最後まで……決して……」
ロイドは、祈るように目を閉じた。
「……兄貴……頼む……俺たちに力を貸してくれ……行くぞ！」
そして四人は、同時に最後の力を振り絞った。
「行くわ、アヴァロンゲート！」
エリィが、ありったけの魔力をつぎ込み、彼女が知る最も強力な魔法を発動した。
時属性の攻撃導力魔法は、ヨアヒムの頭上に降臨するや、真っ白い閃光となって、その肉体に急落下した。
巨大な落雷じみた一撃を浴び、ヨアヒムの身体が痙攣する。
『ソノ程度デ……！』
ヨアヒムは、肉体を焼かれながらも前進しようとした。
間髪入れず、ティオも魔導杖を突きつける。

「あなたが奪った命のために……ラストディザスター！」
叫びと共に、魔導杖から爆光が噴出する。
ティオが発動したのは、空属性、究極の攻撃魔法。
一直線にヨアヒムを襲い、その巨体を焼き尽くしながら、後方へ吹き飛ばす。
そしてランディも、魔人に斧槍の切っ先を向け、跳躍した。
「赤き夜の死に神よ、悪魔を貫け！」
猟兵の祈りを口にし、ランディは魔人の懐に飛び込んだ。
穂先は、ヨアヒムの心臓に深々と突き刺さり、背中まで突き抜ける。
直後に、灼熱がテスタロッサから放たれた。
戦技デス・スコルピオンが、ヨアヒムの胸部を爆砕したのだ。
『ガ……ハアッ……！』
爆発した刹那、エネルギー状の腕も消し飛んでいく。
だがヨアヒムは、なおも生命を繋ぎ、ロイドに腕を伸ばした。
『……返セ……キーア様を返セ……我ラノ《神》ヲ……！』
しかしロイドは答えもせず、地を蹴った。
その身体からはすでに、太陽の如き光があふれている。
光をまとったロイドは、ヨアヒムの頭上高くから、一気に衝撃警棒を打ちおろした。
「これで決める……！」

一撃は、ヨアヒムの脳天に命中した。

ロイド必殺の戦技、ライジングサンが巨体を真っ二つに裂いていく。

『ハ……ハハ……アアアアアアアアアッッ――』

それは、断末魔の叫びに思えた。

しかしヨアヒムは、元の声音を取り戻して、笑ったのだ。

『……ハ……ハハ……やるじゃないか……』

「ヨアヒム、お前……」

「忌々しいが……最後に正気を取り戻してくれた事だけは……礼を言う……」

真紅に染まったヨアヒムの肉体は、ぼろぼろと崩れつつある。

それでも魔人は、希望に満ちた顔で、天井を見上げたのだ。

『くくく……憐れみの目で僕を見ないでくれたまえ……見届ける事は叶わないが……我らが大望は成ったのだ……あの方は……キーア様はきっと……』

言いかけて、魔人は赤光と共に砕け散った。

まるで薬物の力に耐えきれなかったように、一片たりとも残さず四散する。

ロイドたちは、それが地底湖に吹きすさぶのを見守った。

「……哀れなものだな」

「……そうね……でも気にする事はないわ」

エリィの言葉に、ランディも笑みを取りもどした。

「ああ。あの薬を大量に飲んだ時点で、奴は助けられなかっただろう。俺たちだって、全能じゃねえんだ。ベストとは言わねえが……上出来ってもんだろ？」

「……そうだな……」

ロイドがつぶやくと、ティオも睫を伏せた。

「……かつての拠点制圧作戦では、多くの教団信徒たちが自決しました。避けられない犠牲も、時にはあるのだと思います」

「そうだな……ヘコんでる場合じゃないか」

ロイドは、衝撃警棒を腰に収めて、ひと呼吸ついた。

「まだまだ後始末は残っている。それにキーアや課長との約束も守らなきゃな」

それを聞くと、エリィもようやく微笑んだ。

「全員で無事に、あの子の元に戻る約束……それと課長に一人前と認めてもらう約束ね」

「ハハ……何とかどっちも守れそうだぜ」

ランディも、やれやれとばかりに斧槍を肩に担いだ。

そしてティオは、舞い散るヨアヒムの破片に手を伸ばした。

「……でも、できることなら、人の法で裁きたかったですね。そして自分の罪を受け止めて欲しかった……そうでないと……みんな、哀しすぎる……」

ロイドは、思った。

ティオは、そしてレンは、魔人の死で救われたのだろうか。

そして遥か時を超えて目覚めたという、あの子は……

しかしその答えは、まだ容易には出そうになかった。

ロイドは、傷だらけの顔で、傷だらけの仲間を見つめた。

「帰ろう、俺たちの街へ……キーアのところへ……」

それは長い一日が終わり、新たな一日が始まる、夜明けのことだった。

エピローグ

事件は、グレイス・リン記者によって大々的に報道された。

ハルトマン議長とルバーチェ商会、そして教団の残党の関係も暴かれた。

警察局長、警備隊司令両名は解任。

事件に関与した人物の多くが逮捕される結末となった。

これについては、マクダエル市長が徹底的な捜査を指示し、ソーニャ副司令、ダドリー捜査官の指揮のもと、悪政の一掃が始まったのだ。

そんな中、クロスベル国際銀行総裁、ディーター・クロイス氏が新市長に就任。

一方、現職のマクダエル市長は、逮捕によって空席が生じた補欠議員選挙に立候補し、早くも次期議長候補として各方面から期待されているという。

クロスベル市政は近々、ディーター＝マクダエル体制に移行すると見られていた。

だがそんな喧噪も、ロイドたちには縁遠いことだった。

彼らの心配事と言えば……

「本当に大丈夫か、キーア？」
ロイドは、少女の髪を優しく撫でつけてやった。
「初日くらいは付いていくよ。やっぱり心配だからな」
するとキーアは……真新しいカバンを抱えてにっこり笑った。
「だいじょうぶ。ちゃんと道も覚えたもん。学校くらい一人で行けるよー」
「だ、だけどさ……」
「ロイド、心配しすぎー」
キーアは、きゃっきゃっとはしゃいでいる。
それを困った顔で見つめるロイドに、エリィはもっと困った顔をした。
「まったくもう……ロイドってば親バカなんだから」
しかしティオは、不審そうにエリィの顔を覗き込んだ。
「……そういうエリィさんも、そわそわしまくってませんか？」
「う……こ、これはその、保護者の性というか、なんというか……」
ランディとティオも、眼を細めて言った。
「いいじゃねえか。キー坊の晴れの日だ。黙って見送ってやれよ」
「とは言っても、何だか子供を持つ親の気持ちが判る気がします」

もはや、キーアを狙う者もいない。
彼女は、一人のクロスベル市民として生きていけるのだ。
しかしロイドの胸中には、まだいくつもの不安が渦巻いていた。
五百年前、キーアは、どうして眠りに就いたのか。
そしてなぜ、競売会にいたのかも。

兄ガイを殺した犯人も判らず、ロイドの胸には暗雲が残っている。
だがそれを見透かしたように、セルゲイ・ロウが声をかけた。
「シケた面するな。お前らも、ディーター新市長から呼ばれてるんだろう？」
「あ、はい……それなんですけど、一体どんな用事なんですか？」
「さあな。それは新市長から直接聞いた方がいいだろう。とにかく今日は、お前たち全員にとって新たな一日になるはずだ。せいぜいしっかりやって来い」
「……分かりました」
ロイドが振り向くと、ランディがやるせない顔をしてみせた。
「どうやら、また忙しくなりそうだな？」
ティオは、平然とした表情を保っている。
「まあ、忙しいのは、いつもの事ですけれど……」
そしてエリィは、少女の手を取った。

「じゃあ、キーアちゃん。途中まで一緒に行きましょう」
「うんっ！」
四人の若者と、一人の少女は、連れだって歩き出し、ふと振り返った。
「じゃあ、行ってきます！」
その声に、上司がうなずき、神狼が吼える。
幾つもの高い壁を越えた、清々しい笑みがそこにあった……

＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

《……私ヲ……見ツケテ……》
《……私ヲ……》

あとがき

こんにちは、市川丈夫です。
ノベライズ版「英雄伝説　零の軌跡」もこれにて完結。
長大かつ、奥行きのあるゲーム・ストーリーを三巻に詰め込んでみましたが、お楽しみいただけましたでしょうか？

さて今回、五ページも「あとがき」が書けるそうなので、まずは各キャラクターへの思い入れなどを綴ってみましょうか。

最初は、ロイド。
これほど真っ直ぐで、王道的な主人公も珍しいですよね。
熱血、真面目、モテるけど鈍感……という鉄板主人公なんだけど、冴えた推理を見せる面もあり、すごくバランスが良いなあと。
王道キャラって、薄味になることもままあるのですが、ロイドの場合、絶妙な匙加減で成立している気がします。

実は作るの、難しいです。こういう真っ当な主人公。

次に、エリィ。
個人的には『彼女にしたい』と言うより、『仲間にいてほしい』子。
冷静で、知識があって、頼もしいですからねえ。
良い意味で、あまり女の子女の子していないところも、書きやすかったです。
弱い部分が見えてくると、俄然、可愛くなってきたり。
ランディは、書いていて、すごく便利な奴だなあと。
ボケられる、ツッコミもできる、戒め役もOKと、どの位置でもこなせるのは、最年長の余裕でしょうか。
本当は猟兵ネタも、もっと掘り下げたかったなあ。
軟派なシーンも、意外に少なかったかも……
ティオは、裏主人公ですよね。
この物語に一番長く、一番深く関わっていますから。
もしティオの視線からこの事件を描いたら、それもまた面白いと思います。
ガイに救われるあたりから始めるとか、両親との別れとか。

でもちょっと陰鬱になっちゃうかな……

一巻の「あとがき」でも触れましたが、セルゲイ課長は非常に好きなキャラクターです。

現場でバリバリ指揮を執っていた頃の課長も書いてみたいですね。

ダドリー捜査官の過去も、短編で書いてみたいかも。

かつての同僚ガイの死の真相を追う姿とか、警察を辞めて遊撃士に身を投じたアリオスとの確執とか。

いや、それ書くんだったら、アリオスとガイの話の方が楽しそうか。

そちらは、もうちょっと軽妙な感じで。

クロスベルの「あぶない刑事」だな。

それからセシル姉。

実は、「零の軌跡」女性キャラの中で一番好みでした。

その割りに出番が少ないじゃないか！　と自分でも思います。はい……

レンは、一番難しかったかもしれません。

彼女のすべてを物語に盛り込むには、前作ゲーム「英雄伝説　空の軌跡」のあの人たちも必要だし、それはちょっと分量的に無理だし、かといってレンを出さないワケにはいかないし……という事情がありまして。

ガルシアやツァオなど、敵役を書くのも楽しかったです。

よくよく考えてみると「零の軌跡」の敵役って、議長に会長、営業本部長に支社長と、ファンタジー要素の薄い肩書きばっかりですよね。

しかし政治経済がらみの巨悪を出すあたりも、「零の軌跡」の魅力かと。

そう考えると、ファンタジー要素が一番濃いのは、最終的なボスキャラだったあの人でしょうか（ここを先に読んでいる人のために伏せ字）。

あの人の、本当に酷いところが気に入ってます。

ああ、こいつ倒されても仕方ないな……と思える過去が。

キーアについては……

彼女を「零の軌跡」だけで語るのは、止めておきましょう。

キーアだけでなく、ロイドたちのその後を知りたい方は是非、続編ゲーム「英雄伝説　碧の軌跡」をどうぞ！

さあ、これで「零の軌跡」の執筆も終わりました。
この作品を書きながら、ああまた「零の軌跡」をプレイしたいなあと思いつつ、とてもそんな時間は無かったので、これでようやく再挑戦できます。
ただ、続編「碧の軌跡」と続けて遊ぶと、すげー時間かかるんですよね。
それだけ至福の時間が味わえるのが、たまらんのですが。
最後までお読みいただきまして、ありがとうございました。
それではまた、いつかどこかで。

二〇一三年　二月　自分の誕生日に
エリィのスイートケーキをいただきつつ
市川　丈夫

富士見
DRAGON BOOK
560

英雄伝説　零の軌跡③
クロスベルの一番長い日

平成25年3月25日　初版発行

原作＝日本ファルコム株式会社
著者＝市川丈夫
発行者＝山下直久

発行所＝富士見書房
〒102-8144
東京都千代田区富士見1-12-14
http://www.fujimishobo.co.jp
電話　営業 03(3238)8702
　　　編集 03(3238)8939
印刷所＝旭印刷
製本所＝本間製本
装幀者＝岡村元夫
2013 Fujimishobo, printed in Japan
ISBN978-4-8291-4717-7 C0176
©2013 Nihon Falcom Corporation.
©2013 Takeo Ichikawa, Katsumi Enami, Kashiwa

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

※定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。角川グループ読者係までご連絡ください。（古書店で購入したものについては、お取り替えできません）

電話049-259-1100（9：00～17：00／土日、祝日、年末年始を除く）